

## 『 04 Philippines Work Camp 』 個人報告集

### 出会いの奇跡

社会福祉学科1年 加藤 良典

日本に帰国してから随分と日がたちました。私は今、秋学期からの授業にもようやく慣れ、休み時間には久しぶりに会った友人達と談笑し合いながら昼食をとり、休日にはサークル活動をするなど春学期と変わらない平凡ながらも楽しい大学生活を送っています。しかし私は近頃、フィリピンワークキャンプでの日々を思い出すたびに私の中で懐かしさとはまた違う思いが生まれ、私の胸の奥は熱くなりあの日々の光景が鮮明に蘇ってきます。その理由を説明することは出来なけれども、フィリピンワークキャンプに参加するまで、一緒にいられること、一緒に過ごしていけることがこんなにも尊くて愛しく思えたことはありませんでした。

その始まりは9月9日、一期一会”smile makes us family”をモットーとした私達が初めて実際にワークをするマニラ近郊の都市マングラヨンの中に位置するマカテュリン村に着いたときからでした。強い日差しのなかでも元気に遊んだり走り回ってる子供達、明るく私達に挨拶をしてくれる人々、面白い形や素敵な色合いの家々、まるでおとぎ話に出てくるような穏やかな世界が私達の心からワークキャンプに対する不安や緊張を静かに流れさせていき、穏やかな気持ちを潤わせているようでした。マカテュリンの人々からの盛大な歓迎を受けた後、いよいよ5日間にわたるワークが始まりました。内容は既存の家の2階部分の増築と新たな家作りのための地盤の形成。現地の人々の指示を聞き協力し合いながらブロックなどの物の運搬やセメント作り、地面をひたすら掘っていくことが主な作業です。休憩は1日に3回、マカテュリン村のチャペルで休ませてもらいました。休憩中はマカテュリンの人々に作ってもらった美味しい昼食やおやつをいただいて、その後に私達とマカテュリンの人々でお互いの自己紹介や会話を交わしあい、一緒になってバスケットボールやダンスをして気持ちを高揚させ、それと比例して多くの人々とのネットワークも広まっていき、ワーク終了時の時間帯になると何十人もの人達がチャペル前に集まり、皆が楽しめるお祭りのような活気を出しながら村全体を盛りあげていきました。

しかし私達の日本での生活からは、かけ離れすぎていてあまりうまく想像がつかない世界の状況が、この2週間の間に私達の心の中に響き渡っていきました。誰もが危険にさらされてしまう劣悪な交通状態、1時間の集中豪雨で洪水が起きてしまう状況、夜の道路で何かを売るために働いている少年達、フィリピン人と日本人の間にできた子供の国籍上の問題、そして国中から必要のなくなった物が捨てられるスモークマウンテンと、生きるためにそれらを受け入れる人々。大人だけではなくまだ幼い子供達までもが、何らかの強い鎖にしばられているのです。本やドキ

ユメンタリー番組でしか知ることの出来なかったフィリピンの今が私達の目の前に延々と広がっている。その今は、私達に世界の悲しみや嘆きを静かに語っているようでした。さらに自分達の活動拠点であるマカテュリン村でも、私達はミネラルウォーターを飲むのに現地の人達には禁止されている事実に気が付いたときにも大変なショックを受けました。それと同時に、何人かのメンバーは本当の意味でのマカテュリンの人々の助けになっているのか、もしかしたら矛盾した行動をしているのかもしれないと悩んでいました。私達のために、美味しい昼食やおかしを用意してくれるのにいつも残してしまうこと、チャペルという荘厳な場所を貸してもらっているのにゴミを整理しないで帰ってしまうこと、私達の活動について夜遅くまで話しあったこともあり、そしてフィリピンワークキャンプをチームとしてどうしていくべきかがわからなくなってきたのです。

しかし、チームの自信を失いかけたとき、そんなときでも、私達の心の支えとなり悲観的な考えを洗い流してくれたのは、現地の人々、先生、メンバー達、このワークキャンプの場で一緒に過ごしてお互いに共通の目的を持った仲間達だったのです。常に私達に思いやりを持って接してくれた現地コーディネーターの方々、たくさんの笑顔を見せてくれたマカテュリンの子供達、そしてたった1日しか出会えなくてもオリジナルダンスを披露してくれたスラムの子供達や、日曜礼拝の時に優しく話しかけてくれたおばさん。たとえつらく厳しい現実がフィリピンに重くのしかかっても、常に明るくて元気を爆発させている人々、そして何より、どんな時でもメンバー達の全てのものを受けとめて包み込んでいく姿に私は、心の中に大切な人への感謝、もう一度挑戦していける精神、私達全員と一緒にいられる喜びが一筋の光となって届いているように感じられました。

私はこのような人と人との関わりが本来の社会だと思います。多くの問題や偏見の存在するこの世界に、一人の熱意が浸透することは難しいです。だからといって見て見ぬふりは絶対にしたくないです。人間は一人では生きていけない。手と手を取り合って支えあって生きていける。そこから世界に目を向け、自分達の両手を差し延べることは大いに可能なことなのです。現在を生きる私達は全ての人達との間に共生の歩みを実現させる役割を担っていると思います。そのためにも、他者があるがままに受け入れて認めていきたいです。それこそが、私達のモットーとなる一期一会“smile makes us family”の極意になると思います。そして、この世界にはひとりひとり、色々な個性を持った人がそれぞれの今を一生懸命生きています。一人の人が一生のうちに出会える人はほんのわずかということになるでしょう。この広大な世界の中の日本とフィリピンという2つの国の人達が、出会えて一緒に過ごしながら何かに向かって一致団結出来、ひとりひとりの今をお互いに尊重できて好きになれることはとても素晴らしいことです。私はこのワークキャンプでこの大切なことをもう一度教わりました。国籍や文化を恐れずに真摯に人と向き合い、楽しく一緒にいられることが出来れば、その輪ははてしなく広がりその中で培われた経験がきっと世界の平和に繋がっていくのではないのでしょうか。

# Never lasting my episode of the summer

国際学科1年 山内 彩恵子

19年と2ヶ月生きてきて、これほど輝いていた14日間を過ごしたことはなかった。

9月8日から21日にかけて、私はフィリピンワークキャンプに参加した。フィリピンに行く前日から胸の鼓動は鳴り止まなくて、自分の果たすべき役目は成し遂げられるのだろうかと不安と期待が入り混じった緊張が自分の中にあった。

マニラに着いて、とても目立つ大型バスに乗り込み、滞在先のホテルへと向かった。その途中に次々と目に入り込む、生まれて初めてみる街の風景に唖然としていた。6車線の道路に埋め尽くされる車とジープニー、信号もろくにない車道を自由きままに走っていくドライバー達、その間を平気な顔をして通り過ぎながら水や何かを売っている少年達。街のあちこちには巨大な看板が待ち受けていて一見華やかさを主張しているかのように見えるが、その裏はボロボロでフィリピンの社会を表しているかのようにも見えた。川の見える橋を通りかかると思わず見入ってしまうほどの数のゴミが川を包み込んでいる。でも、人々はなぜか見ていると安心できた。どこことなくのんびりしていて穏やかさのある印象を受けた。

14日間の滞在のうちで一番衝撃を受けたのがやはり初日だったと思う。初めて見るフィリピンの現状と魅力が一気に私の目の中に入ってきて1人カルチャーショックというものをしみじみと実感していた。

ワークは次の日には始まっていた。日本で調達した初めて着る作業着に仲間達と興奮気味で見せ合いっこをした。朝の9時前には滞在先のホテルを出発して、ジープニーでワークサイト先のマカチュリン村という所に向かった。正直、ワーク初日はどうサイト先の人々とコミュニケーションをとっていいかと心配していた。しかし、マカチュリン村の人々はフィリピンスマイルで温かく私達を迎えてくれた。そして、いざ作業に入っていくと私も周りの仲間達もマカチュリン村の人達とはにかみながらもコミュニケーションを自然にとっていた。言葉は英語が通じるから大丈夫と思っていた甘さを痛感。英語と同じようにフィリピンでの公用語のタガログ語を話していることに気づき焦りを覚えた。でもそれほど彼らと交流することに壁を感じなかった。

ワークの内容は主に砂運びやブロック運び、コンクリート作り、家の壁の骨組み作り、穴掘りなど多様な仕事があった。休憩時間が昼を含め3回ほどあり、その時間にはマカチュリン村のナナイ達(タガログ語でお母さんという意味。)が愛情込めて作ってくれたフィリピン料理を味わった。14日間のうちワークをする日はバナイのサイト先を訪れた時に働いた1日を含め6日間だった。6日間だけでも一生分の汗をかいたともいえるほど充実した日々だった。

幸い大きな怪我も病気も誰もかからずワークは最終日を迎えた。フェアウェルパーティーは夜遅くまで盛り上がった。あいにくの雨で練習を積み重ねてきた座頭市と応援は、晴れた満天の星空の下でできなかったけれど、大成功だった。

私の1つの目標が達成した瞬間だった。メンバー全員が健康でワークをやり遂げること、そし

て楽しみ抜くこと。

ただ、楽しさと充実した日々もあったがワーク期間中には目を背けてはいけないフィリピンの現状にも出遭った。パヤタスに行きゴミ山を目の当たりにした日は皆、言葉を失っていた。しばらくの間、私達のいた空気がしんと止まるような沈黙が流れていた。私は自分が聞くことのできる全てのゴミ山についての事実を聞こうと思い、話してくれるスゼッツ(マカチュリン村の一員。14日間、私達と一緒にいた学校で英語を教えている先生)の英語に必死に集中していた。ゴミに埋もれて死んでいった多くの人たちの話、ゴミ山で育っていく子供たちの話、悪性の病気にもなりうる危険のある環境だという話。

色々な知られざる話を聞いて思ったことは、「自分が生まれてから育ってきた環境と今ここにいるフィリピンの環境との大きな差異」ということだった。健康でいることができる安全な環境に生きてきたという幸せ、お腹をすかせず食べられる幸せ、裸足で歩いて走っても傷つかない場所にいる幸せ、学ぶことができるという幸せ、忘れかけていた無関心だった色々な小さな幸せの在り方に実感した時だった。そこで、現実を見て思ったことは「その時、その瞬間ごとに自分ができる精一杯で、生きること」「生きているということ思い切り幸せだなと感じること」であった。

何となく時間に流されて、毎日やらなければならないことを片付けていき、また同じ時間が自分の中で流れていく。そのような普段の生活にあまりにも慣れてしまっていた私は、フィリピンに来て毎日忙しくも、自分と向き合う時間と周りに何があって何が起きているのかと把握する時間を持ち、色々なことを考えることができた。自分自身を見つめる時は並以上の勇気とエネルギーが必要なのを知っていたからかもしれない、もしかしたら、日本で生活していて自分と向き合う時間があってもどこかで面倒くさがって、事実を知るのが怖くて逃げていたのだろうと思った。

それでも、ワークキャンプで自分を見つめ直せたのは、たくさんの人たちとの出会いとその人たちが持っているエネルギーと情熱をひしひしと感じたからだと思う。6月30日から26人のメンバー達と出会って以来、本当に貴重な時間を歩んできた。私はどんな人でも出遭ったら、それは「運命」だと信じる。だがこの26人は特別で「運命」以外ありえなくして集まったのだと思った。1人1人が個々に持っている情熱が何よりもチームをいいものにしていったのだと思う。ワークキャンプはチーム作りが目的ではないと言いつたが、やはり時間が経つに連れてワークキャンプに参加することの意味と同じくらい、チームとして、仲間同士としての信頼が大切なのだと分かってきた。学生リーダーの立場としてチームを見ていなかったら、おそらく全く違う見方をしていたかもしれない。自分なりの精一杯でチーム全体を見ることができて良い経験になったと思う。本当にみんなには支えられました、ありがとう。

このチームのリーダーになって心から良かったと言える。学生リーダーに立候補した時に生まれた自分の中の「一、学生リーダーとして今年のフィリピンワークキャンプで勤めを果たしたい」という衝動を信じて行動して良かったと言える。あの時はものすごく勇気が要ったけれど、自分が行動しなければ本当に何も始まらないのだと実感した。

帰国してからは淋しさとフィリピンでの生活のギャップがあり、ほんの少し葛藤もしたけれど、まだまだ私達はこれからなのだ信じている。先の見えない未来に不安を抱くよりも、先が分からないからこそ、色々な可能性を秘めているかもしれない。ただし、何も行動を起こさなければ、それはただ、夢の中にいて夢を語っているだけにすぎないと思う。だから、これからも心にチカ

ラを入れて、誰かに見られて恥ずかしく思うよりも自分が見つめた時に恥ずかしく思わないように精一杯、そして丁寧に「私」を生きていこうと思う。

「私」は私にしか生きることができないから、丁寧に小さなことでも嬉しかったり、悲しかったり、辛かったり、楽しかったりと感じることでできる幸せに気づいて噛み締めていこうと思う。

## 出会い

芸術学科1年 市川 あゆみ

私にとって人生初めての海外、フィリピン。不安だらけで日本を出たのに、フィリピンに着いたら不安なんてどこへやら。様々なことに衝撃を受け、不安なんて考える暇が無かった。空気が悪い、交通状況が悪い、信号が無い、看板が多い、マック(マクドナルド)が有る、ケンタ(ケンタッキーフライドチキン)が有る、コンビニが有る、ホテルがきれい。初日の日記にはこんなことばかりが書いてある。かなり興奮していた模様。

私がなぜフィリピンワークキャンプに参加しようと思ったか。実ははっきりいって何故だかわからない。事前研修会のときに何度かその「何故」を一人一人話す機会があって、私も話した。アジア学院での経験がどうしたこうした、と話した。それは決して嘘ではないけど、それが参加を決める決定打になったわけではない。ワークキャンプの存在を知ったとき「行かなきゃ」と漠然と思ったのだ。

そんな私がフィリピンに行ってみて。とにかく全てが私にとって非日常。初日の興奮冷め遣らず、マカチュリン村に到着。私が想像していたワーク現場と全く違う。私が想像していたのは、自然の中の広い更地に質素な家が立ち並んでいる、という具合だったのに、マカチュリンはカラフルな二・三階建ての家が隙間無く並んでいた。かわいい子供達が良い香りのする花のレイを首にかけてくれた。チャペル前の広場で自己紹介したりされたり。一通り説明やらが済んだら、踊る。マカチュリンの人々はよく踊る。そしてワークが始まる。ブロックを運んだり、針金を切ったり、砂を袋に詰めたり、単純作業である。ワークの合間に子供と遊んだり、おしゃべりしたり、セクシーなお姉さんにダンスを教わったりする(後にオカマとわかるが...)。同い年くらい女の子のおしゃべりは楽しい。彼氏いるの?、あのひと紹介してよ、などなど、くだらないお喋りを笑いながらするのが非常に楽しい。ワークをしているときも、ホテルに帰っても、いつもだれかとお喋りをした。

フィリピンに来て初めての日曜日は礼拝に行った。カトリックの礼拝だったが、教会にいる人々の表情は、日本のプロテスタントの教会にいる人々と全く変わらない。みんな礼拝を大切にしているのだ。私が通っていた中高一貫の私立校は、どんなときでも礼拝から一日をスタートさせていた。毎朝の礼拝は勿論、体育祭や文化祭の朝も礼拝を行っていた。それなのに、礼拝から一日をスタートさせられることに感謝することを、フィリピンの教会で初めて素直に感じた。礼

拝を大切にするフィリピンの人々の顔を見ていたら自然にそんな気分になった。礼拝の後、パヤタスのゴミ山へ行った。ゴミ山で働く人、ゴミで遊ぶ子供、物珍しい顔で私たちを見る人々。そんな人々の顔に悲壮感はなかった。パヤタスに着いた時、臭くて臭くてたまらなかったが、少しいる内になれてしまった。そんなものなのかもしれない。パヤタスから帰った後、いろいろ考えた。その日の日記には「いろいろ考えすぎて、デフレスパイラルみたいな状況」と書いてある。フィリピンに来なければ知ることがなかった様々なこと。それを知った私は何をすべきか、日本に帰ってきてからもまだ考えている。

ワーク最終日の前日にはホームステイもした。ワークキャンプメンバー全員がマカチュリン村のどこかにホームステイした。私がお世話になったのは、チャペルの横のサリサリストアを営む家だった。その家の二階の窓からはチャペル前の広場がよく見えた。私が窓から広場を眺めていると、あゆみもこっちにおいでよ、とみんな明るく話し掛けてくれた。ステイ先には三姉妹がいて、長女とは年も近くて、いろいろお喋りをした。私のつたない英語を、理解できるまでじっくり聞いてくれた。マカチュリンの人々はみんな親切だった。私の英語力が低くて、何を言っているんだかよくわからなくても、私が何を伝えたいのか理解しようとしてくれた。とても居心地が良かった。マカチュリンの人々は、私達が笑顔でいられるよう、すごく気を使ってくれた。マカチュリンにいることが楽しかった。

日本に帰る日が近づくとつれて、今まで無かった不安ができ、次第に大きくなっていった。日本に帰ったら日常の波にもまれて、フィリピンのことなんか遠い過去になってしまうのではないかと。事実、日本で今の生活の中でフィリピンワークキャンプは過去の思い出である。フィリピンでの忘れられない出会いが沢山詰まった思い出。その過去をどう上手に使いこなして現在に繋げ未来に発展させるかが、今私の専らの課題である。

## フィリピンで感じたこと

国際学科1年 山田 園子

「フィリピンに行ったら、一体自分はどう変わるのだろう。」

これが私の最初の戸惑いでした。自分がどんな風になるのか想像つかないし、変化することを避けたいと逃げている自分がいました。一方で、せっかく大学に入ったのだから、この大学でしか出来ないことをやろうという気持ちも、胸の中にありました。

そんなときに見つけた、フィリピンワークキャンプの知らせ。参加するか、相当悩んだあげく、勇気を出してワークキャンプへの応募を決めました。この選択が、この夏を本当に実り多いものに変えてくれました。

フィリピンでの二週間は毎日が新鮮で、今振り返ると、本当に中身の濃い時間をすごすことができました。全てが楽しいだけでなく、つらいと思うことももちろんありましたが、一つひとつ

がどれも私には珍しいことばかりで、驚きや発見の連続でした。そのなかで特に心に残ったものを、ここで述べたいと思います。

フィリピンにいて、まずはじめに感じたことは「音楽は国境をこえる」ということです。確かに言葉はコミュニケーションの一つの手段ですが、例えそれが十分じゃなくても、人は通じ合えると気づきました。歌やダンスなどの音楽を通して、私たちはフィリピンの人と心を通わせることが出来たと思います。フィリピンの人々はみなダンスが得意で、小さい子どもからおばあちゃんにいたるまで軽やかなステップを踏んでいたのが記憶に残っています。また、日本の歌も少し輸入されているのには驚きました。常に音楽があふれているように感じました。

常にあふれているのは音楽だけではありません。笑顔もそうです。フィリピン人の笑顔の輝きっぷりには心が動きました。私にも自然と笑みが浮かんできました。笑顔でいることは気持ち明るくなるし、互いの距離を縮めてくれるのです。あの笑顔は一体どこから出てくるのか今でも不思議でたまりません。

また、ワーク最中に訪れた川についても忘れることができません。その川はマニラ付近を流れるパッシグリバーと呼ばれる川で、私たちは何しにそこへいったかという、ワーク現場で出た土くずに混ざったゴミをそこへ運び、捨てていたのです。いわゆる 不法投棄 といわれるものです。ここで自分がフィリピンに来た意味を改めて問うことになりました。

「私は、フィリピンの人々の生活状況をよくするためにここまで来たのに、今私たちがやっていることはまったく逆のことではないか。」と、そう自問するようになりました。何のために来たのか、自分はどうしたいのか分からなくなりました。フィリピンでは、お金を払えばきちんとしたゴミ処理を行うことが可能です。しかし、私たちがした行為は法律に反したことだったので、この旅に参加した意味もわからなくなり、悩みました。

そういった疑問について考えていくうちに、(いまだに答えを探し続けているのですが……) 私はひとつのことに気がつきました。それはこの旅に参加しなかったら、その現実に向き合えなかったらということ。あの時川に行くことがなかったら何も知らないままだったでしょう。実際あの川へ行ったメンバーはごくわずかでした。このことを伝えるのが今私にできることだと思い、ここに書き残しておきます。

それにこの現実を伝えたいと思ったのは、日本でも起きていることだからです。山中や海中への不法投棄は日常的に行われていると聞きます。自分の足元に落ちている問題にも目を向けなければ意味がないと確認したのです。フィリピンを通して、日本の現実にきちんと向き合おうというきっかけをさらに与えられたように感じました。

そして、最も印象的だったのは、ワークキャンプの4日目に立ち寄ったメガモールで見た光景です。フィリピンには“モール”と呼ばれる、いろんなお店が集まったショッピングセンターがあります。そこは主にアメリカや日本など、先進諸国の多国籍企業のお店が立ち並んでいて、本当にモノで溢れた場所でした。私たちは買い物を楽しむためにそのモールに行ったのです。

数人のメンバーとモール内をぐるぐる歩き回っていた時、人々が広場に集まっているのを見かけました。そしてみな、手を胸の前にかざし、何かに視線を合わせているようでした。その行動が気になり、近くまで寄ってみると、広場の中心では礼拝が執り行われている最中でした。辺りは神聖な雰囲気立ち込め、誰一人話をしていません。皆、熱心に神父の語りに耳を傾けていました。付近にあったエレベーターさえも停止していて、夕方の時間帯だったので買物客でにぎわ

っていたにもかかわらず、その広場だけ時間が止まったように見えました。

私は、この光景を目にしたとき、フィリピン人のココロに出逢えたように感じました。フィリピンは大半の人がキリスト教を信じており、国教でもあります。人々の心には常にキリストがいて、それが自然に人々をつないでいるのだと。だから、礼拝をしていてもいつのまにか人が集まり、むしろそれが当たり前のようにも感じました。

そしてちょうどこの日は9月11日。私が出会ったのは三年前の同時多発テロの被害にあった人々への追悼礼拝だったのです。残念ながら私は、メンバーの一人がそっと教えてくれるまで気づけませんでした。そのことを知った瞬間、フィリピン人の感受性の豊かさや会ったことのない人にでも思いやりを持つ心の豊かさ、優しさを垣間見たように感じました。

そして、フィリピンの人がうらやましいとさえ思いました。なぜなら、どんなに育った環境や場所、年齢、性別が違えども、人々の心の中にキリスト教という共通のものがあるからです。

そう思った時、私はふと考えました。果たして日本にはそれと同じような、人々に共通するものはあるのだろうか。あるならば、それは一体何だろう？

宗教的に考えると、日本には国教はありません。ほとんどが無宗教であり、仮に宗教を持っている人がいても皆、同じ宗教とは限りません。人それぞれ信じているものがちがいます。しかし、私はこの状況を否定しません。むしろ、いろんな考えを持つ人があふれている日本は、そういう意味で、多様で複雑な一つの文化を形成しているからです。

ならば、宗教以外で人々が共通に持っているものはあるかと深く考えた結果、たどり着いたのは“平和への願い”という認識でした。すべての人に当てはまるのかどうか分からないし、勝手な想像だけれども、日本人の心の片隅には「戦争はいやだ、大切な人たちと安心して暮らしたい」という思いがあると私は思っています。この気持ちがもっと意識されるといいなと感じています。というのは、最近の世界状況や日本政府の対応を見ていると、平和というものが脅かされているようだからです。

「平和」という言葉は簡単に使えるけれど、実践するのは大変難しいもの。だからこそ、大切にしていかなきゃいけないのです。フィリピンで見たのは、至るところにいる警備員すべてが常に銃を装備していたこと。それを見て、いかに日本が平和かを痛感しました。私たちは常に平和を求め続けなければいけないとも感じました。

フィリピンへ行って得たものは、計り知れないほど大きく刺激的でした。言葉で表現するのが本当に困難なくらい、たくさんの思い出があります。私はこの旅で一回りも、二回りも変わったと実感しています。フィリピンで出会った人々や出来事、経験をこれから大切にしていきたいし、またこれらは新たなステップを踏むための一歩となってくれと思います。

最後に、こうやってこのワークキャンプに参加できたのは私の力だけではありません。数え切れないほどのたくさんの人の協力があって、実現されたものです。この恵みに感謝して、私の報告を終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。



# フィリピンに行って

国際学科1年 勇内 康秀

フィリピンでは色んなところに訪れた。パヤタス(スモークマウンテンのあるスラム)に訪れて日本人であることへの歯がゆさや悔しさを感じた。常々僕は人を見るときにその人の生まれや環境で見るのではなく、その人を何の偏見もないただ一人の人間として見るようにしている。もちろん、フィリピンにいるときもそうしていた。だが、パヤタスに行って向こうの人達を見て、スモークマウンテンを目の当たりにして、どんなに僕が相手を何の偏見や差別無く見たとしても、むこうの人達は僕を日本人としてのフィルター越しにしか見ることができないのではないかと感じた。日本からもきているという大量のゴミの山からゴミを拾うことによってなんとか一日の生活費を稼いでいる人々。トタン屋根や雨が降ったら漏れてくるのではないかと思うような家に住む人達。たとえ僕がその人達の為になにかをしようとしたとしても日本という裕福な国に生まれたからできるきれいごとや偽善、そんな風にとられてしまうような気がして何もできず、何をしようともせずただ見て歩き回った。生まれた場所が違うというだけのことなのに圧倒的な違い。日本にいるときは関係ないと思っていた人種のこと。もし僕がアジアの他の国に生まれていたらこんなことは感じなかったのかと思うととたんに歯がゆさと悔しさが込み上げてきた。

そんな僕の悩みを吹き飛ばしてくれたのはパヤタスで一緒に遊んだ小さな女の子だった。一緒に踊ったり歌ったりして遊んでいたその女の子、はまるで僕の悩みを察したかのように帰り際に別れを惜しみ、とびっきりの笑顔で抱きついてきてくれた。その時僕は冗談抜きでこの子のためなら死んでもかまわないと思った。確かに僕のことを日本人としてしか見てくれない人もいるだろう。偽善だと思われることもある。だけどこんな風に僕に笑顔を見せてくれる人が一人でもいるならどんな小さな事だっていい、その笑顔のためになんだってしてやると心の底から思ったのだ。僕がそう思ってから難しい事は考えなくなった。考えて悩んでいるくらいなら行動しようと思ったからだ。

バティスではジャパニーズフィリピーノの話を書いて日本人の責任について考えた。ジャパニーズフィリピーノとは日本人とフィリピン人の間に生まれたハーフの子供のことだ。大抵の場合は日本人の父親とフィリピン人の母親から生まれてくるケースが多いらしい。最初僕は決して深くも考えずフィリピンパブを想像しただけだった。しかしそこで話を聞いていくうちにこんなことがわかった。1.多くの母親たちが日本での高収入な生活を夢見て日本に来て、やくざ等にだまされて子供ができてしまったこと。2.日本では子供の国籍を得るためには出産前に手続きをしなければならぬという事実を知らずに産んでしまい、子供をフィリピン国籍にした人がとても多いこと。3.夫はいなくなってしまうのだが奥さんが日本で生活するために名前を使うことはできる。だが、子供が戸籍にのっていないため日本では一緒に生活できずフィリピンで生活していること。4.そこにいた人達の大半がまた日本で生活したいので、どうしたら子供に国籍を得させることができるかと話し合いをしていること。この4つのことをまわりのおばさんに通訳してもらった。これを聞いて僕は何も知らないんだと実感した。僕は何か行動を起こすか

どうかは置いておいたとしても、知るという事にまず日本人としての責任があると思う。

今回のフィリピンワークキャンプで一番感じたことは百聞は一見に如かずということだ。僕は事前の研修会でフィリピンについて色々なことを学んできた。歴史や食文化などに始まりスモーカーマウンテン、ストリートチルドレンなどの僕から見れば負の部分についても学んだ。事前に学んだときもそのことには真剣に取り組み考えてきた。しかし実際に現実を見たときの衝撃は想像をはるかに超え、考えることもできずただ感じただけだった。確かに事前に学んでいくことも心構えのうえでは重要だ。しかしどんなに紙や映像の上で勉強してきても所詮一回体験したことにはかなわない、それを感じた。

## Everything is in a circle

国際学科1年 原 咲子

“ The circle is good.

Neither beginning nor ending is there. The circle is endless, eternal.”

CCP - Culture Center of the Philippines とは、ホセ・リサール公園に程近い、大きな文化センターのことで、フィリピンの先住民族を紹介する展示室や、さまざまな催し物が開かれる場所だ。帰国直前の9月19日、マニラでの自由行動の時間に立ち寄った。そこでは、フィリピンのある女性アーティストの展覧会が開催されていた。私たちは引き寄せられるようにして足を踏み入れた。ポタンや布を貼り付けた上に、斬新な色遣いの油絵の具がのせられた作品が、真っ白い壁紙の広い部屋に所狭しと飾られていた。それら鮮やかなコラージュ作品のモチーフになっていたのが、「circle」であったのだ。そこに添えられた、作者のこの言葉。日本帰国を目前にして、フィリピンで過ごした2週間は自分にとって何であったのか、を代弁してくれているかのようであった。

### *Do for others*

私がこの言葉に初めて出会ったのは、入学式だった。小中高と公立学校で育った私は、キリスト教とは縁遠く、「他人のために何ができるだろうか」という、キリスト教的観念に基づくヘボンの問いかけは、とても新鮮に聞こえた。

明学を知った時点で、「もし入学したら絶対やってみたい!」と思っていた“ワークキャンプ”。参加者を決める、金井先生との面接の際に、「Do for others.」を引用しながら、思いの丈をうち明けた。「今、自分の出来る限りのことをしたい。」本心だった。しかし一方で、“国際学部生”である自分は、この先4年間、何を学んでいこうかという目標のようなものが見えれば、とも考えていたし、英会話の能力を試したい、それから日頃自分が簡単に口にしている“貧困地域”の実情をこの目で確かめたい、という思いもあった。私は、「何かをしてあげる」という意味での

ボランティアをしようと思ってフィリピンへ行ったのではない。むしろ、現地で出会う沢山の人から、ものから、学ばせてもらおうという期待をしていたのである。出発直前、「こんな中途半端な思いでいいのだろうか。」と考えたり、他のメンバーとの意識の食い違いがあるだろう・・・と一抹の不安を感じたりもしていたのだった。

### 黄色いポロシャツよく似合う、ゴンザレス市長

なんと、私たちはフィリピンに到着した日の夜、“マンダルヨン市”の市長、ゴンザレス氏に夕食会に招かれたのだった。何でも、日本の大学生が自分たちの市を訪れてくれた、ということに大変喜んでくださったと言うことだった。ゴンザレス市長のお話が、私の心に深く響いた。

「あなた方が、私たちの市を選んでくれたことが、非常に嬉しい。ここは、豊かな市ではないかもしれない。しかし、どんなに貧しくても、人々は決して笑顔を絶やすことがないのです。」

涙が出て、思わず隣に座っていたメンバーのTシャツの袖に顔を埋めてしまったが、これから自分たちが向かう村は、きっとすてきな場所なのだろう、と想像することができた。そういえば、私たちが約1週間ワークをさせていただいた、マカトゥリン村の人々の目はとてもきれいだった。焼けた肌に白い歯と目が輝くその顔は、「友達と遊ぶのが本当に楽しい」「ご近所さんはみんな家族みたいに仲が良く、毎日が幸せで・・・」と訴えかけてくるような、そんな本当に自然な笑顔だったのだ。涙は、目の中の不純物を流し出してきれいにする役割をしてくれるらしい。村で出会った人々の、お父さん・お母さん、もしくはおじいさん・おばあさん...が60年前に流した涙が、彼らの美しい瞳を生み出したのかも知れない。

「あなたが来てくれるだけで嬉しい」

日本でそんな言葉を自然にかけてもらうことが、今まで何度あっただろうか。

### 息をのむほどの...高級ホテル

目を疑った。ここが、これから約2週間お世話になるホテル...。寝ている間に体中蚊に刺される、シャワーは水しかでない...大変失礼だが、私はフィリピンでの生活をこのように想像していたため、ステンドグラス張りの宮殿のような建物を前に、開いた口がふさがらなかった。部屋は6人用の洋室で、24時間冷房がつく。トイレが2つ、小さなキッチン1つ、シャワールームが2部屋、テレビが2台。毎日一人1本のミネラルウォーター(約500ml)が支給される。本当に、何不自由なく過ごすことができる環境だった。日本での生活と何ら変わらない、むしろこちらの方がいい生活が出来るというくらいであった。明日から私たちは建設作業の手伝いに行くというのに、自分はこんないいところに泊まって、フィリピンへ、私は何をしに来たんだっけ。矛盾が頭の中を駆けめぐる。私は初めて「フィリピン人は日本人のことをどのように見ているのだろう」と思った。出発前、事前研修会で、「先進国は、発展途上国の多くの人々の生活を搾取しながら、利益を得ているのだ」ということを学んだ。ある人は日本人を見て「フィリピンの土地を奪う人々」と思うだろう。また他の人は、「多国籍企業を自分たちの国に進出させた国、日本。私たちの雇い主、日本。」と見るかもしれない。物乞いをする人々は何を感じながら、巨大バスにわずか27人で乗る私たちの姿を見ているのだろう。自分たちが、アメリカに次ぐ世界第2位の先進工業国、日本から来ているのだということを改めて実感した。

### 初めてかけられた言葉は

私たちが泊まっていたホテルからバスで約2時間かけて、Slum Areaに到着した。事

前研修会で「忘れられた子どもたち」というドキュメンタリービデオを見て、フィリピンのごみ山のことを知った気になっていたが、実際目の前にすると、今までの自分の人生の中で、最も衝撃的な風景とも言えるものに対面することになったのだった。

はじめは、自然の、本物の山だと思った。しかし、近づいていくと、それはまさにごみ山であったのだ。その村には今までにもたくさんの外国人が見学に訪れたのだろう、「また来たか」という目で見えてくる人々が多くいた。自分たちが建設作業をしていた「マカトゥリン村」とは明らかに格差があるのだろう、と思わせるものが子どもたちの表情から見て取ることが出来た。フラフラ歩く犬に怯えながら、立ち並ぶ家々の間を通り抜けていくと、4歳くらいの子どもの私が私に話しかけてくれた。

「どうもありがとう」

唯一知っている日本語だったのだろうか。胸の詰まる思いがした。

ごみ山の中には、日本で私たちが何気なくごみ箱に投げ入れるようなものがたくさんあって、それらを大切そうに拾い集めている幼い子どもたちがいた。そんな光景を高いところから見下ろすことしかできなかった。自分たちが日本で捨てたごみはフィリピンと繋がっていて、ここに集積されている・・・大げさだが、こう感じさせるものがそこにはあった。劣悪な衛生状態を変えるにはごみ山の撤去が必要...しかし廃品回収、交換によって生計を立てている彼らにとって、ごみ山を無くすことは生活を奪うことになるのかもしれない...。じゃあ何が出来る、という答えを見つけれないまま、呆然とその場を見つめることしかできなかった。

## ゴナリン

この名前を聞き出すまでに、何日かかっただろう。私がマカトゥリン村で一番仲良くなった子だ。「What your name?」とたずねると、困った顔をした。照れ屋なのかな、とはじめは思っていたが、徐々に村の中には「タガログ語のみを話す子」「英語とタガログ語を話す子」とがいてわかった。人懐っこくまとわりついてきては、握手を求める。私が照れながら「なにになに～」と言うと、ゴナリンはとても嬉しそうに笑って口調をまねした。「なにになに～」と言いながら握手をする。翌日からそれが私たちの間での挨拶のスタイルとなった。私は彼女と言葉を使った会話はほとんどしなかったように思う。それでも、私たちは一緒にいるだけで楽しかった。自分のお気に入りのアクセサリーを交換して、お互いのことを忘れないように、とお守り代わりにした。

ホームステイ先でも同じだった。同室の山内さんにずいぶんと助けられたが、やはり私のつたない英語は通じない時がしばしばで、トゥリーシャ(娘さん)やナナイであるマルーには迷惑をかけてしまった。私たちが帰国直前、村へ立ち寄ったときにマルーはこう言ってくれたのだった。

「This is not the end. This is the start of our relationship.」

私でもこの言葉だけはちゃんと聞き取ることが出来た。

フィリピンから帰ってきた直後は、2週間を思い起こしてもうまく整理することができなかった。夢にまで見たワークキャンプに参加することが出来て、生まれて初めて両親から離れて過ごした2週間。夢かうつつか、寝てか覚めてか。しかし、今冷静になって、18年間の中で一番アツかった夏を振り返る。その全ては繋がっていた。始まりははっきりと覚えていない。“明治学院のワークキャンプ”。大学のパンフレットに載っていたその写真を見たいつの日からか、私はフィリピンを目指し、目指した先は自分の英語力を試すためだったかも知れないけど、英語が通

じるかどうかなんて関係なく子どもと遊べたマカトゥリン村で、汗かいて、穴掘ってコンクリ運んで、夜更けまで歌って、踊りまくってた高校生だった自分を思いだしてまた踊って、踊る子どもに教えたたくさんの日本語、いつか使ってくれる日を願って、願うだけじゃ何も始まらない現実に向き合って考えて、そんな私の先を歩く日本人に出会って憧れて、憧れられる“日本人”という存在であることを初めて知った日、「日本に行きたい、働きたい」と言う女性たち、でもたくましく、笑って、笑う顔は貧しい国にはないなんて全くの嘘で、子どもたちはいつだって楽しそう、そうよ、これは終わりじゃないわ、始まりなの、と言った私のフィリピンのお母さんマルー。

「Do for others」って結局自分は何が出来たかと言えば、“人は、ただそこにいるだけで誰かに幸せを与えることができる”と知れたこと。“ただそこにいられること”がどれほどに大切な。堂々巡りで答えの見つからない問題ばかり、と考えてしまえば終わりだけれど、きっと考え続ければその先に何かがある、と私は思う。「終わり」は自分で決めてしまうべきものではない。始まりも終わりも見えなくても、“The circle”は必ず繋がっているのだから。「帰ってからが勝負。」と帰国前日に言った仲間。そう、フィリピンでの気づき、新しく知ったこと、人との出会い、モノの発見・・・そういったものをこの先どうしていくかは、全て自分にかかっている。ほったらかしにせずに、これからの長い学びの道につなげていきたいと思う。

最後に・・・

書ききれなかったことは沢山あるけれど、共に過ごした26人の仲間たちが必ずフォローしてくれるという安心があるから、ここで終わりにします。一言も書かなかったみんなへの感謝の気持ちは、お互いに言わずとも伝わるものだと思ったから。そこまで信頼し合える関係になれたから！

今、ここで、大きな声で、「Masaya! 幸せ! 」と叫びたい。

## ワークキャンプについて

法律学科1年 磯貝 憲司

### 1. 参加理由

私は大学に入ったら積極的に行動してみようと思っていたので、初めてワークキャンプの存在を教えてもらったときに参加を決めた。以前から人の役に立ってみたい、また何ができるのかを知りたいと思っていたし、大袈裟かもしれないが自分の知らない世界、世界から見た自分の国を感じてもみたかった。また、事前の研修会も多く開かれるということで、より深く学んでから出発できそうだったのも、私には大変魅力的だった。

### 2. 事前準備

#### (1) 新聞・Tシャツ係

Tシャツは、自分は絵が苦手ということもあって他の係りの人におんぶに抱っこになってしまった。まず全員から、自分の服のサイズ、Tシャツに使いたい色、デザインのアンケートを採っ

た。色は緑に決定した。皆で考えて決めるところと、係が仕事として進める部分を分けるように注意してもらっていたので、デザインは候補をいくつか絞って、多数決で決めた。デザインにもできあがりにも、一部の失敗を除き満足してもらえたと思う。新聞に関しては、日本でできることは少ないので、一度合宿でプレ新聞を作ってみた。問題はなかったように思う。

### 3. フィリピンにて

#### (1) ワーク

何も知らない人間が突然やってきて邪魔になるのではないかという不安もあったが親切丁寧に教えてもらった。細かいものから体力を使うものまでいろいろあったけれど、現地の大工の人の補助的な作業がメインだった。コンクリートを混ぜたり、ブロックや砂を運んだりといった仕事を村の人たちと一緒に汗を流して行った。同じ目的に向かう時間を共有している間、違う人種、国の人でもそれを忘れて仲良くできた。大げさだと思われるかもしれないが、戦争のない世界の可能性も見えるように思う。

#### (2) リサーチプロジェクト

私たちの班ではまず、地元の小学校の生徒に日本語を教えたりして遊んだ。次に、いわゆるストリートチルドレンのいる教会にも行き、同じように遊んだ。どちらも楽しかったけれど、教会で遊んだ子供たちのほうが自己主張が激しく、イタズラが過ぎると感じた。教育の差かもしれない。彼らは悪い子ではもちろんないし、教育を受けられないのも彼らのせいではない。親がいなかったり、親も貧しいのだろう。途方にくれてしまった。

#### (3) ホームステイ

二人で泊まることになった。腹を壊して、せっかく作ってくれたご飯もあまり食べられなかったが、それでも少し食べたフィリピン料理はとても美味しかった。ホームステイ先の家族は、私たちに大変よくしてくれた。私が腹を壊して家から出られないでいる間、ホームステイ先の娘さんであるジェニの友達と長い時間話す機会があった。ヤクザと武士を勘違いしていたりしたが、この中で特に印象的だったのが第二次大戦中の日本の侵略についてだった。知っているかと聞かれて、「学んで反省することは大事だ」と答えた。折角の機会なので、以前から気になっていた「侵略のことを今でも気にしているか？」ということを知ると「もう過去の話で、今は日本のことが好きだ。」と答えてくれた。私たちは新しい世代なのだろう、過去のわだかまりを気にせず仲良くなれることはとても嬉しく感じた。だが、その分戦争という事実をリアルに受け止めてくなくなっている気もする。過去を真剣に学ぶことが大切だ、という点でも合意できた。この会話は最も思い出深い会話のひとつだ。

宗教の話になった時、土日には彼氏と教会に行くと言っていたのには驚かされた。まさに生活の一部として宗教が存在していた。自分が無宗教だと言うと、本当に驚かれた。ここのところはしっかり説明したかったが、英語が上手にできず、なかなかわかってもらえなかった。また、その友人は、エンターテナーやイスラム教徒が嫌いだと言っていた。イスラム教徒は人を殺すからだという。人を殺す理由も考えるべきだ、と伝えたかったが、それも言葉が壁となってうまく伝わらなかったことが悔やまれる。ホームステイ先では全般的に楽しい時間が過ごせた。自分とは違う国の人の優しさは、本当に安心できた。

#### (4) 仕事(新聞・Tシャツ係)

まず、Tシャツに関して。フィリピンでは特に仕事は無かったのだが、大きな失敗を指摘して

もらった。フィリピンの英語綴りは「Philippines」とすべき所を、「Philippine」で終わらせてしまった。sを抜かしていた。これはチームのTシャツとして大変恥ずかしい。事前の準備の足りなさが露呈してしまった。大変申し訳なく思う。

新聞に関しては、新聞を書いてもらうのを各部屋で毎日ローテーションにすることにしたが、このシステムが上手く回ったのは最初の数日だけだった。後になると皆もワークの疲れがたまってきたのだろうか、かなりいい加減な出来になってしまった。私も、どこかで皆が怠けているのに気づいていたのだろうか、同じく怠けてしまった。新聞係という率先して働かなければならない人間であるのに、何かを書くのが苦手というだけで消極的になってしまった。追い込まれた状況になるとすぐに精神的余裕が無くなるという自分の嫌いな面が出てしまった。ワークキャンプでは、係の仕事という点ではかなり反省点が出てしまった。

#### 4. 現在

ワークキャンプを終えて感じることは二つある。一つは、私が出会ったフィリピンの人達からは悲壮感を感じなかったということ。行く前は、どれだけつらい生活を送っているのだろうと思っていたが、訪れる場所ではどこも笑い声があった。やはり貧困がそのまま不幸につながるわけではなかった。同情など必要でない。もちろん、衛生状況が悪かったり、貧しさから危険な職につくことがあったりすることも事実だ。当然の権利としての安全な環境は必要だと思う。しかし日本と同じ発展の仕方が必ずしも幸福ではないだろう。今の日本の反省点も生かしていけたらいいと思う。そのために自分は何ができるか考えていく。

もう一つは自分の勉強不足。これを改善しない限り成長できないだろう。みなそれぞれの道を、このワークキャンプを糧に進みだしている。毎日焦りを感じるほどだ。私は進めるだろうか。まずはこのキャンプで感じた自分のいたらない所から。

## My Peace of Mind ~ in Philippines ~

経営学科4年 齋藤 ちひろ

「まるで旅行に来ているみたい！！」

2週間設けられたWork Camp(以下WCと表す)も中盤を迎えた頃、私が数人のメンバーにぶつめた思いだ。

良く言えば、あまりの楽しさに対する感激な思い。

しかし、この言葉の裏には、フィリピンでの私たちの生活があまりに快適なものであった事に対する戸惑いの方が遥かに強かった。

<当初抱いていたWCへの思い、期待>

私は何度か旅行でフィリピンと同じような発展途上国を訪れた事があった。しかし、旅行ではいつも日本人という国籍を背負っていた。

どこに行っても「Are you Japanese?」と聞かれる。

私を日本人と知った彼らはいつも嬉しそうにモノやサービスを現地値段より遥かに高い価格で交渉してきた。日本人＝お金持ち、このイメージはどこに行ったって付きまとう。

日本人である私と彼らのコミュニケーションにはいつも“ 商い ” が存在し、だからこそ、その間には大きな壁を感じる・・・それが無性に寂しかった。もっと現地の人と同じ目線で同じ環境で、そして対等な立場で触れ合いたい。それには、共に生活をし、共に作業する（家を造る）しかない。

私はそんな経緯でWCに臨んだ。つまり、現地の方と全く同じ生活を送る事を覚悟していたのだ。

< フィリピンの地に足を踏み入れて >

しかし、実際にWCが始まってみると私の描いていたものと異なる場面に幾度と遭遇した。たとえば、滞在中に私たちが宿泊しているホテルのあまりの待遇の良さがわかりやすい例である。フィリピンでは、トイレ・シャワー共に溜め水を用いるのが一般的な様であるが、（もちろん貧富の差が激しいこの地では、そのスタイルも様々だが）このホテルでは水洗トイレに熱いお湯の出るシャワーを利用する事が出来た。

私たちがお世話になったマカチュリン村では、いつも完食出来ない程の沢山の料理が用意された。また、現地の人たちと私たちの飲む水は異なり、もっぱら私たちはミネラルウォーターのみの使用であった。夜、レストランに行けば、私たちは物価の安さゆえに満腹なご馳走を楽しんでいる。

気付けば、日本の生活と何ら変わりのないものが用意されていた。

また、WCの最大の目的である家造りの面で言っても、自分の身体、手を使って彼らの手助けをしたいという想いに反して、建設作業の力仕事にあまり対応出来ない無力な私がいる。女手では逆に作業が非効率になってしまう現状があったことも否めない。

何の為にフィリピンに来たのだろうか？私は自分の目的がわからなくなってしまったのだ。これがただの旅行ならば、何の疑問なしに楽しむであろう。しかし、私は旅行に来ているわけではない。少なくとも現地の人々の役に立ちたくて来ている。前述した、現地の人と同じ目線で同じ環境で、そして対等な立場で触れ合いたいという当初の目的に限界を感じていた。この、ある意味で快適で恵まれた状況を素直に喜んでいいのかわからなくなり、発した言葉、それが冒頭に述べた「まるで旅行に来ているみたい！！」だった。

しかし、私のこのような戸惑いとは裏腹に、現地の方々は感謝の意を表してくれた。どこに行っても歓迎され喜ばれている。私は申し訳ない思いで仕方がなかった。

< 改めて感じた思い、気づいたこと >

今考えてみれば、私は大分悲観的になっていたようだ。

この様な私の戸惑いに対し現地でお世話をしてくれたシャロンは言った。

「あなたたちがわざわざ離れた国、日本からやってきて貴重な時間を割いてまでもこの村に貢献しようとしてくれる。その気持ちが何よりも嬉しいのだよ。」

結論から言えば、悲しいことに私たちは国籍を捨てる事は無理なのだ。

日本人＝お金持ち、これらはフィリピンという国から見れば、単なるイメージでなく事実。現地



の水を飲めば体を壊してしまう弱い体。安全なホテルでなければ命の保障はない現実。むしろ、免疫力も抵抗力もない私たちが健康にいる為には、普段の生活レベルに近くなければ無理だし、そうでないと本来のWCの目的である建設作業のお手伝いが出来ない。

私は、事実(日本人=お金持ち)までもを変えようと、いや、隠そうと、必死にそして意地になっていたのかもしれない。

きっと、生活のレベルが違う日本人とフィリピン人が同じ道具を持ち、共に汗水垂らして作業する事に意味がある。

たとえその成果がほんの小さなものであっても、そこに気持ちがある、それが一番重要なのだ。シャロンの言葉に助けられ、徐々にそんな風に思うことが出来た。

私たちがフィリピン人に対し始めて抱いたイメージがあった様に、日本人=お金持ちとしか知らなかった彼らが私たちに抱く新たなイメージもあるだろう。

このほんの少しの変化であっても、それらは直接目と目を合わせ向き合い、共に汗水垂らして作業しなければ出来ない変化なのだ。

私は始めから大きな変化を期待しすぎていたのかもしれない。

異文化交流というのはこの様な非常に地道な作業なのだと感じた。

そう考えると私たちのした事も意味のあることのように感じる事が出来たし、彼らが私たちを歓迎してくれる意味も理解出来た気がする。

#### <私の出会ったフィリピン人、新しいイメージ>

ダンスが大好きな私は、子供から大人まで沢山の方々と同じ音のもと踊った。そこに言葉の壁は無かった。心から楽しみ心から彼らと通じ合うことが出来た。彼らは良く歌う。良くダンスする。そして良くお祈りする。

家族を愛し、友人を尊敬し、互いに助け合って生きている。この様なフィリピン人の生活、文化に温かさと居心地の良さを覚えた。

私たちは、途上国=貧しいという偏見、先入観を持ってしまいがちだ。しかし本当にそうなのか？確かに物理的にはそうなのかもしれない。でも、現地の子供達の、曇りのない、屈託のない笑顔。現地の人々の優しさ、温かさ、笑顔。そこから見えるものは心の豊かさだった。(もちろん私が見たのはほんの一部でしかなく、全ての人々がそうであるとは断言できないが。)

ここに、5日間建設作業を行ったマカチュリン村とは全く環境の異なる地、パヤタスに行ったときの事を記載する。

私たちは、一日だけパヤタス地区のゴミ投棄場(スモーキーマウンテン)に足を踏み入れる機会を得た。マカチュリン村とパヤタスとの違いは歴然としており、この国の貧富の差というものをありありと感ずることができた。実際に、ゴミの山を目前に、この巨大な山のすべてがゴミでできているということに唖然とした。人々は異臭の立ち込めるこの山の周辺に住み、ゴミから再利用できるものを探して生計をたてている。

私たちの生活からは考えられないだけでなく、同じフィリピン人であるニコルやスセツまでもが「信じられない。」と言っていたのが印象的だ。ここには表情のない子供たちの目があったのも事実だ。

しかし、この地でも決して悲観的・弱気には生きていない強い人たちに出会った。

そして彼らは神から与えられた自分たちの生活や環境に誇りを持っており、前向きに精一杯生きているように私の目に映った。

マカチュリン村とパヤタスに住む人々、環境は違うけれども共通しているものは同じ様に感じた。幸せって何だろう？益々わからなくなった。

<この経験を通して・・・まとめ>

「まるで旅行に来ているみたい！！」この思いは最終日にはまっさらになっていた。やはり、旅行とは違う。今までにない経験、出会いが沢山あった。この2週間、頭はフル回転に稼働し、様々な感情が入り乱れた。フィリピンという異国を見ることで、他でもない自国を見ることが出来た。フィリピン人を見ることで、自分を見つめなおすことが出来た。惜しくも与えられたこの環境を生かしきれないぬるま湯につかった自分に気づいた。ここからがスタートだ。

「この経験を生かすも殺すも自分次第！！」

出発前にトレーナーのたつきーさんがくれたこのメッセージが今になって胸に響く。

具体的にどうしていくべきなのか・・・自分がすべき事、自分が感じた疑問に対する解決策はまだ見つからない。けど、ゆっくりでもいいから見つけていきたい。

現在大学四年生の私は学生生活も残り半年となった。しかし、ものは考えようだ。あと半年しかないと言って過ごすのと、あと半年もあると言って過ごすのではかなり違う！！

私は今、後者の考えを持っている。

今回このWCに参加して2週間という期間の可能性を知ったからだ。

フィリピンでは12軒の家が建つあと半年の学生生活(約2週間で家が一軒立ち上がるフィリピン)次はどんな一期一会が待っているのだろうか。私は楽しみではない。

そして、いつどんな時でも、私の原点であるこのフィリピンでの経験、出会いが支えとなることでしょう。

最後になったが、今回のWCを支えてくれた金井牧師を始めとする宗教部の方々、現地スタッフの方々、トレーナーの方々、そしてこのフィリピン行きを温かく見守ってくれた両親に感謝する。サラマット！！

# 知る事のなかった世界

芸術学科2年 飯田 佳菜子

2週間。それは人の人生の中でほんの一瞬の、点のようなひと時なのだろう。しかしフィリピンで過ごした2週間というのは、私に物凄い衝撃を与え、大げさかもしれないが人生を揺るがせるほどの時間だったと言っても過言ではない。

私がこのワークキャンプに参加した動機は、正直なところ面白そうだからということだった。しかし実際、研修会や3回の合宿、それを踏まえて行ったフィリピンでの2週間は「面白い」「楽しい」だけでなく、ここから得た物は私の想像をはるかに超えるほど実りあるものだった。よく笑い、よく悩み、よく語り時には涙を流した。こんなに感情豊かに過ごした事なんてなかっただろう。

日本とフィリピンとの違いの中で、日本に欠けていてフィリピンには満ち溢れているもの。それは笑顔だ。実際フィリピンに行くまでは、日本人がフィリピンの人々にどう受け入れられるか、想像つかなくとても心配だった。しかし私たちの心配をかき消すようにフィリピンは笑顔で迎え入れてくれた。知ってる知らない関係なく私は多くの人から笑顔をもらった。ワーク先のサイト、マカチュリン村の人々は陽気で、とても明るい。猛暑の中での土木作業。セメント作りや、ブロック運び、ペンキ塗り、砂運び、鉄骨の柱作り、穴掘り、つらい仕事も中にはあったけれど、そこにはいつも笑顔があった。またワークをしていない時でも、サイト内にいれば必ず子供が寄ってきてニッコリ笑ってくれた。それも日本人に興味津々と言った様子で。マカチュリン村の子供たちは、とても人懐っこくて純粹でかわいらしい。アテ(お姉ちゃん)となつてくれた子、私にたくさんのタガログ語を教えてくれた女の子(すぐに忘れてしまう私に根気強く教え続けてくれた)、スパゲティータンダンスを伝授してくれた女の子たち、いつも私の脇をくすぐってきたり頭を触ってくる子、フィリピンで大流行していた『itsumo』という曲を熱唱してくれた子...ここではあげられないほどのたくさんの子供たちの笑顔を見た。それはマカチュリン村だけの話ではなく、町を歩いててもそうだった。スモーカーマウンテンのすぐ隣に暮らす人々も、美しいまでの綺麗な笑顔を見せてくれた事は、驚きでもあり、それと同時に勝手に抱いていた自分自身の偏見に対し、とても恥ずかしくなった。たとえ知らない人であっても、微笑みかけられるとこちらも思わず笑顔になってしまう。誰かが笑顔だとその笑顔は伝染し、たちまち周囲の人も自然と笑顔になる。2週間ずっと私たちと一緒に毎日過ごしてお世話をしてくれていた Rochelle が「皆私に疲れてない? って聞くけど疲れてないよ。皆の笑顔を見れば元気になるから。」と話していた言葉を思い出す。笑顔は人を幸せにする不思議な力を持っている、というのが本当にその通りだと身をもって感じた。笑顔によって私たちは国境を越えた仲間となれたのだろう。チームのスローガンである『Smile Makes Us Family』は実証された。笑顔の力って凄い。

フィリピンでは何もかもが初めての事ばかりで、毎日が新鮮だった。山や川といった景色、町並み、建物、乗り物、食べ物、匂い、習慣、気候、言葉、音楽、宗教など、当たり前なことだけ日本と違う。やはりビデオや文献からの印象と自分の目で、耳で、鼻で、舌で、皮膚で感じる印

象は全く別物だった。できるかぎりのことを最大限に体験してみたくて、2週間私の五感フル活動である。特にホームステイは貴重な経験だった。直接フィリピンの生活に触れて2泊3日とは言え、とても印象深い。ホストファミリーのCora家はもはや私の第2の家族だ。いまでは便器を横に夜、シャワーという名の水浴びをしたのが恋しい。お湯が出なくて寒かったけれど、私はこのシャワー結構気に入っていた。ナナイ(お母さん)は料理上手でフィリピンの伝統料理を食べさせてくれた。これまた絶品！手料理を何か教わってくれば良かったと後悔している。それだけが心残りだ。

ワークキャンプに参加してたくさんの人と出会い、日本では出来ない事をいっぱい経験し、とても充実した日々を過ごす事ができた。こんなにもワークキャンプが何倍、何十倍も充実したものとなったのは共にいった27人のメンバーがいたからだ。それぞれ色んな動機があってワークキャンプに参加し、誰一人と知らなかったのに、いきなり生活の一部となった27人。おそらくここで出会わなかったら、これから先何の接点もなく生きていっていただろう。そう考えると今とても不思議な気分になる。帰国まで合わせて約3ヶ月。共に笑い、悩み、語り、泣いた事もあった。7回の研修会と3回の合宿、それから迎えた2週間のワークキャンプを通して、彼らからたくさんの事を学んだ。27人のメンバーからだけでなく、研修会からずっと私たちをサポートしてくれていたトレーナーの方や、アシスタントの方、宗教部の方、またハビタットの方から教わった事もとても大きい。この3ヶ月間振り返ってみて、とにかく今言えるのは「皆大好き！」これに尽きる。学科も学年も違う。価値観や物の受け止め方だって違う、まさに十人十色。「こういう考え方もあるのかぁ」と感心してしまうほど自分とは異なった26の意見を聞き共有し、そして自分の意見も聞いてくれる。これは簡単な事のように実は難しい。このような事を実践する場というのもあまりなかったし、普段国際に関して考えるという機会も私の今までの生活にはなかった。ワークキャンプは、国際について考えるチャンスを与え、人それぞれ違った意見を聞きそこから学び取る事は計りきれないほど膨大である、という事を教えてくれた。そのような場で彼らに出会えた事をとても幸せに思う。

ワークキャンプに参加しなければ、出会う事のなかった人(これはメンバーだけに限らず)がいた。セメントを砂の時点から造って家を建てるなんて事はなかった。知ることのない世界がそこにはあった。この3ヶ月で私の視野はとてつもないスピードで広がったのは確かだ。ここで考え、悩み、学び得たことは決して忘れない。だからといってただの思い出として留めるのではなく、それをこれからの人生の糧として私は成長していきたいと今強く思う。この事はきっと私の生涯の財産となる事だろう。

最後に、27人のメンバーとトレーナー・アシスタントの方々、宗教部の方々、ハビタットの方々、フィリピンで共に時を過ごしたRocheilleとZet、Tes、Rhon、ホームステイで本当の家族のように受け入れてくれたCora family、マカチュリン村の人々、フィリピンで出会った全ての人へ、この場を借りて言いたい。タガログ語で私が最初に覚えた言葉でもあり、一番好きな言葉。「Salamat po!!!!!!! (ありがとう)」

# マハルコ カヨ ラハッ (I love you all)!!

国際学科2年 村上 聡美

2004年度9月8日～21日に行われたフィリピンワークキャンプに参加した。

まず始めに私が言いたい事は、初めての海外でフィリピンに行けて良かった、ワークキャンプでフィリピンに行けて良かった、今年のメンバーでワークキャンプに行けて良かった、ということ。

今回参加して考えさせられたことの中で一番大きかったことが、人間の強さや平等さと自分についてだった。元々このワークキャンプに参加する動機というものが、「ボランティア」と呼ばれているものを自分で実際経験してみたい(自分で経験しなければ何も分からない)ということと、上記の通り海外へ行ったことがなかったので、視野を広げたいということであったのだけれど、帰国して振り返ってみると自分が出国前に予想していた以上に様々な事を考え、見直すきっかけになったと思う。一番考えさせられたことのきっかけは9月11日のショッピングモールでのミサだった。フィリピンがキリスト教国(特にカトリック)ということは行く前に受けた研修会でも聞いて、街中の教会様式なども見て知っていたのだけれど、自分の中で実感出来たのはこの時だった。マカティという高層ビルが多く立ち並び、日本企業も多く進出している街にあるメガモールに訪れた時、4人でウロウロとしていたらたまたまミサをやっている所に行き着き、「9・11の特別な礼拝なのかもしれないからちょっと見ていこう」ということになり、そこに留まる事にした。初めは客観的に「ミサってこういうものかぁ。本当に日常的にしているんだぁ。」と見ていたのだけれど、今まで買い物をしてきた人たちが次々と足を止め、一緒になって歌を歌い、お祈りをしている姿を見て、自然とその場にいるフィリピンの人達や9・11で被害にあった人達に対して思いを馳せてしまい、「今、ここに自分が存在できることの幸せさ」を強く感じ、何故か涙が出てきてしまった。それまでに教会のミサを経験したことが無かったので、それが「フィリピンだから」とは言えないけれど、自分の心に響いたということでは間違いでは無い。自分で勝手に思いを馳せたりしている部分でも図々しいかもしれないけれど、この時「人間の身近な人を大切に思うという根幹部分は、民族関係なく一緒」という思いを強く持った。

次の日の朝はプログラムで組まれていた通りに、日曜日のミサにメンバー全員で参加した。ここでも教会という雰囲気、ゴスペル、神父さんの言葉の節々を聞き、前日に感じた思いを更に強く感じた。

しかし、教会の壁画に軍人や戦車が大きく描かれているのを見、神父さんの話の中に何回も出てきた「パッション」という言葉を聞き、フィリピンの歴史(特にピープル・パワーなどの民衆が勝ち取ったもの)を考えた時に「独立、フィリピン民族の一体感(=愛国心の強さ)」というものも同時に強く感じた。これに対して、「ここまで強くこだわりを持っているのは何故だろう。」という疑問をこの時からずっと持ち続けていた。最近受けた大学の公開講座で、カーリーナ・アフリカ・ボラスコさんというフィリピン人女性の出版会社の方が答えたことにより、少しだけその疑問が解決されたような気がした。彼女の出版についての講演中に「フィリピンの人達に National Identity を持って欲しい」と何回も出て来たのだが、それに対して「何故そこにこだ

わるのか。」という質問をした学生がいた。この答えが私の疑問にも繋がっていると思うので、少し話がずれるが載せたいと思う。彼女曰く、「アメリカの直接的な統治はもう既に無くなっているが、文化、経済、政治などフィリピン全体がアメリカの影響を受けていない部分は無く、今も軽く支配されている部分がある。本のことにしても、日本の大多数の人が読む本は自国の言語である日本語で書かれているが、フィリピンの大多数の人が読む本は英語で書かれているものである。フィリピンの言語（タガログ語）で書かれた本は数的にも少ない。歴史教科書にしても、民衆が立ち上がって独立を招いたものなど未だに殆んど載っておらず、日本で言う司馬遼太郎の歴史小説みたいなものも全く無い。だから、アメリカを批判するわけではないが若い人達には自分の国のことを知ってもらい見直した上で、自分達の国を作り上げて行って欲しい。」ということであった。これは一人の人の意見なので、自分の中でこれからもこの疑問を持ち続けて様々な人と話し、いつか自分の中で納得できる答えが出せたらいいと思っている。

話を戻すと、その日の午後にスラムエリア（パヤタス）へ訪れた。ここでは別の NGO 団体（アイキャン）の元で見てまわることが出来たのだが、このエリアに入る前に何度も危険性を説かれ、自分の中ではフィリピンに行った中で一番の緊張感を持ってこれに臨んだ。パヤタスのコミュニティに到着した時、バスで行ける所まで奥へ突き進んでいったのだけれど、途中、窓の外で満面の笑みを浮かべつつこっちに手を振りながら走っている子供達が何人がいた。これを見てとっさに振りかえしそうになったが、ふと、その構造（私達が高さの高いバスの中から見下ろしていて、いかにも偉そうな感じで、しかもお互いの間にある違いを見せ付けているような感じ。）がとても嫌で、体が動かなかった。「同じ人間なのに・・・」という思いが強くてそう感じたのだけれど、それと同時に「スラム」という言葉に暗いというイメージを自然と持っていたため、子供達の笑顔を見た時に驚き、そのギャップにショックも受けていた。バスを降りた後は皆二列になってごみ山を目指し、歩いていった。途中、何人も小さい子供達が近くに寄って来て笑顔を見せてくれたのだけれど、こっちは「あまり笑顔を見せたりするな。あまり周りを見るな。」という注意を受けていたため、笑顔にならないようにしたり顔を動かさないようにしたりしたら、とても不自然な動きになってしまった。ぎこちなくしつつ行き着いた先はひらけた場所で、巨大なごみ山が目前にそびえ立っていた。これに対しても色々と考えさせられたのだが、ここでは話がずれてしまうので触れないことにする。臭いに関してのみ感想を書くと、異臭は確かにしたけれど自分が想像していたものよりはるかにその強さは低かった。その後、コミュニティにある一つの家へ訪問させてもらうことが出来たのだけれど、これまた家の中を見た時は電化製品なども置いてあり、外や下にごみがあることを考えない限り、とても単純な考えからすると快適に過ごせそうな気がした。この訪問は私にとって「家」を考えるきっかけともなった。最後にアイキャンの施設へ招かれ、もち米で出来たお菓子を貰ったり、アイキャンで作成した雑貨類を買ったり、女の子たちのダンスを見せてもらったり、そのお返しに「幸せなら手を叩こう」の英語バージョンを歌ったりした。ここでの出来事はいい意味で前日、前々日に考えていたことを否定することになった。ごみ山でアイキャンのイトウヨウコさんから受けた説明で、スカベンジャー（ごみ拾いをして生計を立てている人）の一日の収入が約 100 ペソと聞いていたのだけれど、アイキャンで作成された雑貨一つの値段が大体平均的に 60 ペソで、雑貨の値段としても安かったし雑貨もかわいかったのでメンバーは自然と一人何個かを買っていた。私も一つ買い、友達と一緒にまとめ買いをしたのだけれど、買い終わって椅子に座った時、丁度隣にアイキャンで作業していると思われるパ

ヤタスの女性が座っていた。始めは話しかけようと思っていたのだけれど、買い物をしているメンバーの様子を見る彼女の表情を見た時になんとも遠くを見ている感じに見えて、話しかけるのをためらってしまった。この時値段のことを思い出し、もし彼女の夫や近所の人がスカベンジャーだとして一日の収入が上記ぐらいだとしたら、100ペソを超える買い物を各々が楽しそうにしている姿を見て、どう思ったのか、複雑な気持ちになった。確かにここで払ったお金はアイキャンの活動費にもなるし、彼女達にも配当が行くようになっていたため、全く無用なことをしたというわけではないけれど、とても日本的な行動(お金をばら撒くという)に思えてしまい、正直滅入ってしまった。彼女は私の隣にいる人なのにその間にはとても深い溝があるように見え、そして前日、前々日に考えていたことの甘さを知り、自分の中にあった矛盾点を幾つか言い当てられた気分になった。強く思っていた「人間の身近な人を大切に思うという根幹部分は、民族関係なく一緒」ということはやっぱり違って、前日、前々日に私の周りにいたフィリピンの人達はそれなりに裕福で、感覚的に自分と似通ったものだと思うけど、パヤタスは違って、国内だけでも貧富の差でこうも違うのに民族が違うと更に違いは強いのだと考えさせられた。「似たような気持ち」はあっても「一緒の気持ち」ということは、環境も違うしあり得ない事だとつくづく感じた。交流を終えて帰らなければいけなくなった時、一人の女の子がバスまで一緒に来てくれ、ほんの短時間の交流だったにもかかわらず、「今度いつ来るの?」「日本に帰るの?」「日本へ行くには幾らかかるの?」「1ドル、2ドル・・・?」と淋しそうに言う姿を見て、こんなに小さな子でも心が温かいことに心打たれると同時に、この子の質問に答えることが出来なかった自分の不甲斐無さも痛感した。彼女の質問は素朴だけれど、私にずっと投げかけ続けているものでもある。

始めにこのワークキャンプで一番考えさせられたことは「人間の強さや平等さと自分について」と書いた。人間の強さの一つとして最後に書いておきたいことは、私が出会ったフィリピン人はどんなにつらい状況にいても常に笑顔を絶やさないでいた。ありきたりだけれど、笑顔は簡単なようで一番難しく、それでいて出来た時は本当に人を幸せにするのだとしみじみと思った。人間の平等さと、硬い言葉で書いたけれど今までに書いてきた「人間の奥深くの気持ち」については、「似ているものなんだ」と信じていたいと思う。最後に自分について。色々考え、感じ、変わらなくてはと思った部分は多々あったけれど、新しく知った自分の一面として、意外とタフで無神経だということが分かった。他にも本当に沢山のことを知り、考えさせられたワークキャンプ。とても有意義だったし、これからの人生にも役に立てて生きたいと思う。何より人間に興味を持ち始められたことに自分自身、得たものは大きかったと思っている。

この報告書に書いた出来事は2週間の内のたった3日間で起こったことだったけれども、私にとってはとても大きな出来事だった。これはやっぱり冒頭に書いた通り、今回参加しなければ経験できなかったことで、この機会を与えてくれた家族や大学、そして主催の宗教部、そして私が出会ったフィリピンの人達皆に感謝したいと思う。最後に、ここまで読んで貰いサラマッポ(ありがとうございました)!!

# フィリピンの中心で、強さをさげふ

芸術学科 1年 草野 友寿

僕は、この夏すばらしい仲間達とすばらしい体験をしてきた。そこにはすばらしい人達とすばらしい言葉との出会いが数多くあり、その多くの出会いによって僕は心から感じ、考え、“すばらしい国 = フィリピン” が大好きになった。そしてなにより“人間” というものを再発見した。この場をかりてそれらを少し紹介しよう。

「あなたの宗教は何？」ホームステイ先の娘さんの、友達の言葉。

「プロテスタントの学校なのだから、メンバーはプロテスタントでしょ？」マンダリヨン市長の言葉。

まずはこの2つの質問からフィリピンの人々と日本人である僕との間の宗教に対する感覚の差を感じた。日本に住んでいると自分の宗教のことを考える機会はありません。言ってしまうと、意識的には宗教と関係ない世界で暮らしているように思える。父親が僧侶である僕がキリスト教の学校に通っているということも日本の宗教観をある程度表しているのではないかと。日本人とは対照的にフィリピン人は宗教に対する意識が強かった。必ずと言っていいほど、なにかを始める時やセレモニーなど人が集まる際にはお祈りがあり、チームで参加させてもらった日曜日のミサには教会に入りきれない程の人が神父さんの話を真剣に聞いていた姿が印象的だった。僕がお世話になったホームステイ先の家では、部屋の目立つところに立派なキリストの像と十字架がいくつかのトロフィーと一緒に飾ってあった。実は一つ目の質問に対しては、日本にいる時からどのように答えたらいいのか考えていたのだが、結局うまく自分の考えを伝えることができずに適当な答えを返してしまった。残念な気もするが、自分の宗教観について考えるよい機会になったことは間違いない。そして、他の国の宗教観を知ることにより宗教というものが自分に近づいたように思う。

「こんな綺麗な景色をみたことがあるかい？」「マカチュリンは最高さ！」マカチュリン村の同年代の青年達の言葉。

この言葉は僕と彼らが生まれてきてから築いてきた生活や文化に対する感覚の違いを感じさせた。これらは作業中にでた土砂やゴミをマカチュリンの青年たちと川に捨ててに行く機会があり、その時に聞いた言葉だ。トラックの荷台にゴミや土砂と一緒に乗り込み、村から5分くらい走ると大きな川があった。そこでなんと彼らは積んできたゴミなどを一気に川辺へ捨て始めたのだ。言ってしまうとよそ者の僕には何も言うことはできず、彼らに習って同じように捨てるしかない。まあ、正直なところその作業はとてもおもしろくて、僕は興奮しっぱなしだったのだけれども。そんなことをしていればやはり川はひどく汚れていて、僕にはとても綺麗とは思えなかった。確かに川はある程度の大きさがあり、背景には近代的なビルが立ち並んでいる町並みがあるのだが、川と川辺の汚さがどうしても気になった。彼らは自分達が綺麗だと言っている風景を、ゴミを捨てることにより自分達で汚していることを意識していたのであろうか。今思えばフィリピンで、少なくともマニラでは水が綺麗な川を見た覚えがない。子供の頃からそのような川を見てき



た彼らにとっては、“川の水＝濁った水”というのが常識なのだろうか。そうなのであれば、彼らが慣れ親しんでいるあの川を自慢したくなるのもわかる気もする。もし機会があるならば、逆にうちの近くの丹沢に流れている綺麗な水の川を彼らに見せて「どうだ、すげー綺麗だろ！」と自慢返しをしてみたいと思う。僕が生まれてきてから築いてきた「綺麗」という感覚を、彼らが僕にしてくれたようにぶつけたい。もう一つ川に行くことにより感じたことがある。それは彼らが自分達の村をとて愛しているということである。無事に？ゴミなどを捨て終りトラックが徐々に村に近づいていくにつれ、車内で「マカチュリン」コールが沸き起こった。一緒にゴミ捨てをしたことにより正式に彼らの仲間入りをはたした僕も負けじと叫ぶ。村に着くと子供達の歓迎の嵐。まるでリアルマドリードの選手の気分。僕は再び大興奮、トラックの屋根に上り子供達に手を振りこたえる。コミュニティの一体感。青年達はまさにマカチュリンの息子であり、全てのマカチュリンの子供達のお兄ちゃんなのだ。そこには各家を隔てる壁こそあるが、心の中には壁はなかった。まるで村全体が一つの家族、各家は各部屋という感じだった。僕もいとこのお兄ちゃんくらいにはなれたのかな…。彼らが村を自慢に思う気持ちもわかる。村の中の雰囲気は平和、のどかという言葉がぴったり。例えて言うのなら、まさに野外レイヴの気分。目が合うだけでお互いに笑みがこぼれるのだ。そこでは音の代わりに子供達の“遊んで攻撃”が降りかかってくる。つかまったら音の数程の子供たちが群がってくる。全てのフィリピンのコミュニティがこうだとは全く言えないし、僕らを歓迎してくれていたからかもしれないがこういう事実があるということも事実である。実際に僕らはその“事実”を体験しているわけだし。そしてもう一つ事実として、いくら村全体が家族だとしても各家には頑丈な鍵がつけられていた。僕ら日本人がどうしても“現実”と捉えがたい生活の中に彼らは“現実”としてそこに暮らしている。その“現実”の中では、僕らに見えないこともまだまだたくさんあるのだろう。

「自分の家だからね！」一緒にペンキ塗りをしたジェリーの言葉。

これは僕が一番衝撃を受け、印象に残った言葉だ。この言葉を聞いた瞬間に僕の中のある一部分が崩れ去った。僕がジェリーの家ペンキ塗りの手伝いをしに行った時、なかなかうまく塗れない僕はジェリーにお手本を見せてもらった。彼はとてもうまくペンキを塗るので「なんでそんなにうまく塗れるのさ？」と聞いてみたところ、さっきの答えが返ってきた。そりゃ、そうだとて当たり前のことだが、僕はとて当たり前のことを忘れていたのだ。今まで僕の中では家のペンキを塗ることはペンキ屋の仕事であり、自分はお金さえ出せば綺麗に塗られた家を手に入れることができるのだと思い込んでいた。しかし、それが全てではない、自分で塗ることもできるのだ。元来人間は自分のものは自分で作ってきたはずだ。技術うんぬんではなく自分のものを作るのだという“気持ち”が大切なのである。その“気持ち”さえあれば、ある程度のことはできると今僕は考える。手間をかけたかもしれないが僕たちは家作りを手伝った。砂利を運び、セメントをこね、穴を掘った。僕達は日本ではできないこと、いや、やろうとしないことをしてきた。できたのだ。そう、「人間はとて強い生き物なのだ！」このことを言うのに時間がかかったが、これがフィリピンワークキャンプに参加して僕が一番強く感じたことである。作業を通してからだけではなく、パヤタスヘスラム街とゴミ山を見に行った時に見た、遊んでいる子供達の笑顔からも、ゴミ山で働く人々の姿からも、ゴミ山の目の前で肉を焼いて売る人がいる(!)ということからも感じた。さらに BATIS センターで国籍に関するシンポジウムに参加していたお母

さんたちの真剣な顔からも、道路でものを売る子供達からでさえも生きることへの強い“気持ち”を感じた。確かにマイナスな感情も持ったが、それよりも彼らのたくましい姿を見てプラスな感情をいただいた。彼らは自分達が生きている“現実”のなかで一生懸命生きていた。確かに日本人から見たら、とても貧しい環境で生活しているように思えるし、まだまだ改善点がたくさんあるかもしれないが、彼らは僕らが思う以上に強く、笑顔と共に生きていた。彼らにとってはそれが“現実”だからだ。僕達はそんな彼らのことを、ただ単に「かわいそう」と言うことはできないと思う。逆に見習うべきところがたくさんあるはずだ。これからはどんなことがあっても“生かされている”と感じるのは止めにして、厳しいがすばらしい“現実”を自分自身で“生きている”と感じて生きたい。きつとうまくいくはずだ、だって人間は強い生き物なのだから。

帰国して1ヶ月が過ぎ、ジーザスと呼ばれた僕の顔にもう髭はなく、洗濯してもらった服のにおいも消えかけている。しかし僕にとってのフィリピンワークキャンプは終わったわけではなく、この夏の経験がスタート地点として新たに始まろうとしている。机の上に置いてある偽もののGUCCIは彼の体力が続く限り今もフィリピン時間を刻み続ける。

最後に金井牧師をはじめ04.P.W.Cメンバーやフィリピンで出会った方々、すべてのお世話になった方々に「ありがとう！Salamat po！」

## フィリピンワークキャンプにありがとう

国際学科2年 神宮 佐智子

2004年9月8日、私たちはフィリピンへ出発した。そしてフィリピンワークキャンプを行うにあたって、それぞれの思いを心に感じながらフィリピンで二週間という人生において本当に貴重な時間を過ごしたのである。

劣悪な環境におかれた家族の家の建設をすることを目的とするこのキャンプだが、これは単にワークだけの旅ではない。文化も違えば、生き方、考え方も異なる国や人々との交流のなかで、それぞれ個々が何を感じ、何を得るか、そこで自分はどう考え、いかに行動するかというような自己実現のきっかけを与えてくれる大事な役割を持つものなのだ。日本で授業として地域、宗教、政治など様々なことを学ぶことはそのことについて、学びたいと思う者に、より深めさせてくれるということに関しては必要である。しかしやはり現地へ赴き、滞在することによって、直接その風を感じることによってより地域に密着し、知識という形あるものだけではないものを自分自身に与えられるのだと感じた。

私にとって初の海外経験になるが、そこは世間では発展途上といわれる国である。しかもそれがワークのための2週間であり、当たり前のように単なる海外旅行といったような軽いものではないことが常に念頭にあった。それだけに、南の貧困問題や衛生的問題などの現代に見る多様な課題を抱えてしまった地域へ行くということばかりが私に重くのしかかっていたのである。日

本という私にとっては甘えた環境にいるこんな私が、今や世界的に拡大が見られる貧困問題への対応、また私たちの一つの目的となる人間的に暮らすための家の建設など、そのような一般に発展途上国といわれる場所に貢献ができるのだろうか、と、幾度となく頭をめぐらせ、研修会を重ね、現地に赴いたのである。

現地到着時の最初のバス移動で、私は上記の思いが強まった気がした。バスから眺める景色は発展しているように見える。と、思ったらすぐそこにはごみで埋めつくされた川岸、その周辺に広がる密集した今にも崩れそうな家。また、空き地の様な場所にはたまに見える日本から進出した会社だが、何か不自然で寂しそうにも見える。おそらくこれが発展途上国といわれる国の現状なのだろうと考えさせられた。これがフィリピン、と同時に発展途上国について私が初めて自分の目で見て感じたことであり、また過ごしていくなかで毎日のように感じていた。そして、フィリピンでの毎日の生活において道路を使用するが、交通の面でも、人が道の途中で大型バスに降りし、フィリピンの象徴とも思えるジープニーでは車体の後方の外の手すりにつかまって、立ち乗りする学生の姿、隣の車と今にもぶつかりそうな近距離に、私たちは驚いていた。

しかしこれがフィリピンの営みなのであって、私としてはとても興味深かった。同じ地球に生きる人々がこれだけ違う行動をとっていることに私は面白みを感じた。

そしてフィリピンの人々は私たちの不安を取り除いてくれるかのように、とても暖かかった。人々の笑顔がとても印象に残っている。毎日のようにサイトの子どもたちや大人の人々は、私たちに笑顔で接してくれた。また、子どもたちは私たちにいたずらをしたり一緒にダンスをしたりと、私たちと嬉しそうに遊んでくれた。ホームステイ先の家族皆、私たちのために親切に熱心に接してくれた。言葉は通じなくても、お互いを信頼しているかのように沢山汗を流して、ありがとうという言葉一つだとしても、ワーク中は私たちメンバーと村の人々皆で家を着々と形にしていた。最後は私たちとの二週間に、一緒に泣いてくれた。また日曜礼拝に行った時の、大勢の人々の賛美歌の歌声は今も残っている。まだまだつきない思い出の中の、彼らの優しさが、私の人生の貴重な二週間を良い意味で重たいものにしてくれた。これらの場面はフィリピンの、私にとってはポジティブな側面だった。

しかし、同じ地球に同じ時間に環境や風土は違えども私たちは営んでいるのに、どうして“人間”として生きるための空間に大きな格差が生じなければならないのか、という現実と疑問が強く心に感じられたことも多くあった。

私たちはパヤタスのスラム、ごみ山に訪問した。80年という年月で積み上げられたごみ山を見て、私は大変な衝撃を受けた。ごみのなだれによって死者も多数出るといふ。子どもが目の前のごみ山でごみを拾っている、危険なその周辺で遊んでいる。私は人間らしい暮らしについて考えさせられた。ここで、私が日本で表面的に人間らしい暮らしが実際にできてしまうことに優越を感じているわけではないことはいっておきたい。現地の人がいかに動き、また支援可能な人々がどう支えれば人間らしい営みを与えられるのかと私は考えていた。私たちに毎日同行してくれたフィリピンのハビタットで働く私たちのコーディネーターさんに私は「これ信じられる？」と質問された。私は信じられない、と答えた。現実的とは思えない光景だったのだ。しかしその環境を少しでも変えていこうとしているその場所の人々の姿は、この現実をしっかり向き合っているという証拠だと思った。

私たちが恐る恐る入っていったスラムだが、生活をする子どもたちは帰りに私たちにダンス見

せてくれた、おばちゃんが手を振ってくれた。また、リサーチプロジェクトでは、教会にいるストリートチルドレンの子どもたちと遊び、彼らにとってはおそらくつらい立場なのに私たちを歓迎してくれた。私は自分が情けなく思えた。劣悪な状況におかれているとしても、人間として生きるという力強さが彼らにはあった。私は今まででなんとなく毎日を過ごしていた。だから時間が過ぎるのもあつというまだった。もしかしたら生きていることの重要さを知らなかったのかもしれない。私は一日が来ることの有難みをフィリピンで学んだ。ここで、私の疑問とする格差とは、私たちのイメージだけが作らせるのではないかと感じた。つまり彼らから学ぶことが多い分、彼らと同じ目線で助け合い、学んだことを自国において生かすことで、地域の格差が少しでも減らせるのかもしれないのだ。

日本と社会情勢が異なるフィリピンに行き、現地に行ってからより鮮明に私は人々に貢献するという意味に少しでも気付かされ、私の不安も和らいだ。貢献する側もそれを受け入れる側も、また異なる国の交流において、互いがいかに相手の生き方を尊重できるかが必要なのだと感じた。現地に行き、様々なものと触れ合うことで、むしろ私が大切なものを与えられた。フィリピン、そしてその人々、お世話になったスタッフの皆さん、そして 04メンバーに感謝している。

## ワークキャンプに参加して

国際学科 2 年 鹿野 慎介

私がこのワークキャンプに参加した理由がいくつかある。(1)フィリピンの人、現状をどこまでかわからないが、できるだけ多くのことを知るためである。(2)ボランティア活動とは何かということである。(3)日本人はどのようなものなのか。このようなことを考えながら参加をしたつもりであるが、いざ現地に行って生活してみると、思ったより自分に余裕がなかったり、つい楽しむことを優先しがちになりあまり考えられなかったことが事実である。

行く前に思っていた私の考えは次のようである。(1)フィリピンは経済的には貧しい国で途上国だからと訳もなくかわいそうであると思っていた。かわいそうであるという先入観が最初に思い浮かんでいた。そして、それに縛り付けられていた。(2)ボランティアとは、特に日本人が海外に行っているボランティアにはどうしても納得いかないところがあった。なぜならば上立ってものを見ていたり言っていたりするよう感じがしていたからである。だから、少し距離を置いていた。(3)日本、日本人はどのように思われているのかを想像してみると、豊かでありながら冷たいイメージを持たれているのではないかと。

(1)フィリピンについて

私はワーク中に風邪をひいてしまい、思うように作業ができなかった。みんなが作業しているのをチャペルで羨ましそうに見ながらポーっとすることしかできなかった。しかし、考えさせられたことがあり、かえってよかったと思っている。家を建てることにいっぱいいっぱいになって

いた自分に落ち着きを取り戻せたかもしれない。風邪を引いてしまった私に現地の人たちは皆心配してくれていた。おでこに手を当ててくれて熱はないかとか、声をかけてくれるのである。気遣うのは当たり前のようなことであるが、私にはできるであろうか？ましてやスキンシップは簡単にはできない。そして外国人と。そこには私は差別意識を知らない間に持っていたのであろう。しかし、そうやって触れられると彼らの体温だけしか感じられなかった。この他にも彼らはハイタッチ、握手、手をつなぐなどを求めてきていた。彼らはまず人と人が触れ合うことによってなにかを確かめているのではないか。日本人はあまりそういうことはしない。外見や口調などをみて入っていく気がする。それは間違っただけで先入観をもってしまい、すぐには理解できない関係になってしまうこともある。握手などをすれば人の温もりが直に伝わってきて、この人も誰とも何も変わらない同じ一人の人間であることが感じられるのではないか。

また、日本では近所の人と接することはあまりないが、ここのコミュニティーのつながりは強いと思った。サイト先の子供たちをはじめそこにいる人たちは助け合いと言えば大げさだが、人との関わりを大切にしながら生活をしてきた。彼らはなぜこんなにも笑顔で親密な生活ができるのであろうと疑問に思った。私はホームステイ先のナナイ（お母さん）と話をした時にその答えになるようなことを聞いた。「人は一人では生きていけない。だからここに住む人は第一に人のことを考えて行動をするのだよ。だから、人と接する時はまず笑顔を見せてあげるんだ」と。よく聞くような言葉であり、いつもは重く受けとめていないが、この時ばかりは妙に納得ができた。それは彼らの生活を垣間見ることができたからである。

私が来る前に思っていたかわいそうだという先入観はいつのまにか消えていて、むしろ彼らを羨ましく思えてきたのである。このことから先入観だけでものを判断はできない、実際に行動してみても初めて分かるものだと思われ、彼らから教わった気がする。

## (2) ボランティアについて

私は、ボランティアとは貧しい人々を援助して善いことをしたなあと自己満足をするためのものであると思っていた。しかし、今回の経験で少し見方が変わった気がする。家を建てるといっても私たちはさほど役には立っていなかった。むしろそこにいることが邪魔であるようにさえ感じた。しかし、彼らと話しをしてみるとたとえ役に立っていなくても一緒に作業することができて、それだけで十分だと言う。なぜならば、外国人が少しでもフィリピンの事について興味を持ってきて、行動をしてくれることが励みになると言っていた。そんなことだけでも彼らは善いように感じてくれたらと思うと、ボランティアとは、あまり気負いしなくてもいいものなのだと感じるようになった。

しかし、日本、日本人が途上国に対して援助、ボランティアをするというのは経済的にみて簡単である。フィリピン人が日本に来てボランティアをすることは経済的にみて難しいかもしれないし、することもないかもしれない。日本が援助、ボランティアするのはお金の援助とよく言われていて、良い印象をもたれていない。たしかに行く前はそう思っていて、お金を持っているイコール上に立っているとしか思うことができず、納得できなかった。彼らに課せられた使命が格差の激しい劣悪な環境の地域に住み続けることならば、逆に私たちに課せられた使命は少しでもその格差が解消するために使うお金の援助も使命のひとつである。それができるのは日本みたいな国だけなのだから。このように考えれば批判がちに見られる日本の援助も理にかなっているのではないか。しかし、上に立って物を見ているという考えは払拭できない。だから、お金の援助

だけではなくて、私たちが行ったような人と人を結ぶ活動、上下関係なく一緒になってする活動を広めること、またそれを伝えなくてはならないと思う。それが私たちができるボランティアであると考えてる。

### (3)モノから考える日本人

ある日、巨大なゴミの山に行った。そこはマニラ首都圏のごみが捨てられてきたため、高さ60m、広さ数ヘクタールから十数ヘクタールものである。これほどのごみを見たのは初めてで、しかもそこにはごみを集める人がいるのである。日本で私たちが棄てるごみは、ごみ収集車に運ばれ廃棄処理場で害が出ないほどの高温で焼却され、再利用されたり海などに埋め立てられる。しかし、ここのごみは分別もされず集められてきたものをただ棄てているのである。悪臭やスモッグが立ち上がり環境は相当悪いものである。直接ではないが私たちが棄てるようなごみもこのごみ山に来ているのではないかと思った。日本には資源があまりないがモノが溢れている。その資源とはどこからやってくるのかといえば、豊富な国からであり、それはフィリピンをはじめ途上国なのである。このように日本にはモノとごみが増えるのであるが、フィリピンにはモノが減っていきごみだけが残るのではないか。差がここでもひらけてしまうのである。例えばお土産を買った時のことである。「これ安いね」と言いながら、本当に必要なモノかも検討しないで、少ないお金を落とす。作った人にとっては売ったので少しの収入にはなる。お金は増えて一時的な足しにはなるが、モノが少しではあるが確実に日本に移動している。また私たち日本人はお金持ちで良いターゲットとしてしか見られていない気がする。日本人イコールお金持ちであるということから抜け出したいと思っている私たちは自身が自分たちの首をしめていると思った。このように自分たちの行動を変えていかなければ一緒になって作業をしたとしても、結局のところ日本人はモノで動くというイメージは払拭されないのである。

このようにフィリピンで過ごした日々、その瞬間毎に考えさせられることがたくさんあった。しかし、その場限りで終わってしまっただけではいけない。これからの人生の中でホームステイ先のナナイが「人を一番に思うことが大事だ」と言っていたように、物質的にではなくて、心の豊かさを考えながら生きていかなければならないというか、生きていきたい。

# Memento

## 法律学科1年 石井 勇行

私がフィリピンワークキャンプに申し込みした理由は、ただ単に外国に行ってみたいという単純な動機でした。そして、抽選を通った後、これではいけないと思い、自分の目標を考えてみるといまだ本や、映像の中でしか見たことしかないフィリピンを肌で感じてみたいという、かなりあいまいな目標を掲げて初めての発展途上国に乗り込んでいきました。私は、この二週間の体験を通して、今まで感じたことのないほどたくさんの発見や驚き、そして疑問を経験しました。そのなかで自分が感じた「フィリピン」、「貧困」、「出会った人々」といった様々なことを徒然なるままに述べていきたいと思います。たった二週間という限られた時間の中で、しかも限られた場所の中で感じたことなので少し思い込みに近い、さらにはだいが主観的な意見もありますがそれは大目にみてください。

### フィリピンの社会について

フィリピンに着いて一番初めに驚いたことは、車の排気ガスの凄さだった。それはジーブニーに乗ったときにみんなひどく感じられたと思う。フィリピンには環境に対する意識は薄いのではないかと思った。憲法で国家国土に関する規定をしているのでこの国の自然、環境を大事にする国なのではないかと思う前は思っていたけれどもそうではないらしい。この国には排気ガス規制のようなものはないらしいと聞いたとき、私はアジアのなかで経済的に急成長を続けているこの国はまるで、高度成長期の日本のように思えてきてしょうがなかった。高層ビルや巨大なショッピングモールが建ち続ける一方、そのすぐ近くにはスラムがあり、また近郊の川にはゴミが平気で捨てられている。また、フィリピンの夜はなかなか星が見られなかった。おそらく、排気ガスの影響もあるのだろう。マニラの観光の日に海岸線を歩いたとき初めて、ちゃんとした星空を見た気がした。

環境を気にせずに、このままの状態では数年後には日本と同じような公害などの環境問題が発生するのではないかと心配してしまう。しかし、それは、日本人のような先進国の人なかなか押し付けに忠告できるような問題ではない、と思い、今でも気が重くなってしまった。

次に大きく感じたのは、「経済格差」だと思う。フィリピンがこれほどまで貧富の差が激しいとは思わなかった。フィリピンに着陸する前に飛行機の窓から見た景色は、高層ビルとスラムが同居したものでまるでジオラマを見る感覚であった。実際、私たちが宿泊したきれいなホテルから10分も離れていないところにマカチュリンはあり、自分たちのホテル生活とは全く違うものがそこにはあった。さらに、一番、フィリピンの貧富の差を感じたのは、確かにパヤタスのゴミ山を見たときにも同じくらい感じたのだが、それよりも、ワーク中にゴミを捨てに行ったパッシングリバーであろう。

ここに到着し周りをみた瞬間、私は仕事を忘れ、しばらくその景色に目を奪われてしまった。川の向こう側には新宿のような街並みが広がっているが、ふと自分の周りを見渡すと土手にはゴ

ミが散乱しその中で子供たちが遊んでいる光景が飛び込んでくる。自分はその光景を見ながら「どうしてここまで経済格差ができるのだろうか」と考え込むようになった。実は、その前から貧困についていろいろ考えてはいた。それは、さりげなく咲ちゃん(原 咲子さん)から「貧困ってなに?」「貧困はどうして生まれてくるの?」と聞かれたことがあったからだ。そのときから、自分の頭の中で考えているけれども、日本に帰ってきた今でもその答えはなかなか出てこない。自分は「歴史があるから」としか答えられない。これからもこの光景を忘れずにこの問題を考えていきたいと思う。

フィリピンに着いてから一週間ぐらいたった頃だろうか、フィリピンには政治的に未熟な部分があるな、と自分の中で思い始めるようになった。その経緯と考察を少し言いたいと思う。

フィリピンはキリスト教という宗教を土台とした国である。マカチュリンの共同体の中にはアイコンがたくさんあり、町のいたるところで教会が見られたように生活に密着している。自分がGVで訪れた学校では、生徒にキリストの歌を歌ったり、聖書の暗誦をさせたり、また生徒の親にも宣教師のような方が聖書の解説をしていて、宗教教育がなされているところをたくさん見た。フィリピンという国は、植民地時代の他の国の影響、また島国という地理的要因からこのようなアジアでは珍しい状況になったのだろう。

また、フィリピンは政治好き、とりわけ選挙好きで有名らしい。それは実際に、マニラの都会の中でもパヤタスのスラム街でもいたるところでモニュメントが建ち、そして街中にはたくさんの選挙のポスターや演説会の案内などが貼られていた。それは「ピープルズ・パワー」と呼ばれる歴史的出来事が国民一人一人に影響しているのだろう。

しかし、自分がこの宗教と政治の二点を考えたとき、たしかに、宗教は生活に深く、深く根づいているものなのではっきりと判断することは難しいけれども、フィリピンは宗教と政治がいっしょになっているのではないかと思った。つまり、政教分離がなされていないということである。そのように感じられることがしばしばあった。

どうしてそう思ったのかという経緯は、河ちゃん(河井君)のプレゼンまでさかのぼる。河井君のプレゼンは「フィリピンと日本の憲法の比較」であり、自分の興味を促すものだったので実は、話を聞いた後自分でフィリピンの憲法のことを調べたりしていたからだ。フィリピン共和国憲法第 章第6項「教会と国家の分離は不可侵であるものとする」と規定されている。それにもかかわらず、どうして私はそう思ったのだろうかその直接的な理由をいくつか挙げてみたい。

町のいたるところで選挙のポスターや講演会のようなものをやっではいるけれども、ほんとにフィリピンの人々は自立的な判断ができているのだろうか?と疑問に思ってしまう。まずは、マカチュリンの人々を見てみると、学校に行かない、仕事に行かない人が多く見られた。このような人々があまり政治に関心に向くことはすばらしいことなのだが、悲しいことにそれは煽動的なものに影響されやすい。また、GVの学校に訪れた時に気がついたことだが、子供、いや大人にまで聖書の道徳教育をしている。それはまるで中国の儒教のように宗教と教育が混ざっていることに驚きを感じた。それだけなら、こんなにも生活に宗教が密着しているのだなと思うところだが、もう一つ気が付いたことがある、それは学校にはアロヨ大統領の写真やカレンダーが飾られていることである。それ見る度に、北朝鮮の思想教育と同じような感覚に囚われてならなかった。

ここで自分がこう感じた原因の起因はアロヨ大統領にある気がする。アロヨ大統領は「ピーブ



ルズ・パワー 2」によって大統領になった人である。なった当時は父親の人気もあり大人気で当選した。彼女は厳格なカトリックであることは有名である。また、経済改革を大規模にやり、イラク戦争のときに軍隊を早期に撤退させるなど良い部分も見られる一方、ここ最近、選挙での不正疑惑や汚職が数多く聞かれる。また前回の大統領選挙で当選し、なんと九年半の長期政権になることが決定したのである。私はそこで「おやおや～」と疑うようになったのである。つまり、アロヨ大統領は自分の宗教や、政治的人気、支配力を利用して、子供から大人にまで自分の影響下にしているのではないかと思う。それはちょっと昔の中国のよう、国の宗教、小さい頃からの教育、大人への煽動、これすべてが政教分離されていないのではないかと思ったことにつながる気がするのである。また、フィリピンはナショナリズムが強いことも十分に考慮に入れなければならない。フィリピンはナショナリズムが強いことは、憲法、国歌によくあらわされている。

ま～ 日本も政治と宗教、そしてナショナリズムのことを考えると日本も問題がたくさんありそうなので、人のことは言えませんね。

### フィリピンの人々について

フィリピンの人々について印象に残っていることといえば、なんといってもフィリピンの人々みんなの笑顔であろう。GVで行った学校での子供の笑顔、ホテルの従業員の笑顔、マニラで出会った人の笑顔。どれも忘れられない一瞬であった。特に、マカチュリンでのワーク中での、みんなの笑顔は自分の疲れを忘れさせるほどの力があつた。たとえ疲れていても、子供たちが遊びにやってくると自然に体が動いてしまうのは自分でも驚きである。たしかに、マカチュリンではみんなシャイなところもあり、初めは子供の笑顔しか見られなかったが、日を重ねるごとに自分たちに慣れてきたのか多くの人々が素直な笑顔を見せてくれた。それに、金井牧師から教わった「魔法の笑顔」のおかげで打ち解けるのも早くなったのかもしれない。英さん(岸 英明さん)がフィリピンに行く前に「日本にはない、このフィリピンの人々の雰囲気を持って帰りたい。」と言っていたことが本当に実感できるようになった。

私はフィリピンで出会った人の中で一番心に焼き付いているのは四日目に訪れた Batis Center で出会った人々であろう。特に、自分と親しく話してくれたお母さんの素敵な笑顔は忘れられない。私は後ろのほうで英さんと日本語の上手なそのお母さんとたびたび、タガログ語の通訳をしてもらいながら語り合っていた。お母さんはとてもニコニコして、どんな話でも明るく話してくれた。自分のことを「私の息子よ」と言ってくれ本当に嬉しかった。(みんな覚えているかな? T-シャツやストールを売っていたよく話すお母さん。)しかし、ここで語られている日本とフィリピンの国籍の話と、ここに参加している人たちの家庭の状況を聞いてみると自分は強いショックを受けた。ここで、お母さんから聞いた参加していた人の境遇の話をちょっと紹介したいと思う。

日本に出稼ぎのためにやってきて、名古屋、そして東京にきて新宿でも働いていた。日本人男性と出会い結婚をしないまま子供を三人出産。日本国籍が欲しいため結婚しようと求めたがいつまで経ってもしてくれずその後その男性は逃げてしまう。日本国籍がないため長期に滞在できず、また子供三人と共に残されたのでは生活も苦しく、フィリピンに帰国する。

福岡に出稼ぎに行って日本人男性と結婚。そして妊娠をするのだが妊娠中に夫が交通事故で亡くなってしまふ。夫が亡くなると日本国籍はもらふことができず、子供と二人で残されてしまふ。母親の説得によりフィリピンに帰国する。

まだまだ、不幸な状況の方もいたがここまでにして、良い関係を築いている人もいた。ここで一つ紹介を。

日本で日本人男性と結婚。女子を出産するも離婚し、子供とフィリピンに帰国。しかし、いまだ連絡を取り合っているみたいで、今年7歳になる子供が、今度日本のお父さんのところに行って日本語の勉強をするそうです。(日本にいたときは横浜の鶴見に住んでいて、川崎の三菱自動車の工場や、横浜からバスに乗って、海の近くの倉庫で働いていたそうです。身近な話でビックリした。)

私は、これらの話を聞いて、「日本人のモラルはどうなっているんだろう」と本当に落ち込んでしまった。ほとんどの参加者が一人目の状況と似ている場合が多いからだ。しかも、明るく話しているお母さんも日本で結婚し子供ができたけれども、離婚しフィリピンに帰国したという過去がある。それにもかかわらず、こうして日本から来た自分に明るく話してくれる。自分はお母さんの気持ちの大きさを感じ、明るく相槌を返しながら、内心、お母さんの笑顔を見ると自然に出てしまう涙を抑えることに必死だった。Batis Center ではいろいろな感情が入り乱れ、気分は下がっていく一方だったが、唯一、参加している人たちの明るさや、笑顔に助けられた気がした。

改めて考えてみると、まるで一人の人間をもののように扱っている日本人がいることに嫌悪感を抱かずにはいられない。実際、自分が住んでいる町にはフィリピンパブのような店が立ち並び、夜になるとさまざまな国から来たと思われる人たちが店の前に立っているからだ。フィリピンから帰ってきてこのような店を見ると、ここにいる人たちもいずれフィリピンで出会った人々のような境遇になるのではないかと思うと、また、フィリピンにいたときの気持ちがよみがえってくる。

#### 最後に、まとめとして

今回、このワークキャンプを通していろいろ考え、学び、得たことのなかで自分にとって一番大切なことは「人とのつながり」ということだと思う。

考え、学んだことと言えば、たくさんあるけれども、たとえば、貧困に関して政府同士の協力はもちろん、国際組織、NGO といったところからの支援は大事だと思うけれども、結局はもっとも端にいて支援を受ける人は個人であり、その人たちに、また個人が支援、支給をしなければならない。つまり、同じレベルでの関係というものが、一番影響力強く、そして一番大切なのではないかと思う。ただ、物を渡すだけでは本当の支援ではなく、それ以外に自立を促すような技術協力などの人的、人材的交流が必要であると思うのである。それには、個人と個人の間が不可欠だからだ。今回、ボランティアとして参加してみて、まざまざと「人とのつながり」の大切さを感じられた。

「人とのつながり」として得たものといえば、経験したすべてのことが当てはまるがその中でも、マカチュリンの人々、現地の Habitat スタッフの方々との人間関係であろう。日本に帰ってきた後でも、Mail をしていまだに交流を続けている。こうして、「また行くからね！」と本気で思える場所、「また会いたいね」というその気持ちに同感してくれる友達のような人を、海外に作れたことは自分の中で本当に価値があるものだと思う。

そして、最後に得たものの中で一番大きなものは、このフィリピンワークキャンプメンバー、そして菫さん(菫澤さん)、タッキー(滝川さん)らいろいろとサポートしてくれた方との「人との

つながり」であろう。いま、振り返ってみると本当にこのメンバーとこのプログラムに参加できてよかったと思うし、このメンバーではなかったらどうなっていたのだろうと仮定してみると本当に不安になる。大学生活の中で、これほど充実して、そしてここまで本気で笑い、働き、遊び、怒り、考え、そして泣いたことはなかった。おそらく帰国前日だろうか、誰か（熱が出ていて覚えていないのが残念）が「おまえら、最高だよ！一生ものの友達だ！」と言っていた記憶が頭の中から離れない。きっと自分も同じ思いでいるからであろう。このような貴重な時間をみんなと過ごしたことをいつまでも胸に秘めながら、また、それを糧にしながら、みんなとのつながりを大切にしていきたい。

最後に一言。

ありがとう！そしてこれからもよろしくお願いします。

## 見て、触れて、震えること

英文学科1年 尾城 友理

貧困という「落とし穴」

しかし「底のない落とし穴」はない

あの2週間、色々なものを見た、触れた、感じた。自分の課題、日本の課題、フィリピンの課題、世界の課題。。。例えば、バスに乗ってちょっと道を走ると、ほとんど必ずといっていいほど見るのは日本企業を含めた外国企業の工場や看板。安い労働力を求めて進出したこのような外国企業が現地の人々を苦しめている、というのは有名な話である。しかしながらこういった外国企業が全くフィリピンから去ってしまったら、フィリピンという国家は成り立たなくなるのではないだろうか。あのような外国企業が全て撤退してしまったフィリピンを想像すると恐ろしい。農業や漁業といったフィリピンの伝統的な産業だけであの大量の人口を支えることは、現代社会の産業構造や経済システムの中では不可能なのではないか。

マニラ市街地を走るバスの中や、路を歩いているときに見た物乞いをする子供達の姿を、私は決して忘れることができないだろう。まだ、5・6歳くらいだろう。中にはもっと大きい子もいたし、もっと幼い子もいた。何を話しているかはわからない。けれども目が合った時のあの強い眼差しには、何か大きなものがこもっていて、ずーんと心に響いてきた。

改めて、今の社会の経済構造やそれに伴う開発システムには大きな欠陥があることを認識した。フィリピン出発前に傍聴した国連大学で行われたアジア・アフリカ太平洋国際都市会議のキーノートセッションのスピーカーである下山二郎氏の「技術の発展と文化の三つは切っても切れない関係にある。開発を考える時に文化に与える影響に配慮する必要がある。」という言葉思い出した。フィリピンをはじめとアジアにおける、日本を含む先進国の企業進出における失敗は、先進国の技術をそのまま持ち込むことに起因するのではないだろうか。フィリピンの文化を考慮した開発システムが誕生することは、アジア危機以降大きく低迷しているフィリピン経済の活性

化に大きな貢献をするのではないだろうか。

### バティスで考えたこと

二週間のフィリピン滞在中で、母と子（JFC = 日比結婚で生まれた子）を支援する NGO 団体であるバティス女性センターを訪問するというプログラムがあった。このバティス女性センターの中には石鹼工場のような場所もあり、フィリピン女性の職業訓練をしたりしているようだ。

フィリピンは、貧困ゆえに年間 400 万人もの労働者を海外に送りだす出稼ぎ大国。職種はさまざまだが、日本での需要はほぼ風俗産業に限られており、若い女性が殺到する。日本人とフィリピン人のハーフの子供たちには「ジャピーノ」と呼ばれるらしい。多少、差別的な意味もあるのではないだろうか。ジャピーノはこうした需要供給構造の落とし子である。マニラ日本大使館によると、日本・フィリピン間の国際結婚で必要となる書類の発行件数は、フィリピン人女性の日本への出稼ぎが盛んになるにつれて増えており、婚姻手続きを経てない出産も相当数になるとみられており、父親に養育を放棄された混血児の実態を示す統計は何もない。婚外子の場合、大半が胎児の段階で父親の認知が受けられず、日本国籍も認められず、母親が不法滞在などの発覚を恐れ出生届をしないため、子供が無国籍状態になるケースがある。

そういった状況があるにも関わらず、今日でも、ダンサーやホステスとして日本に出稼ぎに来るフィリピン人女性は後を絶たない。日本でも、若いフィリピン女性と日本人男性が連れ立って歩いているのを見かけることは珍しくない。フィリピンでも大きなショッピングモールなどに行く度に、日本人男性の支払いで買い物をするフィリピン人女性を見かけたものだ。私たちが訪れたコミュニティの中にも「日本人男性と結婚するのが夢」とか「日本のバーで働きたい」とか言う子供達に何回か出会った。もしかしたらこういう女性達は信じているのかもしれない。日本人男性が自分たちと結婚してくれるということを、そして一緒に生活を送ってくれるということ。

私たちのワークキャンプのコーディネーターである Rochelle の言うとおり、特に貧困層での平等な教育機会の欠如や、知識の欠落といった問題は、彼女たちが現実を知ることを阻む大きな壁の一つかもしれない。そしてこの問題は世界中（特に発展途上国）が抱える問題なのかもしれない。

もちろん、無責任な日本人男性の倫理は問われるべきである。夏休みにフィリピンに行くと告げると、いつもどおりのふざけた調子で「お土産に ” ピーナ ” 一人よろしく」「あ、俺もー」なんて言う大学生がいる。こんなことを平気な顔して冗談として言っている人間がいること自体が大きな問題である。需要があるから供給がある。どちらかがなくなれば、市場は成り立たなくなるのだ。

問題解決への壁は厚そうだ。

### 重い 100 ペソ札

ここに、一枚の 100 ペソ札がある。100 ペソは日本円に換算しておよそ 200 円位だ。しかしこれはただの 100 ペソではない。この 100 ペソは今ではもう使えない。第二次世界大戦中に日本がフィリピンを占領していた時に使われていた 100 ペソ札である。50 年以上前に使われていたこの 100 ペソ。ホームステイ先の TATAY（お父さん）の手書きの手紙と一緒に、日本に帰る日に TATAY からもらったものだ。

あの 2 週間のフィリピン滞在中、「第二次世界大戦中、日本軍に占領されていた。ひどいことを

された。」と、面と向かって口に出して言われ、拒否されたり、否定されたりしたことがあった人はいるだろうか。わからない。もしかしたら、自分の知らないところではそんなことがあったかもしれない。でも少なくとも私はそんなことされたことは一度もなかった。

この 100 ペソをもらった時、大変複雑な気持ちになってしまった。空港へ向かうバスの中でふと、出発前の研修会での金井牧師の言葉を思い出した。「去年行ったコミュニティは、第二次世界大戦中に日本軍に占領された地域の中にあった。当時の記憶を持っている現地の人に『一度目の日本人は悪いことをしにきた。でも二度目の日本人は良いことをしにきてくれた。』と言われた。」という言葉である。

少し心配である。「家を建てに来たっていうより子供と遊んでばかりだった」と言われても否めない節がいくつかある。。。しかもホームステイ中の私の食べっぷりはがつついていた、というしか言いようが無い(本当に美味しかったので)。おかわりはする、朝からパンを四つも食べ、拳銃の果てにはマンゴーを二つも食べてしまった。。。図々しい日本人と思われるはいないだろうか...「一度目の日本人は悪いことをしにきた。二度目の日本人はがめつかった」なんて思われていないことを切に願う。

この 100 ペソには「忘れてはいけない」という意味がこめられているのではないかと思う。戦争や占領のこと、フィリピンで得たもの、Makaturing のこと、ホームステイのことや、TATAY のこと。その上で改めて、あの温かいもてなしをしてくれたホストファミリーの皆さんの心の広さに感動した。それと同時に自分の心の小ささが恥ずかしい。

歴史は時として隠されてしまうことがある。隠されるまではいなくても、十分な情報を得られなかったり、主観的な方法でしか人に伝えられなかったりすることがある。第二次世界大戦中に日本軍がフィリピンを占領していたことを、全く知らない人もいるかもしれない。知っている人は多いかもしれない。知っているだけで、詳細は知らないかもしれない。もしかしたら、フィリピンを観光で訪れる日本人の中にも知らない人がいるかもしれない。歴史は、エリート層だけじゃなく、忘れ去られてしまったかもしれない一般市民の信じたもの、考え、感情という内面的なものも記録しているのである。

私にはこの 100 ペソをもらった責任がある。1941 年生まれだという TATAY が、今まで 60 年以上、大事にとっておいたこの歴史と記憶が刻み込まれた 100 ペソを私に託してくれたということは、同時に、私にその歴史と記憶を伝承してくれ、私に希望を託してくれたのではないだろうか。

哲学者ヘーゲルは、歴史を見るにあたり、「記念」から「内省」に進まなくてはならないと言った。過去の偉業の記念が記録を残すが、そのものがそのまま歴史なのではなく、それをどのように読むか、どのようにとらえるか、また、その記録の意味を考えると時に歴史ができるというのである。

すべての出来事は、過去の出来事になる。今日、10月22日に私はこのレポートを執筆している。一ヶ月前の今日、私たちはフィリピンの洗剤のにおいがぶんぶんする Makaturing の人たちが洗ってくれた服を着て、フィリピンから日本に帰国したばかりだった。トイレに便座があることに感動したり(二週間の経験に因るとフィリピンのトイレの 80%以上には便座が無いのである!)、”甘くない”食事に感動したり、路地にゴミが散らばっていないことに感動したりしていた。あの2週間、自分のすべてで、目の前にあったフィリピン。今はちょっと離れてしまったけれど、決してあの時、感じたことや、見たものを忘れてはいけないと思う。安易にただの安

っばい”思い出”にしてしまうことは危険である。そしてそれを踏まえて今、考えていくこと、誰かに伝えること、残していくこと、実行していくことは、新しい歴史をつくる上でかかせない。「記念」から「内省」へ

### 『ことば』と自分

今、両親と大喧嘩してまでこのワークキャンプに参加して本当によかったと思う。父の「自分のこともままならない人間が他人のことを助けられると思うのか」という言葉を思い出す。悔しいけれど、父は一枚上手である。たかが大学一年生で学生の分際の自分は、あの二週間で誰も助けたりはできていない。誰かのためになったとも思えない。むしろ、迷惑をかけっぱなしだし、自分の方がむしろ助けてもらっていたのだ。だけれど、唯一自信があるのは「誰かのことを楽しい気持ちにできた」ということだ。一緒に遊んだ子供達は絶対に楽しかったと思うし面白かったと思う。なぜなら私自信が楽しくて面白くてしょうがなかったからだ。そんな私は他の人には真似できない『自分』だと思う。

『気持ち』はいつも伝染していくのだということを感じた。問題は楽しさや嬉しさといった positive なことだけじゃなくて、悲しさやイライラといった negative なことも誰かに伝染するということだ。残念だけれども、『言葉』というある種の外的なものは『気持ち』という内的なものには勝てないのかもしれない。私は今まで『言葉』が全てで『言葉』にとらわれ過ぎていて『気持ち』を無視していたような気がする。その結果、コミュニケーション障害をしょっちゅう引き起こして、ギスギスしたり悲しくなったり自信がなくなったり理論武装したりと随分、問題児だったなと想う。

『気持ち』を大事にしよう！と決意したからこそ、言葉についての勉学に勤しみたい。文学部英文学科1年生の自分。今まで「ただ好きだから」という理由で言葉について学習していたが、漠然としたものだが、何か目標ができたと思う。

色々なものを見ることができた。そして自分は今、上手く震えることができていると思う。

Kung ikaw ay masaya, tumawa ka !! Hahahaha...

社会福祉学科1年 篠川 一恵

「Kung ikaw ay masaya, tumawa ka! Hahahaha・・・」これはタガログ語(フィリピンの言葉)で「幸せなら手をたたこう」の歌の歌詞の冒頭です。タガログ語では幸せなら手をたたくのではなくて、幸せなら「笑おう！ハッハハ～」と変わります。私は帰国後、何かあるとすぐこの歌を口ずさんでいます。タガログ語の響きも好きなのですが、「幸せなら笑おう！！」というところに惹かれています。私たちがフィリピンの子供たちに英語で「If you are happy and you know it clap your hands」(幸せなら手をたたこう)歌ったことがきっかけで、教えてもらいました。私

はフィリピンが初めての海外で、そして国際関係のことについて考えるのは初めてでした。滞在中、様々なことに触れ、考え、感じてきたのですが、うまく文章にまとめることは不可能に近いので今の自分がはっきりと言えることを述べたいと思います。

「幸せって何だと思いますか？」この質問にパッと答えることが出来るでしょうか？お金をたくさん持っていることでしょうか？地位とか名誉とかを手に入れることでしょうか？大抵の人は「違う！」って言いますよね。イソップ物語などの寓話の中では、お金や名誉、欲に目がくらんだ人には幸せな結末は待っていません。暖かい寝床があって、優しい家族がいて、友達がたくさんいて、五体満足で……。お金で買えない物を持っていることが幸せのひとつなのかもしれません。ひとりひとりが感じる「幸せ」は人によって変わり、人間と同じで十人十色だと思います。私はフィリピンにいる間ずっと幸せとはなんなのだろうと考えていました。

初めてマカチュリン村に入ったとき、そして村の人々と触れ合っている間、子供たちはもちろん大人もいつでも笑顔でいることに驚きました。とてもとても楽しそうでした。日本人とは違う素敵な笑顔をいつでも私たちに向けてくれました。民族的な性格というのものもあるかもしれません。しかしフィリピンよりはるかに物資も豊かで、人口の大多数がお金や住むところに困らない日本にはない、本当に明るく心からの笑顔でした。そして場所が変わりますが、パヤタスというごみ山の付近にあるスラム地域の子供たち。マカチュリンよりはるかに生活状況がよくないこの地域でさえ、子供たちは楽しそうに笑顔で遊んでいました。そして数人の少女たちは私たちのためにダンスを披露してくれました。私たちがフィリピンで見てきたのはほんの一部です。もっと生活状況が悪いところに行けば、そしてほかの国々へ行けば、笑顔なんて出来ないくらいの貧しさもあるかもしれません。ほんの一部しか見ていないけれど、私にはその笑顔がキラキラして見え、私の心を捕らえました。

同時に「貧困」とは何かを考えました。先程も述べましたが、フィリピン人の笑顔は生活状況の悪さを感じさせないくらい、とてもキラキラしています。「貧困」という枠を作っているのは、豊かな国、先進国といわれる人が線引きをして計っている感じがしました。そして「かわいそう」と決め付けてしまっている感じもしました。「だから援助をしなければならない」という国同士、または金持ちの傲慢さがあるように感じました。(以前ボランティアは昔貴族が暇つぶしのためにやっていたということを知っていたため。)私自身、フィリピンに滞在していた豪華なホテルや豪華な食事を前にして戸惑いを感じていました。しかし援助が無くては生活できない国もあります。明日の生活が出来るか分からない人もいます。誰かが援助しなければ助からないということもあります。

マカチュリンの子供の中にも日本人を羨ましく思っている子もいました。私は家の写真を見せたとき「お金持ちだね。」と言われました。それは少なからず貧しいという現実があるからだと思います。でも自分の周りがある環境、与えられているもので生活しています。生活せざるを得ない状況だとは思いますが、彼らにとってそれが当たり前な生活なのです。その苦しさを物ともせずいつでも笑顔でいる、その姿に大変感銘を受けました。私はフィリピン人の笑顔を見るたびに、物質的な面で日本より貧困でも、心は日本より豊かではないかと思ってしまいます。また日本人が知らない人間として大切なナニカを知っている、または持っているのではないかと感じました。

私はこのワークキャンプに自分の視野を広げたくて、また自分の知らない世界を見たいと思っ

で参加しました。もちろん人を助けたいという気持ちも持っていました。しかし、ワークキャンプは家を立てに行くことが目的のひとつ。家を立てることに無知に近い私ができることなど高が知れているという気持ちがありました。だからこそ人のためというより自分のためと言ったほうが強かったと思います。実際、自分の無知さが一番分かりました。語学的な面も合わせ、国際情勢、経済、歴史……。知らないこと、分からないことだらけでした。それを感じると同時にもっと知りたいという願望も強くなりました。先程まで述べていた「幸せとは何か」、「貧困とは何か」という事についてまだ答えは出ていません。あまりにも私が無知すぎることで、また一部しか覗いてないことにより出そうとしても出てきません。こういうことはもしかしたら答えなんてない、または答えなんて出すものではないものかもしれません。しかしそれを考えることは自分自身のために、これから自分の進路を決めていく上でも自分にとってプラスになり、また私が出会ったフィリピンの人、これから私が出会う人とよりよい関係が築けると思っています。

幸せだと感じることは一日のうちは何回あるでしょうか。数えたことが無いので分かりませんが、気づかずにいることも多いと思います。「Kung ikaw ay masaya, tumawa ka! Hahahaha・・・」とこの歌にあるように「幸せなら笑おう!!」ということを知り、フィリピンの子供たちから学んできました。フィリピンの子供たちは少なくとも私たちより、笑顔でいることがどういふことを運んでくるか知っていると思います。私がフィリピンで感じたあのすばらしい笑顔をここ日本でも見せることができるようにしたいと思います。笑顔のパワーは素晴らしいものです。慣れない文化の中で戸惑っていた自分や、ワークで疲れ果てた自分を癒してくれました。笑顔でいることの素晴らしさ。それが無知な私がフィリピンに行って学んだことのひとつとして、胸を張って言えることです。

Kung ikaw ay masaya, tumawa ka! Hahahaha・・・(幸せなら笑おう)

Kung ikaw ay masaya, buhay mo ay sisigla・・・(幸せなら態度で示そうよ)

Kung ikaw ay masaya, tumawa ka! Hahahaha・・・(幸せなら笑おう)

## ワークキャンプに参加して

経営学科2年 本田 紀子

「今年の夏休みはね、2週間フィリピンに行ってきたの!」

大学の友人や気心の知れた旧友にこう言うと皆「なんでフィリピンなの?何をしたの?」と不思議そうな顔をします。そして大学が主催しているワークキャンプであり、家を立てるボランティアという内容を口にすると皆、興味を抱くのか私の話を真剣に聞いてくれます。

私たち日本人にとって、フィリピンという国の名前は聞きなれていますがイメージが湧きにくい国なのではないでしょうか。「今しか出来ないことをやりたい・自分の視野を広くしたい・変



やりたい・何よりもこれに参加したらいつも何事にも踏み止まって一步を踏み出せず後悔していた今までは違う私になれるのではないか。そして誰かのために何か出来ることがあるなら、きっと私の生きる活力になるのではないか。」これがこのワークキャンプに参加した理由です。全くフィリピンについての知識はありませんでした。

事前に研修会が何度かあり、そこでフィリピンについて学んでいきました。発展途上国について、ゴミ捨て場の、ゴミの山の中からお金になる物を見つけ稼ぐ子供や若者、物乞いをするストリート・チルドレン、農園で奴隷のように働く少女、そんな長時間の過酷な労働や生活に耐えている人々の映像を観ました。「家を建てるボランティアをしに行く」くらいしか頭になかったので、こういった背景を学んでいくことは勉強になり、様々なことを行く前に考えさせられました。今の自分のあり方を考えるきっかけになったと思います。研修会の1番最初に『忘れられた子どもたち』というビデオを見たのがとても印象に残っています。マニラ市のはずれにある「スモーキー・マウンテン」という町中のゴミが集められるゴミ捨て場で暮らす子どもや人々を追ったドキュメント映画です。映画は少し前のもののようにでしたが、現実にあった世界なのだとということにショックを受けました。17歳前後の少年や少女が中心に進んでいくのですが、老若男女が少しでも売れそうなものを拾おうと一面ゴミしか見えない場所で1日を過ごすのです。そこは東南アジア最大のスラムで、5万人以上の人々が生活していたようです。そこで暮らす不衛生さや将来への不安やそこにある死と向かい合っている人々の姿が最初に見たフィリピンでした。

今回のワークキャンプではマニラ首都圏郊外のパヤタスにあるゴミ処分場の見学もありました。やはりそこにもスラム街がありました。スラム街は、フィリピンの人々にとっても近寄りたくない場所のようです。私はスラムの中を歩くことに怯えました。視線がとても冷たく感じまっすぐ前を向いて歩けなかったのです。でも、それは私がスラム街に偏見を持っていたからでした。スラムの街を通りゴミ捨て場が目の前...という所にまで行き、ゴミの山を眺め、確かに言葉を失いました。ここはあるべき場所ではない、と。ですが、そこで何千もの人々が生きているのも事実でした。そこで暮らす一軒の家にあがらせていただきましたが、スラムでは比較的裕福な家だったのか電気が通っていて、ひと家族が暮らすには決して広くはないですが思っていたよりも私たちの生活に近いな、という印象を受けました。彼らには家族や友達や仲間がいて、笑顔があり、将来に希望がありました。子供に夢を託す親がいれば、家族のためにも勉強したいと望む子供がいました。話を聞けば、私たちと変わらない人間であり、私たち以上に笑顔が満ち溢れているようでした。スラムに住むことは、不幸と言い切れないのだと悟りました。

一般的にボランティアと家を建てることは結びつきにくい事柄です。何故、家を建てるのか。私自身、どうやって家を建てるのか、人が住める家を作れるのか、体力は持つのか...といった不安もありましたが、現地ではなんとかやれたのではないかと満足しています。砂利や砂、ブロックの移動の流れ作業が主でしたが、さまざまな体験をしました。ワーク初日に、壁となるブロックを積み重ねたのですが、そのブロックのひとつひとつの穴にセメントを入れてはまたブロックを積み重ねていくので実は気が遠くなりそうでした。単純作業だったので。ワークキャンプの良いところは、そんな単純作業から人への気配りをするようになることではないでしょうか。メンバー全員が互いの疲労や体調の変化に気を配っていました。「大丈夫？ 疲れたら変わるから言ってね！」と作業を交代しながらやっていたのです。砂を袋に詰めるのも体力は使います。スコップで砂を取ると意外と重くて... 普段の日本での生活ともかけ離れた作業をしていたので、毎日

がとても新鮮でした。作業をしたマカチュリンという村はとにかく明るくて、いつも私たちの周りには子供達がいて笑顔が耐えませんでした。

フィリピンでは何らかの理由で両親のもとを離れ、路上で暮らすストリート・チルドレンと呼ばれる子供達もいます。車が止まると近寄ってきて花などを売っている子もそう呼ばれる子供達のように。他のボランティアに参加するリサーチプロジェクトの活動の日が2日間あり、両日とも小学校と教会に行きました。教会で会う子供は数人でしたが、ストリート・チルドレンの子供達との交流を持つことができました。最初は恥ずかしがりやな印象を受けましたが頑固で、力がとてもある子達だな、厳しい世界を生き抜いているのかな...という感じがしました。一人の少女に「あなたの家族は何人？」と家族構成と家族の名前を聞かれました。「ふうん」と頷き言った名前をリピートしながら聞いている少女の姿を見て私は、何を考えているのか不思議でした。辛いこともあるのに無邪気に笑って反応してくれます。フィリピンにはあたたかい表情の笑顔がどこに行ってもありました。きっと、どんなに辛い生活や貧富の差がひどくても、人間は生きていかなければいけない。それを彼らはわかっているのです。どんなに貧しくても、家族や友達がいる。大切な人がいるからその人のために自分が犠牲になることを構わないという強い絆があるようにみえます。だから、ストリート・チルドレンの子供達は誰も恨むことがなく、強く生きているのでしょう。珍しいはずの私たち外国人にすぐ打ち解けてくれたのは、人が好きだからだと思い私は嬉しかったです。

フィリピンにいた2週間は本当にあっという間に過ぎ、毎日考えさせられる事がありました。そして今では家を建てに行っただけではなく、人の心に触れに行っただと考えます。そして、こういった様々な問題に真面目に話し合える仲間ができました。フィリピンに衝撃を受け、時には助け合いながら励ましあい喜んだりして親しくなった仲間です。学ぶこと、得るものがたくさんあり、今までにないほど充実している日々でした。私が生きていくうえで支えとなるような体験ができたので、参加できて本当に良かったです。

## 見たり、聞いたり、話したり。

英文学科2年 喜多 洋平

僕のこのワークキャンプで経験した事と言えばフィリピンという異国の地でその文化を見たり、聞いたりした事、そして日本語を使わずにコミュニケーションした事に尽きると思います。

フィリピンの街並みは日本でずっと暮らしていた僕にとってとても新鮮な映像でした。近代的な建物と古い建物とのコントラストがよく目につきました。たとえば近代的なショッピングモールと道路を挟んで反対側に市場がありました。これらは見た目が対照的で、価格もとても対照的でした。他に挙げるとするならばすこし都市とは離れたところに行った時、道路の脇には古い建

物が並んでいましたが、その中に日本の自動車会社の販売店が出現したのです。これにはとても驚きました。その建物は日本にあるそれとなんら変わらないもので室内を見ると綺麗な車が並んでいました。よく考えるとこの建物の近隣に住む人々はここで車を買う事があるのだろうかと思ってしまうくらいその販売店は回りから浮いていました。フィリピンはそのような、新しい建物と古い建物の差がとてもあります。ここでいう新しい建物は日本と何ら変わらない、しかし古い建物はその土地独特であり、それは僕が日本で見た事がないようなものなのです。見た事がないような建物だから見慣れたものと対照的に見えるのかもしれない。しかしその建物の機能の差異はとても大きい事は確かです。機能というのは例えば冷暖房であったりトイレであったり、それら内部の構造が明らかに異なるのです。

フィリピンの道路交通法は日本とは全く違い、とても緩いものでその道路を見るだけでそれが分かります。フィリピン特有の乗り物でトライシクルというものがあるのですが、これは原付バイクにサイドカーを装着しただけのものなのですが、この乗り物に運転手を含め僕は七人で乗りました。この乗り物がここで規制の無さを象徴しているように思えます。このような乗り物は日本ではとても考えられません。そしてそして、ここでは排気ガスの規制がないのです。フィリピンの都市が集中するマニラ首都圏はとても交通量が多く、その上このディーゼルエンジンの排気ガスが大量に撒き散らされているのですから大気汚染も深刻です。そのマニラ首都圏の中心であるマニラ市に行ったのですが僕は外を長い時間歩いていたため、喉が痛くなってしまいました。こんな空気を毎日吸っているフィリピンの人達は大丈夫なのだろうか。

しかし、同じ煙でもタバコに関する規制はとても厳しく、室内で喫煙出来る場所は全く無かったのです。レストランでもファーストフード店でもコーヒーショップでも喫煙は許されてはいませんでした。日本ではここ数年で分煙化が進んでいますが、フィリピンではここ数年で急速に進んでいるのです。この点は日本も見習うべきところであると思いますが、そうしますとあの排気ガスも体にはとても有害ですから規制を設けて欲しいと思いましたが、やはりそれはタバコと違い、とても金銭の負担が大きいのでしょうか。新型の地球にやさしい車はなかなか買えるものではないのですから難しい問題であるとは思いますが、国民の健康のためにも、地球環境のためにも必要な事である事は確かです。

フィリピンはこのように近代的な建物とそうではない建物が共存していて、交通規制や排気ガス規制はとても緩いものでありました。僕はフィリピンのほんの一面しか見ていませんが、この国が発展途上国なのであるという事は十分に伝わってきました。建設も相次いであり、これからさらに変貌をとげていくのでしょう。

そして次に僕の当初の主な参加の動機であったコミュニケーションについてなのですが、僕はフィリピンの人々とは悪戦苦闘をしながらたどたどしい英語を使いながらなんとか会話をしていました。僕がフィリピンという土地にいるという事はフィリピンの人々と接するという大きなチャンスが僕の目の前に転がっているのだという風に僕は考えていて、そのチャンスは逃すまいと会話をする事には積極性を持ち行動をしていました。フィリピンの人々とは悪戦苦闘をしながらたどたどしい英語を使いながらなんとか会話をしていました。会話をする際に英語を自由に使う事の大変さを知り、それと同時にそれが自由に使える事がどれだけ素晴らしい事なのかという事を改めて痛感させられました。僕はフィリピンで接した多くの人々にお世話になり、色々なものをもらいました。もらったものはここでは語り尽くせませんが、それに対して僕が伝えたい感

謝の気持ちは英語ではなかなか表現できないものでした。自分が聞きたい事もなかなかうまく表現出来ないというようなもどかしさを常に感じていました。しかしその中で英語を通じて知った事、分かった事はとても貴重なものであると考えています。

しかし、コミュニケーションする方法が言語だけに限られていたという事ではない。僕はまた言語を使わなくても、顔の表情や振る舞いで気持ちを伝えることが出来るという事を実感しました。

たとえばダンスは言葉を必要とせず見せるだけが方法なのであるからそこに僕は魅力を感じました。しかし今回実感した事はそれだけではなくやはり英語を話せるようになったらどれだけ自分の世界が広がるか、英語に対する意識、話せるようになりたいという意識はとても強くなった事は確かです。

## ハッスル・エビ・フィリピンの冒険

英文学科 2年 海老澤 毅志

「どこでもいいから海外へ行き、ボランティアを体験したい」という思いで、このフィリピンワークキャンプ 2004 に参加した。そんな安易な理由からか、神様のいたずらか、13分の3の確立で抽選に落ちてしまった。しかし、これまた神様のいたずらか、菰さん(菰澤さん)のいたずらか、10分の2の確立のなか敗者復活戦で這い上がった。そんな運命に感謝・感激しつつ、その後の数回の研修会と合宿でメンバーとの仲を深め、多くの知識を得て、フィリピンへと飛び立った。そしてフィリピンで様々なものを見て、様々なことを聞き、多くのことを感じてきた。

### フィリピンの現状

フィリピンという地に足を踏み入れた瞬間、想像していたフィリピンより大きく発展していることに驚いた。目の前には数々のビルが広がっており、多くの新しい車が走っていた。メガモールは一日では回りきれないほど広く、日本でも有名なブランド品なども売っていた。日本でも有名なコンビニやファーストフード店もところどころあり、ものすごく安く、よく利用していた。サイト先の教会や家々には発達した音響機器やテレビ、ビリヤードやカラオケもあり、家によっては冷房までもあった。アヤラでは、パソコンを使ってビデオや音楽、画像を編集したりしていた。今まで見たこともない光景に、教える側の自分がいつの間にか教えられていた。ごみ山で有名なパヤタスの中にもゲームセンターに戯れる子供がいた。今までの先進国に対する知識やイメージに加え、事前研修や合宿でごみ山の映像やごみ拾いをする子供達などのビデオを見て、正直なところ、フィリピンに対して貧しいイメージを持ってしまっていた。ごみ山での目を疑うようなごみの量やごみを拾う子供たちの姿には、やはり衝撃を受けたが、フィリピン全体のイメージとしては日本を出たときのイメージが一新された。フィリピンなどの発展途上国で貧困が激しいと言っても、いたるところに先進国と肩を並べる技術が見られた。

### フィリピンの Children

サイト先、パヤタス、アヤラなど様々な場所で多くの子供に出会った。率直に言うと、日本の子供とあまり変わりはなく、最高の笑顔を見せてくれた。サイト先では、慣れる前に変な動きで一人の子供に近寄っていったら泣かれてしまったが、徐々に心を開いてくれ、追いかけてこしたり、持ち上げたり、バスケットボールしたりした。作業の後にも「もう勘弁してくれ」と思ってしまうほど絡んできてくれた。日本で幼稚園に訪れたことがあるが、子供たちの反応や行動は、まさに同じであった。パヤタスではごみ山のすぐ側でキャッキョと騒ぐ数人の子供がおり、町中にも走り回る子供がいた。ごみ山の側にうつむいて座る一人の寂しげな少女がいたが、手を振ったりすると、はにかんだ笑顔を見せてくれ、心打たれた。アヤラでは、パソコンの前に座って私たちが行って挨拶しても、照れているのか、すぐ目を背けてしまい、ちょっと引きこもりの子供たちかな？という印象を持ったが、一人一人に話しかけてみると、微笑み返してくれたり、一緒に汗を流してバスケットボールをしたりと、子供ならではの笑顔を見せてくれた。やはり子供は国境を越えて元気で無邪気な笑顔を持ち、体全体でぶつかっていけば、体全体でぶつかってきてくれるのだ。大の子供好きな私にとって喜ばしい限りであった。どの国の子供も自分にとっては天使です。

### フィリピンの安全対策

フィリピンの安全対策としては、テロやコンビニ強盗などへの対策は厳重であった。夜のコンビニには首からかけた拳銃をおもむろに握り締めた店員さんがいたり、ショッピングモールに入るときに一人一人バック検査をしなければならなかったりと、様々な場所に対応策がとられていた。しかし、一方では、ルーズと言うのかなんと言うのか、もう少ししっかりしたほうがいいと思われる面があった。まず、サイト内の家の施錠が簡易すぎたことだ。まあサイト内の信頼関係があるのだろうけれど。最も気になったのは、交通面での安全対策である。驚くほどに車が走っているのに、マニラ近辺以外には信号がほとんどないのである。クラクションの音が飛び交うというテレビでよく見る光景だが、ぎりぎりのところに半ば強引に割り込んでいくドライバー達。しかし、事故現場に一度も遭わなかった。ただの偶然かもしれないが、彼らのドライビングテクニックには驚かされた。また、マニラ近辺含めどこにも歩道橋といったものがなかった。子供たちやお年寄りにとって、信号のない道である大量の車をぬけることはかなりの難題であろう。また、今やフィリピンの人たちにとって欠かすことのできない足であり、私たちもよく利用したジープニーだが、乗降方法は日本のバスよりかなりルーズだった。ジープニー停というものがなく、タクシーのように乗りたいところから乗り、降りたいところで降りる。ただ乗りも夢じゃない…。乗降車口は終始開いていて、降りたくもないところで振り落とされることもありそうだった。

### フィリピンの宗教

フィリピンでは、90%の人がキリスト教信者であるため、色々なところでキリスト教の教えによるものが見られた。彼らのキリスト教に対する信仰心には驚かされるばかりであった。カトリック教会でのミサに参加する機会があったが、そこにはあふれんばかりの信者が聖体を受けに来ていた。ミサの最中、うたた寝する人や話している人はまったくいなく、熱心に牧師の話に耳を傾け、共に祈りを捧げていた。個人的に牧師の講話の中の「Change is my life project」という話に興味を持った。また、サイト先もキリスト教を信仰しており、様々な場所にイエスや聖母

マリアの肖像画が掲げられていた。ホームステイ先で教わったのだが、誰かの家を訪れた時、その家の最年長者の前にひざまずき、手を取り、自分の額にあてるといふしきたりがあるそうだ。正月には神社を訪れ、クリスマスを盛大に祝い、お寺で葬式を挙げるといふ生活を送ってきて、特定の宗教を深く信仰することのあまりない日本人にとっては驚くべき信仰心である。まあ、どちらにも利点があり、どちらのほうがいいのか判断しづらいが…。しかし、いろいろな場所でキリスト教を信仰する姿を見てきたが、なかなか理解できない面もいくつかあった。それに関しては、夜な夜な金井牧師とビール片手に話し合った。合宿のときも夜遅くまで牧師の話聞いたが、やはり金井牧師ってすばらしい！また、ごく少数の人たちは自然宗教であるらしい。イチロウ(河井翔一郎君)のプレゼンで学んだことで、フィリピンの憲法の第一条は「国土」に対してであるのだが、その点では「国土」といふ大自然を崇め敬うといふ日本神道と通ずるところがあるのかもしれない。

### 物乞い社会の現実

事前研修を重ねる中で最も興味をもったのが「物乞い」についてである。それまで物乞いといふものはある程度知っていたが、個人プレゼンのテーマとして調べていくにつれて、物乞いの深さを知っていった。実際物乞いをされたら、お金ないし、食物をあげるのかといふ問題にもぶつかった。その場限りのことでしかないとか、一度物をあげてしまったら、もらう癖がついてしまったり、一人にあげたらもっと集まってきてしまうといふ意見があったが、私としては、自分では生計の立てられない、特に子供は今を生きるために必死であると思ふので、何かしら物をあげようといふ考えであった。また、物乞い社会を作ったのはその国のせいなのだから、その国の政府で何らかの対策を施せばいいといふ意見もあったが、日本では、そのような人たちに対して何かしらの保障などといったものがあるだろうが、フィリピンにはないので、自分一人といふ小さな存在でも何かできることをしたいと思ふた。そんな中、高橋歩著「LOVE&FREE」のなかで物乞いをしてくる子供たちのことを著者はこう言う。「こいつらは MONEY にでもなく、FOOD にでもなく、LOVE に飢えているんだ。」心打たれた。「愛だよ、愛」などと、物乞いに対しての考えを自分の中である程度確立していった。しかし、フィリピンでいざ現実に物乞いに出会ってみて、その考えは全て打ち壊された。作業からジープニーでの帰宅途中、クラクション鳴り響く渋滞の中、いくつもの車をはしごしながら雑巾のような布を売り歩く数人の子供。いわゆる物売りである。つぶらな瞳で車の窓を叩いていた。ジープニーの中から眺めることしかできなかった。また、マニラでの自由行動の日、タクシーの助手席に乗り信号につかまっていた。急に窓を叩かれ振り向くと、80歳ほどのおばあさんが、両目がつぶれていて片手のない30歳くらいの男性の手を取り、何か物をせがんできた。不具者物乞いである。恐くて目をそらしてしまった。他にもおもちゃを売る大人たちを見た。何もできなかった。車に乗っていたときにしか遭わなかったが、おばあさんたちの場合は窓を開けて何かしらあげられたはずなのに。「愛をあげる」などと胸を張って言っていた自分が情けなくてしょうがなかった。もしも道端で物乞いに遭ったとしたら愛をあげられていたのだろうか。その人の心に一瞬でも刻まれ、何らかのプラスになれるのだろうか。物乞いをしてくる人たちに愛を捧げるなんて、イエスのような行動はそんな簡単にとれるものではないと思ふた…。現実の物乞い社会に直面して、物乞いに対する考えを改めなければならなかった。これからもっと物乞いに対しての知識を得て、多くの発展途上国を訪れ、様々な形の物乞い社会に直面して、自分なりの考えを確立していきたいと思ふ。

最後に・・・

二週間という短い期間ではあったが、一分一秒も無駄にした時間がないと思うほど充実した時間で、日常の生活では想像すらできない貴重な体験をした。この体験は一生私の心に刻まれ、血となり肉となって、今後の人生に深く影響してくるだろう。このような貴重な体験を与えてくれたプライベートでは牧師らしからぬ顔を持つ金井牧師をはじめ、ゆかいな中にも厳しさのある宗教部の先生方、どんなに疲れていてもいつも笑顔で接してくれた現地の人々、内心では反対していたであろうが賛成してくれた両親、そして一人一人が個性を出し、共に泣き笑い、同じ時を過ごしたかけがえのないメンバー達に感謝したい。これからもこのような一瞬一瞬の出会いや機会を大切にしていき、人間として大きくなりたい。そして、広くなった視野でフィリピンへ行き、今回見えなかった新しい面に目を向け、さらに多くのことを感じ取りたい。WorkCamp04 のメンバー達と共に…。

## フィリピンと私

英文学科2年 原 拓弥

9月8日、現地時間のお昼頃にフィリピンに到着。長い研修期間を経て、ついにたどり着いたフィリピン。ドキドキしながら空港の外に出る私。しかし外に出て率直に頭に浮かんだものは「あれ?」という疑問。頭で想像していたフィリピンと実際目で見えたフィリピンは大違いだった。そのギャップのせいか、到着したという実感はまったくといていいほどわいてこなかった。そんな感じのままバスに乗りランチ場所へと向かう。そこで私はフィリピンの交通状態を目の当たりにして驚いた。行き交う車・バイクは皆、我が道を走っているという状態。左方優先や止まれなどの交通ルールというものがほとんど無いといった感じでとても恐ろしかった。一応右側通行という決まりはあるようだが、片側二車線・三車線の道では車線は完全に無視されている。私は絶対にフィリピンで運転したくないと思った。そうやってバスから道路を見ていると、ところどころにジープニーやトライシクルが走っているのを見た。その瞬間、私は「あっ、やっぱりここはフィリピンだ。」と感じて、なんとなく実感がわいてきた。そしてランチ場所に着いたのだが、着いた場所は日本でいうマクドナルドに相当しそうな? ジョリビーという内装も立派なファーストフード店。やっとわいてきた実感はあっさりとなくなってしまった。ランチの後、バスの中で景色を見ながら私は考えた。私はフィリピンに対して発展途上国という国をものすごいマイナスなイメージをしすぎていたようだ。フィリピンという国は本当に文字通り、まさに発展途上国という言い方が当てはまる。民家や自営業の店を見た感じ、木材ではなくブロックとコンクリートを中心に積み立てた古臭くボロボロな感じなものが多い。しかし視野を広げて景色を見てみると、立派な建物や建設中の高層ビルなどがところどころにあり、街が発達し始めているのがわかる。戦後の日本が高度経済成長の波に乗っている時もこのような景色だったのかと思うと、なんだか自分が戦後の日本にいたみたいで楽しくなってきた。こうして頭の中を整理していると、なぜか自分がフィリピンにいるという実感が完全にわいてきて、その後は何を見てもここはフィリピンなのだと思える事ができた。

作業場所のマカチュリン村では、初めて訪れた時は村の小さい子どもたちやお

年より連中は興味津々といった感じだった。彼らは笑顔で我々に近づいてきて、歓迎をしてくれてすぐに打ち解けることができた。しかし年頃の子もたちや大人連中（全員が全員ではないが）は「なんだこいつら？」と言いたそうな顔をしていて快く受け入れてくれていないように感じた。こっちが笑顔をして挨拶をしても、あちは眉毛を上げる動作ぐらいしかしない、中には少し警戒したような笑顔で返してくる。何が気に入らないのか、ただ人見知りをしているだけなのか、日本人が嫌いなのか、ボランティアなんか余計なお世話だ！と思っているのか・・・いろいろ考えたがその時はわからなかった。時間が経っていくにつれ村に慣れ、わかったのだが眉毛を上げる動作はフィリピン人からしたら立派な挨拶らしい。それに村人の顔も覚えてくると青年も中年の人たちも自然な感じで笑ってくれるようになっていった。年頃のフィリピン人は多少なりとも人見知りをするんだと私は思った。

そしてマカチュリンの家を見たとき、私は驚いた。中には立派できれいなものもあるが、大半は家の壁になっているブロックのセメント作業がアバウトでくずれないのか？と思われる家ばかりだ。そんな家の外見にも見慣れてホームステイをする日がきて、また私は驚いた。やはり先進国の日本で育った私、家の環境にはなかなか馴染めなかった。家にはシャワーなどの設備がなく「シャワーを浴びたいんだけど・・・」と言うと、トイレの小屋に連れて行かれ、そこで浴びるのだと言われた。そこにはひざ下ぐらいのバケツが置かれており、そこに溜めた水、お湯ではなく水を体にぶっかける、いわば水浴び状態。これは体がその冷たさに慣れるまで大変だった。更に言うところ場所が場所だけに浴びたあとの気分は最高に微妙だ。トイレには便座がなく紙もない。流すのは自分で水を汲み取りそれを便器に流す、手動の水洗のトイレだ・・・。そして床にはゴキブリが何匹いるかわからない。寝床がベッドだったからよかったものの、もし床で寝ていたら・・・想像したくない。しかしそれら三つの要素に目をつぶれば他は日本と大差はない。テレビ、DVD デッキ、オーディオなどは普通に置いてあるし、キッチン・流し場の設備だってしっかりしている。他にも不便なところはあると思うが特別目だってそう思うところはない。生活する分には十分な環境である。だから慣れてしまえばごく普通に生活できる。ただ生水だけには注意が必要。大丈夫と書いてもしっかりとお腹をくだした。

フィリピンに来る前の研修会でいろいろと考えさせられたスモークマウンテン、実際私はそこへは行きたくなかった。フィリピンで有名なスモークマウンテンとはいえ、そこではあくまで普通に暮らしている人がいる。そこを観光地として訪れるのはどうかと思っていた。ゴミの山、生活水準の低さ、それらを見てどうしろというのだ。かわいそう、汚い、臭い、そう感じると?? 本当に行きたくなかった。実際そこにはものすごい大きなゴミ山があった。子ども達はそこでゴミ集めをしていたりそこを遊び場にしていたりしていた。においはところどころでしたりしなかったり。ひどく驚いたのはゴミから出た水分で川のようなものができており、それはおぞましかった。と、心で嫌だと思っておきながらしっかりと観光をしていた。しかしそこではかわいそうとは思わなかった。やはり村人同士がとても仲がよく皆明るく元気だ、「貧しくても幸せ。」まさにその通りだ。皆、何一つ不便そうな顔はしていない。どうしてゴミ山のそばで暮らしながらこんなに純粹できれいな顔ができるのだろうと思った。どうして心から笑った笑顔ができるのか、何がそんなに楽しいのか、まったく辛くないのか。やはり実際に目で見ると更にいろいろ考えさせられた。

今回のフィリピンワークキャンプを通して私が学んだものは笑顔かもしれない。フィリピン人は笑顔がとてもきれいである。本当になぜそこまで心から笑顔になれるのか。聖書の中でイエスの例え話で隣人を愛せというものがある。フィリピンという国はまさにこのことなのではないだろうか。自分を愛するように、国を愛し村を愛し家族を愛し隣人を愛する。そうすることで人を思いやれる、人を理



解できる。そこから笑顔というものがごく自然と生まれてくるのではないだろうか、私はそう思った。

## 最高のフィリピンワークキャンプ

国際学科2年 大沼 知恵

二週間のフィリピンワークキャンプは、毎日が新しいことの経験と発見で、とても充実したものでした。そして得たこと学んだことがたくさんありました。それは帰国後、普段の生活や行動に表れることもあれば、新しい視野となって、考えるときのひとつのアプローチになっていることもあります。それは、フィリピンに行くまでに熟成してきたチームワーク、ハビタットの日本、フィリピン支部の人の協力、グローバルビレッジプログラムにおける活動などが無ければ得られないことでした。もっと言うと、宗教部や現地のあらゆるスタッフ、現地の市民のサポートや協力も必要不可欠でした。関わった人全員に感謝の気持ちでいっぱいです。

ただ、不安というのも付き物でした。まず、建設活動をする村に溶け込み、村の人たちと仲良くなれるかすごく不安でした。援助しに行こうとしているわけではないので、どんな立場で接したら良いのかもわかりませんでした。しかし、村に着くと、子どもから大人まで大勢の人が迎えてくれたのです。とても驚きました。村はにぎやかで、家の玄関や窓から顔を覗かせている人も多くいて、沢山の人が挨拶を交わしてくれました。広場には音楽が流れ、人々はダンスをしていました。これは初めての空間でした。ウェルカムパーティーのときも、広場の周りにぎっしりと人が集まって歓迎してくれました。戸惑いながらも、私はこのウェルカムパーティーがとても印象に残っています。

また、ワークキャンプの作業の中心となる家の建設作業も不安でした。行く前まで、どんな家をどのように建てるのか何も伝えられて無かったからです。何も知らないまま命を守る家を建設できるのか、と。実際は、ほとんどは現地に行ってから知り、地元の大工さんに教えられながら作業をしました。日本みたいな木材を使って建てるのかと思ったらそうではありませんでした。手作業で針金をくくりつけてできた鉄の棒の骨組みが柱となり、積み上げたブロックをセメントで固めていき、それが徐々に壁となっていったのです。針金のくくりつけは、少しでも緩んできたり間隔が不均等だったり、棒が平行じゃないとやり直していたので、一つ一つ緊張感をもって取り組みました。

幸運に、建設活動は一週間もあったおかげで、大きな不安はしだいに感じなくなっていきました。それは、メンバー同士の掛け声、スタッフのきめ細かいサポート、村の人との交流、子どもたちとの触れ合いがあったからです。作業の休憩時間や昼食時には、村のお母さんが、手作りのおやつや料理を出してくれて、宿泊先のホテルや外食先のレストランにはない、フィリピンの家庭料理を堪能することができました。食後は村の子どもたちが沢山広場に集まってくるので、み

んなでスポーツしたり、輪になってダンスを踊ったり、追いかっこをしたりと、とても楽しい時間を過ごしました。

そして、建設中に嬉しいことが起こりました。それは、ブロックリレーをしていた時のことです。350個近いブロックをバケツリレーと同じように、倉庫から建築場所まで、運び回していました。最初はメンバーだけで行っていたのですが、後から周りにいた子ども2・3人がリレーの中に入って手伝い始めてくれたのです。その数はどんどん増えて行き、気が付くと、子どもから大人まで10人以上の人が列に立っていて、一緒にブロックリレーのWorkをしていました。手伝ってくれたということよりも、一緒にWorkをしたということに、私は嬉しさを感じました。なぜなら、チームの目標である、Build a partnership, friendship, relationshipが、Workの中で実践することができたからです。肉体的に疲れていた私は、彼らと共に作業をしていくうちに元気が戻ってきました。お互いに掛け声を掛け合ったりもしました。この他に、セメントの受け渡しの際も、ミンダナオ島から来てくれた建設作業員の男の人たちと一緒に楽しく作業をしました。

建設活動では、実際の建築作業と同時に、人々との交流が充実していたように思います。どれほどの人数の子どもたちと遊んだか分からないくらいです。二泊三日のホームステイでも、大家族ですぐ近くに親戚も住んでいるので、色々な人に知り合えました。そこでステイでは、フィリピンの生活文化に触れることができた以上に、家族と過ごして感じるものがありました。Hospitalityに納まらない心に残るものがあります。

これほど充実した建設活動だったので、farewell partyでは、雨の中でも盛り上がりました。合宿を通して練習してきた応援と「座頭市」のダンス、歌は成功し、民族舞踊やパフォーマンス、歌も繰り広げられました。最後は、色々な音楽に合わせて踊り明かしました。歓迎の時のパーティーと同様に、こんなパーティーは初めてでした。そこでなんとなく感じたことは、人と楽しみや幸せを分かち合うのがフィリピンの人にとってはごく自然なことかもしれないということです。また、人を喜ばせたり楽しませたりすることも同じです。

建設活動以外では、他のNGOの活動訪問や、日曜の礼拝にも行きました。スモーキーマウンテン(ごみの山)もまた、印象に残っています。ごみ山のごみを拾っている子どもたちがいるのを見て色々と考えさせられました。これは日本の社会にも通じることだと思いました。とりあえず私は、物を本当にゴミになるまで使い、リサイクルできる物を除いて、ゴミになった物に何も価値を与えないようにしようと思いました。私自身、捨てようか迷う物は、たいてい取っておいてしまうからです。グループリサーチでは、小学生の子どもに日本語を教えたのと、ストリートチルドレンの集まる教会を訪れ、折り紙をして交流しました。二回目は、また日本語を教えたのと、教会ではバドミントンをしました。こうして見ると、私たちはフィリピンに行って、色々な環境の子どもたちに会っています。活動外のフリーの時間でも、物売りをする子ども、物乞いをする子ども、昔の私のようにモールで親に玩具を買ってもらっている子どもを見てきました。2週間の滞在でこんなに会えるなんて思いもしませんでした。活動エリアは広くはないけれど、子どもを含め、ひとつの市にそれぞれの異なった環境で生きてきた人と出会えたことは、希望となります。私にとってそうです。

このワークキャンプで学んだことは、活動内だけではありません。全体的に観光や自由時間も多かったため、そこで得たことも沢山ありました。ひとつ挙げるならば、水を大切に使うことで

す。フィリピンに行く前から実行していましたが、行った後更に徹底するようになりました。トイレの水の量の少なさ、ホームステイでのシャワー、ミネラルウォーターの販売数の多さから、学び考えさせられたのです。フィリピン人は不必要な水の放流は避けています。他には全体を通してですが、やはり、日本 - 日本人とフィリピン - フィリピン人です。時には、二カ国間の歴史や諸問題を見直し、私は日本人として考えなければいけないと思いました。けれど、また時には、自分は何であるかということは抜きにして、お互いに認め合えるものを素直に喜び、楽しみ、発展して行くことも大切だということも実感しました。建設活動と諸活動、フリーの時間の中でこのバランスをコントロールするのは難しかったです。

しかし、そう意識していた分、フィリピンをととても身近に捉えることができるようになりました。このように、充実した素晴らしいワークキャンプの成功につながったのも、宗教部、Habitat for Humanity Japan ,Philippines の皆さん、現地のスタッフ、アイキャンのスタッフ、村の市民、ホテルの従業員、関わった人々、応援してくれた家族、そして、チームメンバーのおかげです。ありがとう！

この2004年チームメンバーでワークキャンプができて良かったです。

私は、このメンバーの一員であることに誇りを持っています。

## 比律賓滞在記

フランス文学科1年 河井 翔一朗

あの日あの時、僕は戸塚キャンパスにある宗教部の扉を叩いた。宗教部の建物の在る一帯は、他とは違うどこか独特な雰囲気、違和感が漂っていた。僕の妹が戸塚キャンパスの礼拝堂を見て「火葬場みたい」と言い放ったのを思い出し、ほくそ笑みながら、重く冷たく感じられる宗教部の扉を押し開けた。これからフィリピンで経験する『至極の体験』。そのすべての始まりがこの扉から始まっていったんだなあ。と、凄く懐かしく、今となっては遠い昔の事の様に思い出される。

この頃の僕は、テレビや新聞などのメディアが伝えてくれる、世界のあらゆる地域で起こる様々な問題の持つインパクトに対して、たいしたリアクションもせずに対岸の火をただ眺めているだけのような、平和ボケと呼ばれた時代にぬくぬく育った温度の低い人間の一人だった。

しかし、フィリピン出発前の事前研修を重ね、様々な「志」や「考え」、「気持ち」を持ったワークキャンプメンバー達と共に過ごし、思ったことや感じたことなどを共有していくうちに、自分の中に世界が抱える問題に対して、原因を探るような探究心や、実際に自分の目で見てみたい、肌で触れてみたいという好奇心が芽生えてくるのを感じた。

事前研修を通し、僕がフィリピンという国に対して持った漠然としたイメージは「貧しい」というものだった。住む家もなく、一日の生活費をゴミ拾いでまかなっている人たちがいる。この

ことは日本で何不自由のない暮らしをしている自分にとってあまりに衝撃的だったからだ。

しかし、僕が抱いた「貧しい」という先入観は到着して程なく考え改めさせられることとなった。フィリピンの中心都市には背の高いオフィスビルが立ち並び、日本にはないようなアメリカ式の巨大ショッピングモールが多数存在し、ファストフード店やコンビニエンスストアの明かりが煌々と夜の闇を照らす。一見、「貧しさ」のかけらも無いような光景に見える。けれど、その明かりから目をそらし、一本裏手の路地に足を踏み入ると、そこには街灯も無く真っ暗で臭いもきついフィリピンの『裏』が広がっていた。リヤカーを押してごみを拾い集めている人たちも見ることができた。

フィリピンの道路脇にあるたくさんの広告看板は、そんなフィリピンの本質を反映しているように思える。表向きは鮮やかなイラストで飾られ華やかな様相だけれど、華やかな看板の裏側にはまったく手が行き届いてなくて、サビだらけの鉄筋が無様に露出した「お粗末」な作りであった。フィリピンという国も表向きだけ見れば確かに近代的で華やかだけれど、裏を覗けばお粗末な現状。フィリピンでは「貧困」と「裕福」との距離が非常に近い。ひとつの景色の中にそのふたつが混在している。

信号待ちをする車の列を縫うように、はだしでボロボロの衣服を着た子供が物を売って歩いている。フィリピン国内でさえこれほどの貧富の格差があって日本では想像すらできない光景に、僕が日本から持ってきた価値観は崩壊した。けれど、フィリピンに居れば邪魔にしかない日本で養った価値観や先入観を、早い段階でうまく取り払うことが出来たのは、これから経験する様々な出会いや出来事を考慮すると結果として良かったんじゃないかと、今となっては振り返ることができる。日本でだって、宗教、政治、マスコミ、医学、牛肉、鳥肉など、それまで信頼を置いてこれたものを最近「まずは疑って」生活している。当たり前のように信じてきた価値観は崩れかけてしまったけれど、それに代わる新しい価値観を見つけてゆくには良い機会なのかもしれない。そんなことを思いつつ、フィリピンにいる間はフラットな心の状態を維持していこうと心がけた。眼で見ようとするとなかなか物の本質は捉えにくい。心で視る。こんな技術もまた必要だと感じた。

僕がこのワークキャンプでもっとも印象に残り、強烈なショックを受け、一番多くの問題を提起していると感じたものは、パヤタスというスラム街のはずれにそびえ立つ通称 スモーキーマウンテン と呼ばれるゴミの山である。高さ約60m程もあり、人間の見ることのできる視界の域を遥かに越え地平の彼方までゴミが続いているような錯覚をうけた。分別されずに次々と運ばれてくるゴミは、強い日差しにさらされ、化学変化を起こし自然発火して絶えず煙を上げていることが スモーキー の名前の由来らしい。そんなこの世の物とは思えない目の前に広がる異様な光景、惨劇に、自分を含めチーム一同言葉を失い、時が止まったように呆然と眺めているだけしか出来なかった。自分が立っている足元のゴミの中には、フィリピンに来てから僕らが捨てたゴミも含まれていたかもしれない。そんな罪悪感にも似た思いに苛まれながらも、目に映るものすべてを心に焼き付けようと必死だった。

そんな中、違った意味で何よりもショックだったのは、鼻が曲がりむせ返るような強烈な悪臭を放つゴミの上で戯れている沢山の子供達がいたことである。ごみに埋もれながら子供が楽しそうに遊ぶ光景というのは、我が目を疑う事態であり、また、パヤタスのような劣悪極まりない環境下に身を置く子供たちが、こんなに素敵な笑顔を作り出せることが出来るのか。と驚かされた。

ただ、ここに住む人達のことを可哀想と思うのはいかにも日本人的な価値観で見た物の見方だ  
と思う。ゴミに埋もれて遊ぶ子供たちを見て憐れんでいるばかりでは先に進むことは出来ない。  
この子達の将来、この村の未来、この国の行く末。あの場に立ってただけで色々なことが頭を  
駆け巡った。ゴミ山やパヤタスに住む子供達から発せられたメッセージを受け止め自分なりに解  
釈して、自分なりのリアクションをとろう。それが僕達のような力なき日本人にも出来る「知っ  
てしまった者」としてのしかるべき態度だと思う。

日本人から見れば、パヤタスに住む人はおろかフィリピンの人々ですら恵まれていないし、貧  
しく映るかもしれない。しかし、フィリピンの人々、パヤタスの人々には日本人には無い、生き  
ることに対しての「強さ」を持ちフィリピンで輝いていた太陽のように輝く笑顔を作り出す豊か  
な心を持っている。どちらも、日本人はとうの昔に忘れてしまったし、日本にいたら決して育ま  
れることの無い大切な「心」。その大切な「心」にフィリピンで出会うことが出来た。

日本は豊かな国。確かに経済的には世界を見回しても有数のお金持ちの国かもしれない。でも、  
フィリピンに行ったことで自分の日本に対するイメージは「豊か」ではなくて「贅沢」なだけな  
んだ。と思うようになった。

経済的豊かさ、豊かな暮らし、豊かな社会。でも、必ずしも豊かさが、それを取り巻く人々の  
心を豊かにしたり笑顔にするかと聞かれると一概にそうとは言えないと思う。むしろまったく逆  
で、人々が生まれながらにして持つ豊かな心、笑顔を作り出す心が、彼らの住む地域、国を豊か  
なものへと変えていく力を持っているのではないだろうか。

ごみ山の問題は、僕にとってフィリピンで最大の衝撃であり、胸が痛くなった事実。  
しかし、ゴミの埋め立てというのは日本でも日常的に行われている。ただ、フィリピンと違うの  
は、日本の場合捨てられたゴミを土の中や海の中に隠して捨ててしまうということ。だから、僕  
たちは自分が捨てたゴミの末路を見届けることが出来ない。

日本にある巨大な広告看板の裏側だって、フィリピンと同様サビ付いた鉄筋が複雑に組まれて  
いるだけには違いないのだろうけど、決定的な違いは、お粗末な部分を覆い隠し決して目に映ら  
ないようにしていることだ。強がり。日本はもっと僕達に「弱み」を見せてくれてもいいと思う。  
一歩踏み外せば日本にだってフィリピンと同じゴミ山が出来てもおかしくない条件が揃ってい  
るのだから。フィリピンのゴミ山にはビニール袋やペットボトル、カンやビン、さらにはコンピ  
ューターの部品など様々な物が無造作に捨ててあった。

フィリピンから帰ってきてからというもの、僕は、スモーキーマウンテンの事を教訓とし、ゴ  
ミの分別にかなりの情熱を注いでいる。燃やせないゴミとして捨ててしまえば埋められて終わる  
ものが、分別して、リサイクルに回すことで新しい商品になり、再び僕らの前に現れる旅の行程  
と、それに関わった人達の手間や想いを想像してみて「世の中は色んなところで繋がっているん  
だなあ」と、しみじみ思ったりしている。

蛇口をひねれば出る水も、元をたどれば雨である。

その行程を想像して水を飲むだけで、ちょっとおいしい水になる。

当たり前のように僕らを取り巻いているものが、どこから来てどこへ行くのか。その一面をフィ  
リピンのゴミ山で見ることが出来たかなと思った。フィリピンのゴミ山ははるか海の向こう側の  
悲劇として捉えるのではなく、凄く身近な悲劇として考えなければいけない。

また、僕は事前研修でフィリピンの憲法についてプレゼンをした。フィリピンの憲法の第一条

は何について書かれているか。日本は言わずと知れた事、『天皇』に関してである。

フィリピンの憲法には第一条に『国土』について記載されていた。

その国の国民すべてが遵守する憲法第一条には、制定された当時、人々が最も尊重すべきものについて書かれるのは、日本を見ても明らかであるし必然なことと思う。

スペインの占領、日本の占領、アメリカの占領。フィリピンは占領の歴史の上を歩いてきた。そんなフィリピンの先人達が、ようやく手に入れた文字通りフィリピン人の土地を、今のフィリピンの人達は軽率に扱っているのではないか。

緑豊かな谷にゴミを積み上げることばかり、建築廃材を河にそのまま投げ捨てる行為ばかり。先人達が大切にしてきた、土地を想う心を踏みにじり、自分達の土地を自らの手で汚していく。彼らに教育が足りないのか、意識が足りないのか。僕のような日本人なんかとやかく言う立場ではないけれど、そんな自虐的な行為に早く気が付いてほしい。良心に耳を傾け先人達の気持ちに思いを馳せてほしいと思った。

僕らはパヤタスというスラム街にハピタットのテーマでもある、「劣悪な居住環境に住む人々の人権問題」を考えるために訪れたのだが、パヤタスに住む人々の居住環境を劣悪なものとし、人権を脅かしているのは他にもない、ゴミ山というその土地の環境問題だった。つまり、ここでいう人権問題と環境問題というふたつの大きな問題は密接に関連しているわけだ。同様に、世界が抱えている問題のほとんどは、どこかで必ず繋がっていて、その繋がりの糸はわずかながらも僕達ひとりひとり、すべての人の心にも繋がっている。

繋がっているとイメージする大切さ。例えば、石油を巡る利権から起きる戦争も、自分達の日常も、すべてが連鎖しているとイメージしてみる。だったら、まず、小さなことから始めて、やがてそれが大きな問題も変えてしまうかもしれない。変えられるかもしれないんじゃないか。そんな気持ちになることが出来る。

話す言葉や、肌の色、信じている神(もの)は異なるけれど、それ以前に、同じ「人間」として考えなければならぬことが世界には沢山ある。ボランティアとか、具体的なモーションを起こすことばかりが課題に上げられがちだけれど、日常の生活の中で世界が抱えている問題のほんのちょっとでも心のどこかに置いておき、常に関心を持ち意識していくことの方が遥かに世界が必要としていることだと思う。

考えることから始める。こいつを実践していこう。

フィリピンへ自分は何をする為に行ったのか、そんなことはフィリピンに着いて2,3日も経たずに頭から消えてしまった。けれど、フィリピンから帰って来た時、バックがはち切れんばかりのお土産や、胸いっぱい思い出の他に、簡単には片付けられそうに無い山ほどの課題を持って帰って来た。その課題のひとつひとつから発信されるメッセージを受け止め、課題と課題同士の繋がりを発見していく過程の中で、様々な世界の実情を見ることが出来るし、新たな自分の発見を感じることもある。

実りある充実した時を過ごせたと思うし人生において大きな収穫のひとつとなった。

世界が抱えている問題に対し、興味を持つことから始める。興味を持つということは、その問題に対し考え始めているということだから。考えることの大切さに気付かされた。

更なる収穫は、このワークキャンプに参加しなければ出会うことになかったであろう多くの人達に出会うことが出来たことである。ホームステイをした家の両親は、僕を息子だと言ってくれ

た。いつでも帰って来いと。僕は自分の「帰る場所」が増えたことが嬉しくてしょうがない。日本にいと、食事しながらでもテレビを見ながらでも、無意識のうちに難くこなしてしまう「会話」という行為ひとつでも、フィリピンでは言葉が異なる分、自分の気持ちをいかに相手に伝えようか、なかば必死になっていた。それでも、誠意を込めて心から言葉を掛ければ、自分でも不思議なくらい伝わることもある。相手に気持ちが通じたときの達成感は味わったことのない新鮮さに溢れていたし、言葉だけが気持ちを伝える唯一の手段ではないことも実感できた。

フィリピンでの経験、現地の人々との出会い、そしてかけがえのない仲間達の存在がこれからの自分の人生をより充実した刺激的なものにしてくれる事を祈り、期待している。

ワークキャンプがきっかけになり、誠実に、切実に物事を考えることのできる人間になればいいなと思う。また同時に、「誠実に、切実に考える心」が世界の全ての人の心に芽生えることが出来れば、世界が抱える数々の問題の全てが、解決される日を見るのも決して不可能なことではないはず。そんな心が、人々の心に、水溜りに落とした小石の波紋のように緩やかに連鎖していった欲しいなと思う。 おわり。

## 私にできることは

### 国際学科2年 青井 茉莉子

私たちは、フィリピンはマニラ市の隣の、マンダリヨン市にあるマカチュリンという村へ、現地の家の無い家族をターゲットにボランティアで家を作り、それをその家族へ提供するNGOハビタット・フォー・ヒューマニティーの協力の元、五日間の間民家を建てるワークをしてきました。家を建てる、といいますがと大工のような土木作業をすることに聞こえるかもしれないのですが、実際何をしたらいいかと、本当に土木作業で、現地の大工さんのお仕事、流れ作業、ものを運ぶ力仕事、ペンキ塗り、塀の骨組み作りですとか、どちらかと言うと助手のような形の誰にでも出来るものに力を貸すお手伝いをしてきました。

マカチュリン村の人たちは、私たちが初めて彼らの村を訪れた時、車から降りた私たちひとりひとりに国の花の首飾りをかけてくれ、笑顔で迎え入れてくれました。こんなことは全く想像していなかったし、むしろ、この大勢の私たち日本人の若者がフィリピン人の目にどう映るの不安な気持ちがありましたが、国の花と共に受け入れて下さったことがとても嬉しく、またその花がすごく良い香りだったのがこの国に来て一番最初に感動したことでした。それから、その小さな村に足を踏み入れた時、家々から外へ出て私たちに笑顔で眉毛を上げる挨拶をしてくれました。目が合った人誰もがそうしてくれたのがすごく印象的でした。フィリピンの人たち流の、挨拶の仕方があるようで、人と目があったりすると何も言わなくても眉を上げて笑います。これが、人と人とを友達に繋げる挨拶だと感じ、すごく好きになりました。

着いてすぐに村の教会がある集会所で会が開かれ、若者の中での代表的存在の女の子に、とて

も楽しい雰囲気の中紹介されて、最後は大音量で音楽をかけてダンスを踊り始めるまでしました。この雰囲気は何だ、何かとのギャップが凄い・・・とこの時から感じました。何よりも、人と心から笑顔で交流するというのがこの日から始まったのでした。よく、外国に行くとその国で自分が元気にやっつけられるか不安に思ったり、言葉が分からぬせいで知らず知らずストレスを感じていたりする場合がありますが、フィリピンの場合、多少自分の英語が通じるということもあるのかもしれませんが、着いた時からもう出会った人は家族同様なので、全くそういうことを感じずに過ごしていました。むしろ次から次へと人とのコミュニケーションを楽しんでいました。

作業の合間や、終わったあとは村の物凄い数の、小さい子や、学校から帰ってきた子どもたちと円を作ってダンスの遊びをしたり追いかけてっこをしたり歌ったりして遊んだりしました。村の子たちは皆元気で、明るく、純粹で、人に対して気を使えるような、親の愛情をたっぷり受けて育っている子ばかりでした。

この人たちの明るさと人懐こさと純粹さは一体何処から来ているのだろうか・・・と聞いていましたが、一週間の終わりの日曜日に、近くの教会へ皆と行った時にその答えの半分くらいが分かったような気がしました。大多数の人がキリスト教を信仰しているこの国では一つの教会に溢れんばかりの沢山の人が礼拝にやって来ます。そこには、皆と一緒に神様の前にひざまずいてお祈りをする人たちの姿がありました。私たちも混ざって一緒になって礼拝に参加していましたが、タガログ語で喋る司祭や司会の言葉など何を言っているか分からなくても気にならず、その清いひとつになっている雰囲気と、人々の真剣な目、跪いて祈ること、知らない隣の人と手を繋いで祈ること、周り中の人々に『Bless you, Bless you』とちゃんと目を見て他人を祈ることに、心を打たれて礼拝中にポロポロ涙を流してしまいました。思い出だけでも、あの気持ちがいつでも甦って来ます。この礼拝があって、人々の信仰心があるからこそこの人々はこんなにもどんな人のことも考えられるし、疑わず愛することが出来るのだろうかと思いました。

私たちは、マニラ首都圏のケソン市の郊外にあるごみ処分場となっているパヤタスにも訪れました。この地域は、元はきれいな谷だったそうなのですが、何年にも渡ってマニラ首都圏のごみが捨てられてきたため高さ60m、広さ数ヘクタールから十数ヘクタールもの、巨大なゴミの山になっていました。目の前に広がるその広大なゴミ山は、谷を越えてそのまた向こう側にも奥行きが見えない程の規模の山となって立ちはだかっていました。そしてそこには、これらのゴミを拾って生計を立てている人々が暮らしていました。人々はその谷がある山と山をロープで繋ぎ、あちらの山からこちらの方へ移る、というような非常にリスクの高いことをしていました。しばらくこの景色を眺めていて、この世に存在するものの中で絶望の風景を見せられている、そんな心境になり一気に目の前に現実を持ってこられ、ガン、と頭を打たれた気がして途方にくれました。しかし、実際に小さな子どもたちが無邪気に遊びながらゴミを拾っていたり、現地のNGO・“I can”というパヤタスにある「アジア日本相互交流センター」の事務所にいた職業訓練を受けている活気のあるパヤタスのお母さんたちの、互いに助け合い、生きること一生懸命な人々の姿を見て、ここは絶望の地ではない、むしろ、希望を生み出す神様に見守られた場所なのかもしれない、と思いました。その事務所でパヤタスの子ども達がダンスをして私たちに披露してくれました。この国に来て何回感じたかわかりませんが、皆体が柔らかくて踊りがとっても上手です。私たちからも『幸せなら手をたたこう』の歌を英語で歌ってみたら、むこうからはタガログ語でその歌を返してくれました。ちょっとの時間交流しただけで子どもたちは私たちに親し



みを持ってくれ、帰りのバスまで見送りに来てくれました。また必ずこの地に来て、自分も何か役に立てることがしたい、と心に密かに思いました。貧困に苦しむ状況が事実上存在しても、それに立ち向かう人々の姿がとても魅力的に見えたのです。先に述べたパヤタスにあるNGO“ I c a n ”に、そこで働いている日本人の女性、伊藤ようこさんという方がいらっしゃいました。ようこさんのお話を伺うと、私たちと同じくらいの年代の時に初めてフィリピンに訪ねられ、この、『貧しくても幸せ！！』という国が好きになったそうです。そして、自分も何かの役に立てたら、と思い立ち現在はフィリピン大学に在籍され、このパヤタスへ通っているということでした。彼女から出てくる言葉と、話している時の表情は本当に生き生きとして輝いていました。人のために、自分から行動を起こして自分に出来ることを精一杯やるというのは、こんなにも人を輝かせるものなのか、と感じました。

フィリピンの地へ降り立ち、実際に自分の目で様々なものを見、自分なりに肌で感じ取って来たものがありました。これまででこんなにも人と人との繋がり大切さについて考えたことはありませんでした。

もうひとつ、実感したことがありました。

出発する前に、研修で『世界がもし、100人の村だったら』の文章を皆で読み合わせたことがありました。その中で私が一番気に入っていた箇所と、もうひとつの箇所が自然と自分が経験し、感じてきたことに寄り添ったので、ここにそれを残しておきます。

“ もしあなたがしつこく苦しめられることや逮捕拷問  
または死の恐怖を感じることもなしに教会のミサに行くことが出来るなら・・・  
あなたは世界の30億人の人たちより恵まれています ”

“ お金に執着することなく喜んで働きましょう  
かつて一度も傷ついたことがないかのごとく 人を愛しましょう  
誰も見ていないかのごとく 自由に踊りましょう  
誰も聞いていないかのごとく のびやかに歌いましょう  
あたかもここが地上の天国であるかのように 生きていきましょう ”

これを忘れないこと、実行することを理想のうちに終わらせず、目標に掲げることが今後の私の人生の課題と言えるかもしれません。

最後に、このプログラムに携わってくださった全ての方に感謝いたします。かけがえのない経験をし、自ら考え、このことに気がつけたのも、力を貸してくださった皆様のお陰です。本当にありがとうございました。

# 家を作ること

社会福祉学科3年 房 幸代

劣悪な住環境の下で生活している人々のために、「家」を作りにいく。これが、私たちが今回行ったワーク活動である。海外ボランティアには入学する前から興味があったし、社会福祉学科に進もうと決めたのも、第三世界の貧困問題に興味を持ったからである。しかし、「家を作りにいく」というワーク活動に関しては大して興味を持てなかった。「家」を作りにいくことに一体どのような意味があるのだろうか。これが、私のワークキャンプのテーマである。

日本を発つ日まで、何度も研修会を重ねた中で、貧困とは何なのか、家とは何なのか、考える機会があった。研修会のなかでみたビデオの中で私が一番「家」について考えさせられたものを紹介したいと思う。

ある少年が、理由があって両親と一緒に生活することができなくなり、マンホールで生活しているという内容のビデオである。この少年はマンホールの中で何人かの少年たちと一緒に生活をし、ゴミの中から再利用できる資源を探し、それを売って生活をしていた。彼らは自分たちの生活を嫌い、早く普通の生活がしたいと望んでいた。しかし、そういつている彼らは、毎日楽しく笑いながら生きていた。何年かして、少年は仕事を見つけ自分で家を建てた。家の周りには何もなく広い野原に彼の家が一軒あるだけであった。少年は今の生活に満足だと言っていた。

以上のような内容のビデオであったと思う。ビデオを見終わった後、この少年は家があることで本当に幸せなのであろうか、と感じた。確かにマンホールの中は、人間が生活をする環境ではないし、健康的にも悪い、また社会的観点からも良いものではない。しかし、毎日を仲間と共に笑いながら充実していた生活をしていたのではないだろうか。住居の質は悪いが、生活の質は必ずしも悪いとは言えないと思う。大人になり、立派な家を建てた彼の周りには一緒に笑える仲間がいなくなった。安心して眠れる家を手に入れた代わりに、仲間を失ったのだ。メンバーの一人が、この少年がマンホールの生活から抜け出して家で生活ができるようになってよかった、と言った。しかし私は、どうしても住む家があるから良いとは思えなかった。確かに、あのままマンホールの中で生活していくことは良いとは思えないし、家があることが幸せなのは、間違いのない。でも「家」はただ住むためだけに必要なものなのであろうか。「家」とは一体何なのか。

このような気持ちを抱いたまま日本を発ったある日、スラムに行く機会があった。都市から運ばれてくるゴミを何年も積み重ねてできたゴミ山の隣りに住居を建て、生活をしているのである。そしてその住居は、ブロックをただ積み重ねただけの本当に簡素な住居であった。フィリピンの高湿多湿で雨季がある環境状況から考えると、この住居のままで暮らしていけるのか疑問がある家が多かった。水と電気が通っていない家もあるらしい。まして、隣にはゴミ山がある。日本の自分の生活と比べると、想像を絶するところに住んでいる人々がここにはいた。

ゴミ山の近くは健康的に悪く、人間が住む環境ではない。いくら周りに一緒に笑える仲間がいたとしてもこの場所には住みたくないと感じた。なぜなら、このような環境の下で生活をしてい

くことに満足なんてできるはずがないと思ったからだ。住居の質が悪だけでなく、周りの環境が悪いなかで生活していくことの過酷さに、人間が生活を送る場所ではないことを肌で感じてしまった。そして、人間が生活を送ることができる最低限の環境を保障する必要性があると思った。生活の質があるとかないとかという問題の前に、人間として最低限保障され環境の下での生活がなければ、人権の問題やその人の健康問題、ひいては社会問題まで生じてきてしまうと思う。だから、人間が暮らすことのできる住環境を整え、最低限の生活空間を保障された「家」が必要なのである。そう思ったとき、あのマンホールで生活していた少年は、人間が生活をする環境でないところから抜け出し、自分の家を手に入れたことで、幸せになったと言えたのだろうと考えた。

1週間のワーク活動を通して、私たちはある家の2階部分を完成させることができた。しかしこの家は私たちの力だけで出来上がったものではない。この家が出来るまでには、様々な人の力があつた。まずその家の家族、日本からきた私たち、建築の技術を持ったボランティアの人々、そして、私たちのために昼食やおやつを作ってくれた人々、一緒にワークを手伝ってくれた村の青年たち、何人もの人の思いがこの家を作り上げたのだ。

そうやって作り上げた家に住んでいるこの家族には、部屋数が増えたことで以前より住環境が良くなり、快適な暮らしができるようになったのだと思う。マンホールの少年が自分に家を建てたのと同じように、生活するのに必要な空間を手に入れたのだ。しかし、マンホールの少年とは違うところがある。それは、家があるだけでなく、家作りに加わったすべての人の思いと仲間がいるということだ。私たちと共に家を作った思い出や、その家を作る私たちを支えてくれた村の人々の思いが彼らに目には見えない何かを与え、それを受け取ってくれたのだと思う。そして、この「家」を作るというワーク活動には、ただ作るということだけでなく、その地域全体をひとつ家族のような雰囲気を作り出すのである。きつこの地域の人々の気持ちをも豊かにしたのではないかと思う。そうすることで、「家」が完成して住環境が整えられ、また今後生活し続けていくうえで欠かせない地域の人々との関係性も良くし、一緒に生きていく仲間を手に入れることができるのである。

ワークキャンプに参加して、日本での研修会やフィリピン滞在を通して、帰国した現在思うことは、「家」は周辺環境を整え、人間として保障された住居が必要であると共に、精神的にも豊かになるような状況のもとで生活することが重要であるということだ。「家」には必ず、そこで生活をする人の「生活状況」を含むものでなければならない。「家」は物理的なものなので、立派な家があれば人はそれで幸せになれると感じてしまいがちになる。これを間違っているとは思わない。「家」が立派であること・住むための環境が良いことは幸せだと思う。しかし、それだけではない。私たちは多くの人々と関わりを持ちながら生活を送っているのである。その中で精神的にも豊かさを感じなければ、その生活が楽しいとは思えないのではないかと思う。

スラムに行ったこととワーク活動を通して、「家」の意味を知ったときに、なぜ「家」を作りにはいかなければならないのか、私が出した答えは次の通りである。世界にはまだまだ住む場所を保障されていない人が存在していることを知り、そして彼らは決してかわいそうな人ではなく私たちと同じ地球人であることを認識し、彼らと共に生きていくために、私たちは劣悪な住環境の下で生活している人々に「家」を作りに行く必要があるのだと思う。

## 出会い ～フィリピンワークキャンプを通して～

国際学科2年 柏樹 奈津子

私がこのフィリピンワークキャンプに参加した理由はいくつかあるが、HABITAT という NGO の活動に参加して何かを成し遂げたいということもあったし、発展途上国の実情をこの目で確かめたい、ストリートチルドレンについても調べたいなどがあげられた。私はボランティア活動などあまり日常生活の中でしたことがなく自分に成し遂げられるか不安だったが、とりあえず参加することにした。結果的に行って本当に良かったと感じる。様々なことを考え、たくさんの人に出会いまさに一期一会を実感することが出来た。

「フィリピン」と聞いて、一般的にみんなは何を思い浮かべるでしょうか？私は真っ先に思いついたのがバナナやマンゴーなどの果物や貧しそうなる発展途上国というイメージがありました。フィリピンに行く前から私はストリートチルドレンに興味を抱いていました。文献などでフィリピンやストリートチルドレンなどについて調べると、フィリピンという国がすごく暗そうな感じがして、私たちがそこに行ってワークをしに行ったら平気なのかと少し不安に思いました。

2004年9月8日に私たちはフィリピンに向けて出発しました。4時間半ほどでマニラ国際空港に到着し、思ったよりも都会的なところで驚きました。空港の外に出ると、タクシーやバス、ジブニーに乗らないかと呼び込む人が結構多くいて、私はどうしていいものなのかと対応に困りました。なんせ本当に多くの人々にこっちに乗れ、乗れと言われましたから、本当に断るのが大変でした。

空港からバスに乗り市内のほうへ行くと想像とかなり違って、街には近代的なビルが立ち並び、大きな看板がいたるところにあり、そこではフィリピンが貧しい国だということは全く感じることができませんでした。しかし近代的なビルの傍らで、川沿いに建てられていた家などを見て衝撃を受けました。ゴミが川に流れ、見るからに環境の悪いところにトタンなどでできた家が建ちなんているのを見て、貧富の差が激しいのを目の当たりにしました。どう見ても人が住めるような場所に思えなくて、初日から衝撃的なところを見てしまい、考えさせられました。2日目からはこのワークキャンプの最大の目的である、家作りを体験しましたが、家を作ることは私にとって初めての経験でした。私たちはマカチュリンというサイトを訪れ、そこでワークをしました。初めて行ったときはサイトの方々がものすごく暖かく迎えてくれて、それまで考えていたフィリピンの人々と仲良くできるかどうかという不安は一気にかき消され、緊張感が少しほぐれました。ワークは思ったよりも楽なものでした。日本の工事現場を想像していたのですが、そんなハードなものではなかったと思います。ブロックを積み上げたり、セメントを作ったりなどを主にしました。メンバーだけでなく現地の職人の方々、コミュニティーの方々と一緒に家作りにはげむことが出来たと思います。ワークの間に何回か休憩を取らせていただき、そのときにコミュニティーの子供達ともものすごく仲良く遊んだりしました。彼らはものすごく親しみやすく愛嬌があり、どの子をとっても、みんな本当に可愛くて素直な子ばかりでした。外で遊ぶこと、子供たちと遊ぶことがすごく新鮮に感じました。女の子たちからは色々なダンスを教えてもらい

ました。フィリピンの子供たちはダンス好きな子が多く、その体の柔らかさにも驚きました。フィリピン人はダンスが上手でそして彼らの笑顔にも驚きました。みんな笑顔が素敵で、目が合えば自然と微笑んでくれるし、私たち自身の事に関心を示してくれて、私は彼らが本当に心から私たちを受け入れてくれていると感じました。その後ワークをするたびにマカチュリンを訪れ、さらにみんなと交流を深めることが出来ました。それまでまだ私たちを受け入れてくれてなかった人々も一緒に家作りを通して交流することが出来たと思います。みんなで長い列を作ってブロックを運んだときもコミュニティーの人々、小さい子供までもが手伝ってくれたことに感動しました。

今回のワークキャンプで私が結構楽しみにしていた1つのゴミ山に見学しに行きました。大学の授業でスモークマウンテンについて学んだ時は、どういものなのか、よくわからず何も感じる事があまり出来ませんでした。実際にパヤタスのゴミ山を見に行くと、ゴミ山を目の当たりにしたときは絶句でした。ゴミ山は思っていた以上にはるかに大きく、そこでゴミ拾いをしている人々の多さにも驚きました。不衛生だし、道理に反していると思った反面、不思議と彼らはリサイクルにも貢献しているというプラスのイメージも持つことが出来ました。ゴミに対する考え方を日本人は変えたほうがいいと思いました。ゴミをなるべく出さないように、資源を大切にしなければ今後地球の未来はないと感じました。そこでゴミを拾っていた小さな子供たちはマカチュリンの子供たちとは何か違っていたように思えました。

そのパヤタスのサイト先でも子供たちがダンスを披露してくれました。本当にダンスが上手で、またダンスがこんなにも人を楽しませてくれる、愉快地にさせてくれるのだと感じることができました。ゴミ山を見学しに行ったこの日は私にとって、今までにない衝撃的で心に残る一日となりました。

フィリピンに来て本当に多くの人に巡り合いました。どの人も私たちを暖かく迎えてくれました。日曜日の朝に教会を訪れました。すごく大きな教会で人の多さにも驚きました。私は3年ほど前まで教会に通っていましたが、忙しいという理由などから最近は全く行っていませんでした。久しぶりに教会に行き、改めて教会に行く意義と教会の素晴らしさを確認することが出来ました。隣の人と手を握り合いキリスト様にお祈りをしたときは、人種や国籍を超えてすべての人と一体化したような気がしました。神父が話していた内容は全く理解できませんでしたが、また来たいなと思いました。

次にマカチュリンでのホームステイについて話したいと思います。ホームステイは各家庭に2名ずつ派遣されました。私のホストファミリーはいまひとつ構成がわからなかったのですが、とにかく大きなファミリーでした。夕食を共にしたときは美味しい料理を食べながら、会話が弾みホストファミリーのお祖母さんには日本について色々聞かれました。日本はリッチでここフィリピンは貧しいのよって言った言葉がなんだか私たちの間に境界線を引かれたかのように少し悲しくなりました。その後もずっとそのことについて考えていました。アルバイトでいくらくらいお金を稼いでいるかなど聞かれたときは、すごくためらって本当のことは言えませんでした。お風呂場はトイレと一緒にあって、シャワーがなく行水を行いました。行水は初めての経験にもかかわらずそんなに苦痛になることはありませんでしたが、水が足りるかどうかわかり気にかけていました。日本にいたら家の蛇口をひねれば簡単に水は出るけど、フィリピンでは決まった時間しか出ないらしく水をもっとすごく大事に思いました。日本にいたらあまり感じることはない

ことだと思えます。私のホストファミリーはすごく親切でいい人でした。ベランダでギターを弾きながらみんなでビートルズを歌ったことは、今でもすごく心に残っています。歌ってやっぱり人を暖かくさせるし、歌うことで気持ちが通じ合うことはすごく素晴らしいことだって感じました。ホストファミリーのお母さんとその甥っ子の人にモールに連れて行ってもらいました。ジブニーに乗って行きましたが、途中で市場など見かけました。活気があふれていて、人も多く行きかかっていてすごく面白いところだと思いました。モールでは私たちはカラオケをしたのですがフィリピンでカラオケが出来るなんて思ってもみませんでした。フィリピンではカラオケのことビデオケというらしいのですが、結構街中でも見かけたので普通にあることが驚きでもありました。ゲームセンターでは公に人の前で歌う人の姿もあり、日本ではあまりない光景だったので面白く思いました。

カラオケに行ったその夜は、マカチュリンでフェアウェルパーティーが行われました。サイトの人はすごく念入りに計画を立てていたようで、私たちはパーティーを本当に心から楽しむことが出来ました。色んな人がダンスを披露してくれたり、見ていて本当に楽しませてくれて、サラマッポ(タガログ語でありがとうの意味)を何度言っても足りないほどだったと思います。私たちは、「座頭市」の踊りを披露したのですが、マカチュリンの人が興味深く見ていてくれて光栄に思いました。それから「幸せなら手をたたこう」をみんなで英語で歌いました。初めて会った人もたくさんいましたが、この歌で一気に距離が近づき一緒になって楽しむことが出来ました。その後は会場がダンスパーティー化していて、久しぶりに私は大はしゃぎをしました。ダンスや歌はいつでも私を幸せにしてくれるし、マカチュリンの子とは本当に仲良くなれたと感じています。でも同時にこの時がまさに一期一会なんだとも感じました。私はフィリピンに来て、すごく多くのことを考えさせられたし、自分を見つめなおすことが出来たと思います。それは時間に追われる毎日の日本では決して出来なかったことなのではないかと思います。この2週間は本当に私にとって濃い時間になったと感じています。それはもう2度と戻ってこないと思うし、今の年齢だから出来たこともたくさんあると思います。

それから私はその他に現地の小学校と孤児院を訪れました。小学生には日本語を教えたのですが、物覚えがよくてすぐに日本語を覚えようとする姿勢には立派さを感じました。小学生とは短い時間しか共に過ごすことは出来ませんでした。一方、孤児院で会った子供たちは英語をしゃべれない子もいたらしく、私自身も彼らとあまりコミュニケーションを取ることは出来ませんでした。しかし折り紙やバドミントンを通して、お互いに楽しいひと時を過ごすことができました。孤児院の子供たちは決して人懐っこい子達ではなかったように感じています。彼らが少しでも私たちと楽しく出来ていたのなら私はそれだけで、うれしく思います。

最後に私が一番知りたかったストリートチルドレンについて話したいと思います。実際に道路で花のアクセサリーや、おもちゃらしきものを売っている子供を何回か見受けました。交通の激しい道路でまだ3、4歳にも満たないような子までもが物を売っている姿を目と鼻の先で見ると本当に硬直してしまいました。5歳くらいの男の子がナショナルフラワーの飾りを私に向けてきました。どうすることも出来ずに私はジブニーの中で顔を隠すように彼らを見てしまいました。彼らに何も出来なかったこと、顔を背けてしまって、なんとも言えない気分を味わいました。ストリートチルドレンは思っていたほど見ることは出来ませんでした。深刻な問題なのではない

かと考えます。貧しくてもとても幸せそうな笑顔や姿を見て、幸せってどんなものだろうと考えました。私の周りには笑顔がたくさんあふれているのか、生きることを楽しんでいるのか、人の幸せと豊かさの本当の意味について、自分なりに考えることが出来たと思います。

このワークキャンプは今までに経験したことのないものばかりでした。私は「ワークキャンプに参加してよかった」と誰にでも自慢して言えそうな気がします。たくさんの素晴らしい人々に出会い、助けられ、色々なことを発見できたと思います。人との出会ってとても大切なものと初めて思いました。私は性格柄かもしれませんが、人と深く付き合うことが苦手で、それはこのワークキャンプだけで改善されたとは思えませんが、前よりも人との出会いを大切にするようになったと感じています。今までどれほどの出会いを棒に振ってきたのだろうかとも思います。フィリピンの人々、一緒に行ったメンバーとも知り合えたことは素晴らしいことだと思っています。この数ヶ月前まではお互いを全く知らなかったのに、今では仲のいい仲間になれたことが素晴らしいことだと思っています。フィリピンワークキャンプは確実に私を変えてくれた、旅だったと感じています。

## 2度目のフィリピンは...

経営学科4年 岸 英明

去年に引き続き今年もこのフィリピンワークキャンプに参加しました。でも今年は、去年と違ってぼくは Assistant Teacher (以下 AT) という立場で今回は参加させていただきました。これからは、ぼくが AT として参加して、見て、感じたことを書いていきます。従ってフィリピンのことにはあまり触れませんがあらかじめお願いします。まず AT とは何か? 字のごとく先生のお手伝いさんです。先生というのは Team Leader (以下 TL) です。正直なところ役割というものには漠然としていました。宗教部の須藤さんや TL の金井先生には、「TL と学生 Leader との間のパイプ役みたいなものだ」と言われました。あと「羽目を外して周りが見えなくなるとは困るから今年は控えめに!」そう言われていてもピンとこないのが現実でした。「僕は一体何をすればいいのか!?...」そうした中、研修会が始まりました。研修会は、全十数回行われました。各個人にも係りが決まり、プレゼンテーションを発表し...と仕事を沢山しているなか、ぼくのすることは特にありませんでした。「僕は一体何をすればいいのか!?...」という思いが余計に強くなる一方でした。まあ今になって思い返してみても研修会の段階ではあまり仕事はなかったのではないのでしょうか。強いて言うならば、最後の研修会で行ったプレゼンテーション(質問形式であるが)ではないのでしょうか。内容は、現地で個人がチームに合わない、あの人と合わない等の対人関係の質問が主でした。今年のチームはとにかく研修会の回を増すたびに仲よくなっていき誕生会をやるほどでした。(去年はこの段階であまり打ち解けていた思いではないです。)プレゼントもあげるほどでした。個人的には正直驚きました。知り合って間もないのにそこまでのもの

か？と葛藤していたのが事実です。そんな中、誰かが孤立するなんて事を考えてもなかったであろうから戸惑い、そして興味深く各々意見を交わしていました。こういったことを事前に行うことはとても大事なことであると思います。また最後の研修会で行うということが大きいのです。大体そのころまでには、チームの仲は一通り出来上がっているからです。そこでこういった質問を投げかけるのは身が引き締まると思うからです。僕自身が去年の研修会でそうであったからです。

では、いざ現地ではどうであったかというやはりトラブルは避けられませんでした。現地に着いてから4、5日してからのことでした。ちょっとした価値観の違いからチーム全体がギクシャクしてきたのです。その日の夜は、夜な夜な各自思っていることを口々にして止みませんでした。僕はそこでTLである金井先生に相談し話し合いました。今後どのようにこのチームのギクシャクを解消していくかを。すると金井先生はこう言いました。「今までのうちのチームというのは、良くも悪くも、個人がチームのために動いてきた。合宿では、お互いが良い関係を築くことにがんばってきた。フィリピンではチームの輪を乱さないようにと個々人が気を配ってきた。これ自体は決して悪いことではないけれども、フィリピンワークキャンプの目的は別に仲良しっこをするものでもなければチームを大事に守っていくものではない。個々人がこのワークキャンプを通して様々な経験をするものである。そのために多少のチームの輪を乱すのは致し方ないことではないか」と。つまり、今チームの輪を優先的に考えるあまりお互いがお互いを干渉しすぎているのではないかと、それに加えて今は研修会と違って26人という大人数で共同生活をしているわけで、今まで見られなかった一面を見るのは当たり前でそのギャップに戸惑いすら覚えるわけです。これにはとても納得しました。これらの話し合ったことを1日おいた翌々日の夜のミーティングでみんなに伝えました。それとそれ以後のミーティングでは「分かち合い」という形でお互いを感じたことを一方的に話してもらいそれについては一切の批判はなし。ただただ相手がどのように感じ、考えたかを共有するだけの形ですが、その時のチームにはこれがいい形をとれたと今でも思います。それは、この時は価値観の違いで揺れていて口を挟む傾向があったからです。これ以後チームのギクシャクは日に日に薄れていったと思います。過剰に他のメンバーの行動を気にすることも無くなっていったのではないのでしょうか。もちろん細かなことはありつつもさほどチーム全体にかかわる問題ではないものです。その時は、すぐに金井先生に話を持ち込みました。こうすることが一人で考えるよりもより迅速かつ良い解決手段であることを僕自身、身をもって感じました。それと同時にATの仕事に触れたのだと思いました。やはり先生の耳まで届かない問題というのもあったからです。今年のメンバーは例年になく人数が多いため大変な部分もありましたが、帰国前夜の食事のときにメンバーのみんなが口々に「来て良かった。」中には泣く泣く「ひでさんどうもありがとう！」と言ってくれるメンバーもいたと言うとてもうれしい思いもしました。この喜びは去年のぼくでは味わえない経験でした。そしてとにかくこの夜は涙を流すメンバーが多くてびっくりでした。そう、大変な分だけ感動も大きい訳です。みんなも同じ気持ちではなかったのではないのでしょうか。僕は、2度目のワークキャンプに参加して、一参加者として楽しませてもらった部分もありますが、去年と違った立場からメンバーを見ることでチームという輪のバランスの取ることの難しさ、ワークキャンプでのチームというモノの在り方、そこから見えてくる研修会の役割、引率者の大変さ等を考えさせられ、学びました。宗教部のみなさん、特に須藤さん、金井先生には僕のATとしての自覚の無さ故、大変迷惑をかけまし



た。トレーナーのみなさん、特に葦澤君には大変にATという仕事については一緒になって考えてもらいました。やはりワークキャンプは、どんな小さなことでも関わってくれるみんなで作るモノなのだと今更ながらにしみじみ感じました。ありがとうございました。

## 2004年フィリピン・ワークキャンプ

学院牧師 金井 創

9月8日～21日の二週間という期間で、今年も宗教部提供行事であるフィリピン・ワークキャンプが実施された。まず今年のワークキャンプについては例年と異なる点がいくつかあるのでまとめてみよう。

### 1．引率(チームリーダー)が牧師であったこと。

過去二回のワークキャンプにおいては大学宗教部長がチームリーダーとして参加者を引率したが、今年は私がその任にあたった。今まではチャプレンとして参加し、運営上の責任よりも個人への配慮、メンタルなケアなどを主たる勤めとしていたが、今年は事前研修から合宿、そしてキャンプ実施にあたっての責任者ということで、宗教部としても準備が大変ではなかったかと思う。従来は前宗教部長の鍛冶先生が強いリーダーシップを発揮して準備も進めたので、先生まかせの要素が少なからずあったようだが、私の場合は宗教部事務室のバックアップ体制なしには事が進まない。その点で事務室の方々がほぼすべての点について動き、助けてくれた。

### 2．ワークキャンプが一部単位化されたこと。

今年から「ワークキャンプA,B」として一年生を対象に選択履修科目となった。従って、今回のワークキャンプは履修者として参加した一年生7名と、宗教部行事に応募し選抜された全学年の18名が混在するチーム構成となったのである。しかし、事前に多少懸念された単位取得を目的として参加する者と、ボランティア目的で参加する者との意識のずれは、幸いなことに全くなかった。事前研修・合宿を通してのチーム作りは充分にその目的を達成し、非常に仲の良い、結束の固いチームが出来上がった。

ただ、キャンプが単位化されたことで参加希望者が例年以上に増え、実際に参加できたのは希望者の三分の一程度であった。来年からは順次、単位となる学年が広げられていくことを考えると、提供側としても学生の高まるニーズにどう対応していくかが今後の課題となろう。回数を増やす、一回の定員を増やすなど具体的に検討していく必要性を感じている。

### 3．学生がトレーナー、アシスタントとして活躍してくれたこと。

キャンプが単位化されたこともあって、事前の研修は綿密なプログラミングと体制を整えねばならなかった。そのために過去のワークキャンプ参加者の中から葦澤修一郎君と滝川 祐君がトレーナーとなって合宿を含む研修を導いてくれた。また、昨年度参加者の岸 英明君がアシスタント・ティーチャーとして現地においても私を補佐してくれることになった。チームリーダーが

いて、学生リーダーがいる。さらにその間にアシスタント・ティーチャーがおかれるという具合だから、その位置づけ、役割を定めるまでそれぞれが手探りを続けたのではないだろうか。しかし、岸君は立派にその役割を果たしてくれた。25名の学生と私の間を結ぶパイプ役として参加者に慕われながら、なおかつ学生リーダーがそのリーダーシップを発揮できるよう陰で支えてもくれた。このように、現地で参加者たちが十分に活動し充実した時を過ごすことができた背後に、実に多くの人たちの支えがあったことを忘れてはならない。

特筆すべきこれら諸点のほかにも、今年は学生リーダー選出が立候補によって決まったこと、そしてそれが一年生であったことが特長としてあげられるだろう。その山内彩恵子さんを支えるサブリーダーとして四年生の斉藤ちひろさんが名乗りをあげてくれたのも心強いことだった。事前研修で出来上がったかに見えたチームとしての和、しかしそれはフィリピンでのワークを体験していない段階での和であった。当然、現地に行けばそれは行き詰まりや、結束の乱れを経験することだろう。そして、案の定その危機は実際に訪れたが、その時彼女らリーダーたちと岸君というリーダー仲間がしっかりと意思統一し、より深い絆で結ばれることになるチームの作り直しのために心砕いてくれた。

今回おとずれた建設サイトはマニラ市に隣接するマンダルヨン市内、マカトゥリンというコミュニティだった。過去二回のキャンプは市街地から遠く離れた場所で、これからコミュニティを形成していく中での建設作業だったが、マカトゥリンは100メートル四方ほどの区画の中に250世帯、1000人以上がすでに暮らしを営んでいるコミュニティであった。多くの家は床面積30平方メートルほど、それが3階までであるという住宅密集地での作業は、路地がそのままセメントこねの作業場となり、鉄筋組みの現場ともなった。私たちが当初担当したのは、すでに一階に人が住んでいる家の二階建て増しと、二階建ての家を三階にするための屋根補強工事という二箇所だった。受け入れ母体であるハビタット・フォー・ヒュマニティが用意してくれたこれら二箇所の現場は、25名のやる気あふれる学生たちには物足りなく、すぐに人手も時間も余りがちになったため、現地スタッフと相談、ハビタットのプロジェクトではないが助けを必要としている三箇所を加え、合計五箇所に学生たちは散って作業することになった。家屋建設の基礎作りのための穴掘りが一箇所、セメントこねがもう一箇所、家の解体が一箇所というように、場所も離れ作業形態も異なる現場が一度に増えたため今度は学生たちの疲労が一気に深まってしまった。25名の参加者の男女内訳は女性15名、男性10名、それに岸君と私。作業によってはかなり体力を要するものもあり、やがて男手が足りなくなって女性も相当重労働に従事することになった。例年、作業数日目には腹痛、下痢、発熱を訴える学生が出始めるものだが、今年もその例にもれず体調を崩す学生が出てしまった。ただ入院にまでは至らなかったのが幸いであったが。

マカトゥリンは市街地にあるコミュニティで、出入りできるのはゲート一箇所だけ。門番小屋のようなところには常時、住民が当番で詰めているし、コミュニティ内でも日替わりで「ポリス」と記されたTシャツを着た住民が数人パトロールしている姿が見られた。「あなた方はこのマカトゥリンでは安全ですし、全く自由です。ただし、外には決して出ないで下さい」というのが私たちに与えられた注意だった。外もさして危険だとは思わなかったが、現地スタッフの方々がそれだけ外国人である私たちに気を使っておられるのがよくわかった。

マカトゥリンはすでに出来上がったコミュニティであったので、私たちに対するもてなしも非常に手厚かった。ホームステイにしてもパーティにしても、また日ごろの学生たちへの心配りにしても、実に暖かく、その点においても非常に恵まれたキャンプとなった。多くの学生がホームステイ先で家族同様の交わりと絆で結ばれ、建築を通して貢献した以上の恩恵をいただいたのではないだろうか。

現地スタッフの方々の気遣い、マカトゥリンの方々のもてなし、宗教部事務室スタッフの支え、そして参加メンバーによる支えあいによって、全員無事に充実したキャンプをやりおおせたことはありがたいことであった。